

396

93



始



396-93



山  
村

魏  
譯

キン  
小説集

叢  
文  
閣  
版

大正  
10 4 13  
内交

## 序

此書の出現を自分は多くの読者と共に喜び度いと思ふ。

自分はプーシュキンを實に愛する。プーシュキンの名を想つた丈で自分は詩の世界に入る。美の世界に入る。

プーシュキンの生涯そのものが既に詩である。その作にふれるとモツアルトの音楽を聴く如き想ひがする。

自分はプーシュキンのものを未ださう多く讀んでゐない。殊に傑作と云はれてゐるものを讀んでゐない。併し昔から好きだつた。プーシュキンは藝術家の中での藝術家、最も純粹な藝術家だ。實に純粹で、素直で、自由で、やさしく、美しく、新鮮で、芳香に満ち、春風の如く何處へでも入つて行き、そして觸れるものゝ心に喜びを撒き散らして行く。いろいろ生活上の事情もあつたのだらう。多くの作の中には少し梗概的に過ぎたやうなものもあるが、併しどれもこれも美しい。そして人を高尚な美の幽冥界へ拉し行かすにはゐない。ドラクロアの繪のやうだ。

本書の中に收められてゐる「驛長」杯の美は深いものと思ふ。眞の藝術と云ふものが實に誤解されてゐる事の甚しい今日の日本に斯の如き模範的藝術家の作品集が現はれる事は殊に意義多き慶事であると云はなければならぬ。

醜惡愚劣な自然主義より他に藝術はないと思つてゐる日本の作家達に少しプーシキンの垢でも煎じて飲ましてやり度い。

凡そ藝術觀の墮落してゐる事今日の如く甚しい時は史上にない。

もつとすつと前に早く現はれなかつたのが不思議であつたプーシキンの作品集が今日迄現はれずゐた事は何かの意味があつたのかも知れぬ、杯とも云ひ度くなる。

此書の出版を重ねて祝ひ度い。

此本よ。翅が生へたやうに日本中を飛び廻れ。

一九二一年二月五日

長 與 善 郎 識 す

## 序

千八百七十三年のことであつた。トルストイが偶然、プーシキンの物語の中のある未完の斷片で「客人は村莊へと集まつて來た」といふ書き出しのところを讀んだ時、「書き出しはこの通りでなくてはならぬ、プーシキンこそ吾々の教師である。いきなり諸者を事件の中心興味に誘つてゆき單刀直入に事件の中心に入つてゆくと感嘆した。そしてトルストイは直ぐ自分の書齋に閉ぢ籠つて「アンナ・カレニナ」の最初のところを書き出したといふ。この挿話は明らかに、露西亞詩界の中興の祖と仰がる、プーシキンの、散文に於ける價值を傳へるに役立つてゐるが、實にプーシキンの物語は、單純なる表白、寫實的なる描寫、眞摯にして且つ幾分ユーモラスチックな特色を持つ近代露西亞文學を作つたのであつた。

アレキサンダー・プーシキンは千八百〇三年に、莫斯科のある貴族の家に生れた。父は當時の貴族の典型的代表者の一人であつたが、母は美しい黒人で、ペートル大帝に仕へた黒人ハンニバルの孫娘であつた。プーシキンは母方の血を多く受けて、阿弗利加人種の特徴を彼の情熱的な性質の上に最も鮮やかに表はしてゐる。少年の頃彼は非常な讀書家で、家庭的な聽衆のために民俗物語を、書いてゐた。クロボトキンの言ふ所に據れば、プーシキンの祖母及び老乳母が、未來の詩人として

の彼にあつて力あつたことは、大したものであつたらしい。彼は聖彼得斯堡のツァールスコエ・セロ・ライシウムで教育されたが、そこを卒業するにさきだち、エカテリナ二世朝の詩界を代表したデルジャヴィアンがプーシキンを指してわが後継者と叫んだ程で、既に最も非凡なる詩人として廣く認められてゐた。ツァールスコエ・セロ・ライシウムを出てからは、情熱的性質に驅られて聖彼得斯堡及び莫斯科の社交界に身を投じ、懶惰な貴族の仲間とよもにあらゆる放埒を盡したが、その間も彼の藝術的欲求は絶えず彼に筆を執らしめてゐた。そして千八百二十年に最初の詩「ルストラア」と「ルドミイラ」を出した結果は、凄まじいものであつた。この美しい詩で書いた一編のお伽噺によつて、當時勢力のあつた偽古典主義は打破せられ、永久に勝利の月桂冠はプーシキンの頭上におちた。やがて彼が詩に、散文に文學的天才を發揮するにつれて、露西亞全體に亘つてかういふ叫び聲が起つた。「物語といふものはかういふ風に書くのが本當である」と。

然るにプーシキンの境遇は急變した。彼は聖彼得斯堡で政治青年等と交際するに及び、獨裁政治並びに農奴制に對する改革詩人として、最も痛烈極まる諷刺詩を作つたので、時の皇帝アレキサンダー一世の忌諱に觸れ、僅か二十歳にして南露の小都市キシニョオフへ流刑に處せられた。かくして彼は都の華やかな生活から離れたが、この無味乾燥な地に於ける彼の靜かな生活は、彼の心に著しい影響を與へた。彼は其處で文學上の研究をした。最初はバイロンの詩が、後にはシエークス

ピヤの戯曲が彼の仕事を鼓吹すると同時に模範となつた。彼はまた、クリミヤ及びコウカサスの方へ旅行する機會をも得て、その旅の土産に最も美しい抒情詩の幾篇かを携へて歸ることが出來た。千八百二十四年にいたり彼は政府の命によつて、中央露西亞に歸り、ブスコフにある彼の小領地ミハイロフスコエに住むことになつた。その翌千八百二十五年には、彼得斯堡に於て十二月黨が暴動を起したが、プーシキンはミハイロフスコエにあつて、盛んに秀れた作品を書いてゐた。そして彼の天才はいやが上にも發揚するばかりであつた。

その後間もなく彼は許されて聖彼得斯堡へ歸つた。そしてニコラス一世に信任せられて、遂にプーシキンは侍従にまで昇進した。けれどもこの並々ならぬ優遇も詩人の彼を喜ばすことは出來なかつた。彼はあまりに藝術家であつたがために、寧ろかゝる生活を嫌つた。千八百三十年には、ある有名な美人と結婚したが、その結婚はプーシキンに些かの幸福も齎らさなかつたやうに見える。不幸にして彼の天才は夫人に少しも理解されなかつた。そののみならず財政の惱みに壓迫されて、彼は益々憂愁と絶望とに襲はれるやうになつた。彼の作品は今までの明確さと力とを失ひ、彼の勇敢と自恃とは消え失せるにいたつた。千八百三十年のこと、彼はその夫人のことで、彼に劇しい嫉妬を醸した或る男と決闘して死んだ。その時彼は三十五歳であつた。

プーシキンの散文は詩に於けると同様に美しく、明るく、自由で、潑刺たる生氣に滿ち溢れ、

飾氣なく正直に感情が表白されてゐる。彼が書きたいかなる作物を讀んでも吾々は、そこに彼自身の反射を見、そして彼が個性を深く印刻してゐる彼の勇敢に驚嘆せずにはゐられない。美しき形式や巧妙なる表現法にいたつては、露西亞の讀者をして「實に綺麗に書いてある！これ以上に書くことは出来ない。またこれ以外に書いてはならない」と叫ばしめたのも道理である。近代露西亞文學の建設者の一人と言はれるジュコーフスキーは主にゲエテやシラーや、その他の獨逸人に影響を受けたのであつたが、プーシュキンは英國人、殊にシェークスピアやバイロンに負ふ所が多かつた。とはいへ、彼はあらゆる點に自國の特色を具へた純然たる露西亞人であつた。彼が露西亞の國民性をよく洞察し、それを擱んでゐたことは、藝術家として最も秀れてゐた點で、ドストエフスキーのプーシュキン演説によつても明白な事である。

プーシュキンは獨逸のゲエテ等と同じ最高の地位を占むる大詩人である。自分はプーシュキンに對する限りなき愛敬の念をわが日本の兄弟達に頌ちたいといふ一心から、この小説集の翻譯を企てた。本書に蒐めた所のものは、歴史物語「太尉の娘」をのぞいては彼の小説の全部であらうと思ふ。彼の小説については、作品そのものが語るにまかせて、これ以上自分は多辯を弄するのを差控へる。

終に臨みこの譯書を公にするにあつて、眞誠なる御援助を蒙つた長興善郎大兄、並に翻譯につ

いて種々お世話にあづかつた矢口達氏に衷心からの感謝の意を表し、併せて熱心と厚意とをもつて出版を引受けて下さつた足助素一氏、に厚くお禮を申し上げます。

大正十年二月十三日

玉川上水べりの假寓にて

譯者

目次

序	.....	長與善郎氏
序	.....	者
ドウブロフスキ	.....	一
ペートル大帝の黒奴	.....	一三五
令嬢田舎娘	.....	一九七
發射	.....	二三七
驛長	.....	二六一
キルヂヤリ	.....	二八三
吹雪	.....	二九五
エヂプトの夜	.....	三一九
スペードの女王	.....	三三九
棺桶屋	.....	三八七

ブーシュキン小説集





ド  
ウ  
ブ  
ロ  
フ  
ス  
キ  
ー

ド  
ウ  
ブ  
ロ  
フ  
ス  
キ  
ー

數年前に、キリラ・ペトローヅチ・トロエウロフと名乗る昔氣質な露西亞の紳士が、彼の所領地の一つに住んでゐた。彼の財産と名高い家柄と血統とは、彼の所領地の在る地方で彼に素張らしい勢力を興へてゐた。境遇によつて散々甘やかされてきた彼は、性來の短氣なあらゆる衝動に身をまかせ、彼の極めて狭い量見のあらゆる氣まぐれに身をまかせるのが常であつた。近隣の人達は彼のほんの些細な氣まぐれをも満足させようとしてゐた。そしてその地方の役人達は彼の名を聞いたゞけでも身慄ひするのであつた。キリラ・ペトローヅチは自分に敬意を表するすべてこれらの屈從的なしるしを受けてゐた。彼の屋敷は毎時も、閣下殿の無聊を娛めたり、彼の盛んな、時には騒々しい歡樂に加つたりする客人達で一ぱいであつた。誰一人として彼の招待を斷るほどの者もなく、期定された日にボクロフスコエ村へ出掛けるのを怠る者もなかつた。キリラ・ペトローヅチは非常な食道樂で、彼の體質が格別壯健だつたにも拘らず、食傷のために一週に二三度は惱んだものであつたが、晩には毎も微醉機嫌になつてゐた。

彼の家庭にゐるうら若い婦人達の中で、この五十親爺の色氣たつぶりの世話ぶりを免れる者といつては甚だ稀少かつた。それに家屋の一方の翼には、針仕事に雇はれた十六人の小娘が起臥してゐ

た。この翼の窓は丸太の門をもつて護られ、扉にはしつかり錠が下ろされてあつて、錠はキリラ・ペトローヅチに保管されてゐた。若い幽閉者達は定まつた時間になると、二人の婆さんの監視のもとに花園へ散歩に行くのであつた。キリラ・ペトローヅチは彼らの中から順々に娶つてゆくので、新しく雇れた女がその仕事の代理をするといふ風であつた。彼は耕作人や家人を苛酷な、そして專横な振舞で接らつてゐたが、それにも拘らず彼らは非常に忠實であつた。彼らは自分達の主人の富や權力について自慢するのが好きであつた。そして主人の有力な保護を信頼してさへゐれば、彼らは近所界限で非常に幅が利くのであつた。

トロエウロフの常務は、彼の廣大な管轄區域を馬車で巡廻したり、長びく酒宴に夜を徹したり、又は殊更臨機應變に案出した駄洒落を言つたりするのにあつて、其犠牲となるのは大概新しく知己になつた人達ではあつたが、唯一人——アンドレイ・ガヴリロヅチ・ドウブロフスキー——をのぞく他は古い知己であつても、いつも遇れてゐるといふわけにはゆかなかつた。

このドウブロフスキーといふ近衛の退職中尉は、キリラ・ペトローヅチの最も近い隣人で、七十人の農奴を有つてゐた。上流社會の人々と交際するにも尊大なトロエウロフは、ドウブロフスキーの資産が微々たるものであるにも拘らず、彼を尊敬してゐた。二人は勤務中に親しくなつたので、トロエウロフは經驗上、彼の性質が短氣で、果斷的である事を知つてゐた。千七百六十二年の

(譯註)ペートル三世の廢位と暗殺、併)あの有名な事件は永い間彼らを引離してゐた。トロエウロフはダ  
シエロフ皇女(千七百六十二年の革命に於ける皇)の縁者だといふので、昇進が速かつた。しかし、ドウブ  
ロフスキーは節約して蓄めた資産を持つて、餘儀なく職を退き、今現に彼が住んでゐる村に落着い  
たのであつた。この顛末を聞いたキリラ・ペトローヅチは、彼の保護をしたいと自ら申し込んだ。  
しかしドウブフロフスキーはそれに感謝はしたが、貧窮と獨立とを保つてゐた。五六年過ぎて、トロ  
エウロフは將官の位を得て彼の所領地に隱退したので、兩人は茲に再會して、互に喜び合つた。  
それからといふもの彼らは互に毎日逢つてゐた。そして、一生の中決して自分から誰をも訪ねて行  
つたことのないキリラ・ペトローヅチが、全く當然な事とは言ひながら、その舊い同僚の小さい  
家へ行くのであつた。同じい時代に、同じい社會階級に生れたのと、同じい教養を受けてゐたのと  
で、彼らほどことなく互の性格や嗜好が似てゐた。ある點に於ては彼らの運命もよく似てゐた。つ  
まり兩人はともに戀愛から結婚し、兩方ともに間もなく鰥夫となつて、兩方ともにたつた一人つゝ  
の子供が残つてゐた。ドウブフロフスキーの伴は、聖ペテルブルグに游學してゐた、そしてキリラ・  
ペトローヅチの娘は父親の監督のもとに養育されてゐた。で、トロエウロフは屢々ドウブフロフス  
キーにかう謂つた。

「ねえ、アンドレイ・ガヴリロヅチ君、君のダオロドカ(ウラディミ)さんが出世するやうなことで

もなつたら、鷹のやうに素かんびんであつても、マーシヤ(マリア或はマ)を嫁にあげるだらうにね。」

アンドレイ・ガヴリロヅチはいつも頭を振つて、大抵かう答へるのであつた。

「いゝえ、キリラ・ペトローヅチ君、私のウオロドカはマリア・キリロフナさんにやあ、釣合はな  
いよ、あれの様な貧乏貴族は、甘やかされた御婦人のお守役になるよりか、一家の主婦となるやう  
な、小華族の貧乏なお嬢さんと結婚する方がずつとましてせうからね。」

人は誰も彼も、尊大なトロエウロフと、あのみすぼらしい隣人との間に、良く意志が疏通して  
ゐるのを羨んでゐた。そして、キリラ・ペトローヅチの饗應の席でドウブフロフスキーが自分の意見  
を率直に述べたり、主人の説に對する反對説を躊躇なく主張したりする後者の横柄さを不思議かつ  
てゐた。なかには彼の模倣まねをしてみる者や、二人に限つて許された範圍を越えやうとさへする者も  
あつた。しかしキリラ・ペトローヅチは以後斷じてそのやうな試みを一切繰返さうとは望ませない  
までに懲るのであつた。獨りドウブフロフスキーのみは、この普通一般の規範外であつた。ところが  
思ひがけぬ事件が起つて、これらすべてを混亂し、さうして變更してしまつた。

秋の初めのある日のこと、キリラ・ペトローヅチは狩獵に出掛ける用意をしてゐた。前の晩に獵  
人や獵犬守には、翌日の朝のかつきり五時に用意を整へておくやうにとの命令が下つてゐた。天幕  
や食料は豫じめ、キリラ・ペトローヅチが中食をする筈の場所へ運んでしまつてあつた。主人と客

大連とは狗小屋へ行つた。そこには五百匹以上の兎獵の犬や普通の獵犬が、犬の言葉でキララ・ペトローヴツチの鷹揚なのを賞め讃へながら、贅澤に、しかも大事に飼はれてゐたのだ。そこには亦、獸醫のデイモシユカの監督のもとに、病犬の爲めの病院があり、牝狗がその仔を育てたり乳を飲ませたりするところの隔離所もあつた。キララ・ペトローヴツチはこの壯大な設備が自慢で、少なくとも二十遍は誰も彼も見なかったことのある客人達の前で、それに就て誇る機會を決して失はなかつた。彼は客人達に取巻かれながらデイモシユカと獵犬係長とに案内されて、所々の區劃の前で鳥渡立留つては、患つてゐる犬の健康を尋ねたり、多少嚴重に注意して呉れと云つたり、或は犬の名を呼んで狂々しく話しかけたりなどして、小屋中を歩き廻つた。客人達はキララ・ペトローヴツチの狗小屋に夢中になるのを義務のやうに考へてゐた。ドウブロフスキーは獨り黙りこくつて、眉を顰めてゐた。彼は熱心な遊獵家だつたけれども、近來の財政ではたつた二匹の獵犬と番人一人が置ける位のものであつた。で、彼がこの宏大な設備の光景を見ては、ある嫉妬の情を禁じ得なかつた。

「おい、どうして君はむづかしい顔をしてゐるんだい」と、キララ・ペトローヴツチは彼に訊いた。

「僕の狗小屋が、面白くないのかね」

「さうぢやない」と、ドウブロフスキーは突慥に答へた。「狗小屋は素張しいものだが君の家内の者が、この犬のやうに暮してゐるかどうか、疑はしいもんだね、」

番人の一人は憤然とした。

「神様と大旦那様とのお蔭で、不服つたら何一つございませぬやな」と、番人は謂つた。「眞實のところをお話してみりや、ある貴族様などは御自分のお屋敷と、この狗小屋の一區劃とをを交換なすつたつて、悪くはございますまいがな、さうなりやあ、その方々は一層うまい物を食べたり温たまつたりされますからね、」

キララ・ペトローヴツチは召使のこの傲慢な言ひ草に吹き出した。で、客人達も彼に倣つて笑つてはみたが、しかし彼らは獵犬守の駄洒落が自分達にも當つけられてゐるらしく感じた。ドウブロフスキーは眞蒼に顔色を變へて、一言も口をきかなかつた。その瞬間、生れたての仔狗を幾匹か入れた籠がキララ・ペトローヴツチのところへ持ち來たされた。彼は敷藥の中から二匹選んで、殘餘は河へ捨てゝしまへと吩咐けた。その際にアンドレイ・ガヴリロウツチは誰の眼にもとまらないやうにして、姿を消した。

客人達とゞもに狗小屋から歸つたキララ・ペトローヴツチは、晚餐の席に着いて、始めてそこで、ドウブロフスキーのゐないのに氣が附いた。アンドレイ・カブリロウツチ様はお歸りになりましたと召使達は彼に告げた。直ちにトロエコウロフは、彼に追ひついて間違ひなく連れ戻るやうに命じた。彼はこれまで一度もドウブロフスキーを伴れないて獵に行つたことがなかつた。といふのはドウブロ

オスキーが犬にかけては何事によらず、見事な、経験のある玄人<sup>ウラナヒ</sup>で、且つ又、遊獵に關して凡て起り相な議論に際しても斷じて誤ることのない審判者であつたからである。彼のあとから馬で追かけた召使は、彼らがまだ食卓についてゐる間に歸つて来て、アンドレイ・ガブリロウツチは彼の言葉に耳を藉さうともせず、引返さうとしなかつたといふ事を主人に復命した。キリラ・ペトロウツチは毎のやうに、酒に昂奮してゐたので、非常に憤慨しながら、アンドレイ・カヴリロウツチがもしもすぐボクロフスコエ村へ引返してきて夜を明かさないとすれば、君との友誼は永久に絶つからと傳へるやうに、再び同じ使者を遣はした。その下僕は又も馬で駈け出して行つた。キリラ・ペトロウツチは食卓から立ちあがつて、客人達をうつちやつた儘、寢間に退いた。

翌日になると彼は何よりもまづ、「此處にアンドレイ・カヴリロウツチが來てゐるか」と訊いた。三角形の封筒が彼に渡された。キリラ・ペトロウツチはそれを、自分の執事に吩咐けて大きな聲で讀ませた。彼が聞いた所のは次のやうである。

「足下！

「犬守のバラモシユカを私のところへ謝罪<sup>オヤマシ</sup>せに寄越して下さる迄は、私はブクロフスコエ村へ戻らうとは思はない。私は彼を罰するか、或は許すかの特權を握つてゐるのだ。私は幫間者ではない、超

家の紳士なんだから、君の下僕達の悪巫山戯を我慢することも出来ぬし、又君に、彼らと同様に看做されたくもないのだ。君の従順な奴隷たる

「アンドレイ・ドゥブロフスキー」

禮義に關する今時の思想に依れば、かやうな手紙は、甚だ不穩當であつたに違ひない。キリラ・ペトロウツチを苛立たせたのは、この奇妙な文體のためではなくて、その内容のためであつた。

「何だ！」と、トロエコウロフは寢床から裸足で跳ね起きながら叫んだ。「俺の家の者を謝罪せに寄越せつて！ それに、罰しようが許さうが自由だつて！ 何と思つてゐるんだ？ 相手を誰だと思つてゐるんだ？ 俺がひとつ懲らして遣る！ このトロエコウロフに逆つたらどんなものか、知らしてやる！」

キリラ・ペトロウツチは自分で着物をきて、いつものやうに意氣揚々と獵に出て行つた。しかし獵はうまくゆかなかつた。その日一日かゝつて兎かたつた一疋見つかつたばかりで、それも遁がしてしまつた。天幕の下での野宴もまた不首尾であつた、否、少くともキリラ・ペトロウツチには愉快ではなかつた。彼は料理人に當り散らしたり、客を無愛想にしたりした。そして歸り路は御伴の聲を引つれて故意々々ドゥブロフスキーの領地を馬で通つたのである。

數日過ぎた。が、二人の隣人の間の怨恨は晴れなかつた。アンドレイ・ガヴリロヴツチはもはや、ボクロフスコエ村へ歸つては來ず、キリラ・ペトロヴツチもドウブロフスキーが居ないので退屈を感じながら、極めて踏みつけた言ひ振りで彼の痼癩を洩してゐたので、それが近隣の貴族連の熱心のお蔭で、いろいろ訂正されてドウブロフスキーにまで達して來るのであつた。新しい出來事が、其和解の最後の希望を断ち切つた。

ある日、ドウブロフスキーが自分の小さい所領地を巡廻して、赤楊の森に近づいて行つた、するとその時、斧を打込む音と、それから一分の間を以て木の倒れる凄まじい音とが聞えた。彼はその場所へ急いだ。そしてボクロフスコエ村の百姓達が材木を盗み出さうとしてゐるのを發見した。ドウブロフスキーの姿を見ると、彼らは逃げ出した。けれどもドウブロフスキーは取者の助力で、彼らのうちの二人を捕へ、それを縛つてわが家へ連れ戻つた。剩へ、賊の騎つてゐた二匹の馬も征服者の手に落ちた。

ドウブロフスキーは非常に憤慨してゐた。これまでは、トロエウロフの治下にゐる有名な盜賊は、自分達の主人と彼との間の友誼を聞き知つてゐたので、ドウブロフスキーの領地の疆界内では斷

じて顯著を働くやうなことはしなかつた。ドウブロフスキーは今や、彼らが自分と自分の隣人との仲に起つた不和につけ込んだのだ、といふことを悟つた。で、彼はあらゆる兵法上の考案とは反對に、自分の捕虜を、彼らが森で蒐集めた小枝で打ち懲らしめ、馬は勞役に送つて、自分が所有する牛馬の中に組み入れようと決心した。

かうした處分の報告が、ちやうどその日に、キリラ・ペトロヴツチの耳に達した。彼は憤激のあまり殆んど狂亂するほどであつた。そして、最初の瞬間の彼の感情では、自分の召使を皆寄せ集めて、キステネフカ村(かう彼の隣り村を名づけてゐた。)を攻撃させ、悉皆土壤に全滅させ、地主をその屋敷に攻め圍んでやりたいと思つた。かうした處業は、彼として珍らしい事では無かつたのであるが、その思想はちぎりに別な方面に轉じた。廣間の中を彼地此地どしり／＼と重い足を運びながら、時々窓から戶外を覗いてゐた。と、門前に一臺の三頭馬車トロイカが駐つたのが眼についた。皮の旅行帽に、毛の立つた羅紗の上衣を着た一人の男が、馬車から降りて、執事が住んでゐる翼室の方へ進んだ。トロエウロフには、顧問役のシヤバシュキンであるといふことが分つたので、自分の所へ彼を通すやうに吩咐けた。一分間たつてシヤバシュキンは、キリラ・ペトロヴツチの前に立つて、繰返しお辭儀をしながら、自分に言はれるに違ひないところの事を聞かんものと、恭々しげに待ち構へてゐた。

「こん日は、——いつたい、君はどうしたんだ。」と、トロエウロフは謂つた。「どうして君は来たんだい。」

「閣下、市街に参らうと存じまして、」と、シヤバシユキンは答へた。「何か御用でもおありなさりはしまいかと存じまして、イヴァン・デムヨノフに聞きに参つたんです。」

「よい機会に、君は来て呉れたね——どうだい、わしは君に用があるんだがね、一杯ブランディでも飲んで、わしの話を聴いて呉れ。」

かうした友達のやうな、快よい歓迎は、顧問役のシヤバシユキンを驚かした。彼はブランディを傾けながら、極力注意を拂つて、キリラ・ペトロロウツチの言葉に耳を傾けた。

「わしに一人の隣人があつてのう」と、トロエウロフは謂つた。「ちつぽけな地主で、無禮な奴なんだ、それで領地を取りあげてやりたいと思ふのだが……君はどう思ふな？」

「閣下、何か書類でもございますか、——」

「莫迦言つちやいけない。兄弟、(露西亞の上役はその下役を呼び掛けるのに屢々かういふ言葉を使つてゐる) どうして書類のことなんか言ひ出すんだ、かういふ場合にする仕事は、證據書類があらうとあるまいと、領地を取りあげて了へばいゝんだよ、だが、待てよ！ この領地はずつと前に一度、わしの所有だつたんだ、それがスピイチン某それがしといふ者を買ひとられて、それからドウブロフスキイの親父に賣り渡されたんだ、そんなこ

とから勘考がつかないもんかのう？」

「難かしいでございませうぜ、閣下、何しろ法律に従つて嚴密に賣つてしまつたんでは。」

「勘考してくれ、兄弟、極力骨を折つてやつてみて貰ひたいものだ。」

「もしも、閣下、まあ例へて言つてみますれば、その男が領地を保つてゆく價值のある書類を、どうにかして、貴方の隣人から手にお入れなすつたら、さうしたら屹度——」

「分つたよ、だが、運の悪いことにやあ、みんなその書類は火事の時に焼けて了つたんだ、」

「何んと仰しやいます！ 閣下、その書類が焼けて了つたんですつて——まあ、そんな好いことが又とありませうか、そんな場合には法律によつて、訴訟の手續をなさいました、些しの疑ひもなく、貴方はすつかりご満足なさいませうよ。」

「さう思ふかい？ 宜し、引受けてくれ、わしは君が一奮發してくれるのを信頼するよ、そして必ずお禮するから、それは安心して居ていゝよ。」

シヤバシユキンは殆んど地面まで頭をつけんばかりにお辭儀をして出て行つた。その日から彼は、委托されたその仕事に對して、全精力を注ぎ始めた、が、敏捷な彼の行動は感謝されるもその管で、全二週間経つてドウブロフスキイは、街から彼に出廷せよ、キステネフカ村を彼が保持する資格のある證據書類を提出せよ、といふ召喚状を受取つた。

アンドレイ・ガヴリロヴッチは、この思ひがけない請求にひどく驚いて、即日、かなり荒々しい返事を認めたが、その書中に彼は、キステネフ村は父が死んでから自分の所有になつたこと、自分は世襲權に依つてそれを保つてゐること、トロエウロフがこの事に干與する權利は一切無いこと、さうして、自分の所有權に就ての偶然的な要求はすべて瞞著と詐偽との結果に外ならないことを辨明した。ドウブロフスキーは訴訟事件にはまるで經驗がなかつた。彼は大概常識の命ずるまゝに従つてゐたが、その常識なるものがそも／＼危ぶなかしいそして殆ど毎時不十分な指導者であつたのである。

この返事はシャバシキンに甚だ痛快な印象を與へた。彼はまづ最初に、ドウブロフスキーが法律に關してあまり精通してゐないこと、そして次には、かやうな情熱的な、無分別な男をひどく不利益な地位に立たせるのは難かしくあるまいといふことを知つたのであつた。

アンドレイ・ガヴリロヴッチは身に振りかゝつた問題を、一層注意深く熟考した揚句、もつと詳しく返答する必要があるのを悟つた。彼は十分に適當な手紙を書いた。けれども結局この辨明も亦不十分に歸した。

この事件は長引いた。自分自身の正統を信頼してゐるアンドレイ・ガヴリロヴッチは、さしてその事件について心配もしなかつた。彼は自分の周圍に金錢をばら撒く方法も、意嚮も持つてゐなかつた。そしてそんな連中の慾得づくの根性を嘲笑しだした。人を詐偽の犠牲にしようといふ思想

にいたつては、全然彼の腦裡に浮んだことがなかつた。一方トロエウロフの方でも彼のたくらんだ訴訟事件で勝たうとは夢更考へてはゐなかつた。シャバシキンだけがその事件を一手に引受けて、代理となつて、裁判官達に賄賂を使つたり、威嚇したり、法令の意味を極力こぢつけて引用したり、解釋したりしてゐた。

遂に千八百一一年の二月九日になつて、ドウブロフスキーは街の警察から、彼——ドウブロフスキー少佐とトロエウロフ少將との、所有權争ひの件に關する判決を聴くため、一つには陪審官の判決に認めぬ調印をするために地方裁判所へ出頭せよ、といふ召喚狀を受取つた。その同じ日にドウブロフスキーは街へ出掛けた。途中で彼はトロエウロフに追ひついた。彼らは互に横柄に睨み合つた。そしてドウブロフスキーは相手の顔に意地の悪い微笑の浮んだのを見た。

街へ著くと、アンドレイ・ガヴリロヴッチはある懇意な、商人の家に泊り、その家人と一夜を明かした。そして翌朝彼は法廷に出頭した。誰一人彼に注意を拂ふ者もなかつた。そのあとからキララ・ペトローヴッチが到來した。裁判官達は最も深い謙遜のかぎりを盡して彼を迎へた。さうして彼の地位や年輩や體格に對しての尊敬から、一脚の肘掛椅子が持ちこたされた。彼は腰を掛けた。が、アンドレイ・ガヴリロヴッチは壁に凭り掛つて立つてゐた。深い沈黙が引き續いて起つた。かくて書記官の判決文を読み下す朗々たる聲がしだした。



書記官が読み終つてしまふと、陪席判事が立ちあがつて、トロエウロフに向ひ、低い聲を以て、彼に差出した書類へ署名してくれと頼んだ。トロエウロフは全く勝ち誇つた體で、ペンを執りあげて、いかにも満足げに判決文の下へ署名した。

今度はドウブロフスキーの番になつた。書記官は書面を彼に渡した、けれどもドウブロフスキーは身動きもせずに頂垂れた儘立つてゐた。書記官は勸告を繰返すのであつた。「もし貴方が心に、この判決は正統だと思つたならば、或は地方裁判所の判決に對して控訴しようと思ふならば、全く申分がないとか、それとも絶対に不服だとか署名さつしやい。」と。

ドウブロフスキーは黙つてゐた。……俄かに彼は頭をあげ、眼を輝かし、足を踏み鳴らして、自分の身がのめるほどの力で書記官を突き飛ばし、インキ壺をひつ掴んで、陪席判事目がけて擲つけた。そしてどら聲を張りあげて叫んだ。

「えゝ糞つ！ 貴様らは、キリスト教のお寺を畏れないんだな！ 行つてしまへ。異端者ども！」  
それから、キリラ・ペトロ・グッチに振向いて、

「獵人奴らが教會へ、獵犬を連れ込むなんて！ 獵犬どもが教會を駆け回り廻るなんて！ 閣下、と、彼は續けて、「こんな事を今までに聞いたことがありますかい。だから、わしが今其奴らを懲らしてやるんだ！」

居合はす人々は身を慄はした。警官達は騒ぎを聞きつけて飛び込んで來た。そしてやつこのことで彼を取り押へた。彼らは戸外に、彼を連れ出して櫓に乗せた。トロエウロフはそのあとから、法廷の人々に見送られながら出てきた。ドウブロフスキーの突發的な狂暴は、トロエウロフの想像に深い印象を與へたのだ。トロエウロフが感謝するのをあてにしてゐた裁判官達は、彼から、たつた一言の愛想のいゝ言葉をすらかけて貰へなかつた。彼は早速ポクロフスクエ村に歸つたが、彼の怨恨は少しも晴らされなかつたばかりか、却つて密かに良心に惱まされるのであつた。ドウブロフスキーはといへばその間、寢床の上に横はつてゐた。田舎醫者は「——と云つても木偶像ではなかつたが——彼に蛭と芥子泥とを利用して血を吸ひ出させた。その日の暮方、彼はよくなるのを感じ始めた。で、翌日彼は、キステネフカ村を指して出立したが、そこはもはや彼の所有ではなかつた。

三

幾らかの月日は経過した。しかし、打撃を受けたドウブロフスキーの容態には、快復の徴候が表はれなかつた。實際のところ、狂亂的な發作こそ再發しなかつたとはいへ、彼の體力は限立つて衰へていつた。彼は以前の業務も打忘れ、殆んど自分の居間に閉ぢ籠つて、幾日も幾日も自分自身の追想に魂を奪れてばかりゐた。曾ては彼の伴を世話したことのあるエゴローフナといふ親切な老婆

が、今では彼の看護婦になつてゐた。彼女は食事や寢床に就く時刻がくると、彼に氣を附けて物を喰べさせたり寢床に寢せつけたりして、子供のやうな彼の面倒を見てゐた。アンドレイ・ガヴリロヴチは彼女の言ふがまゝになつてゐた。そしてエゴロフナの他には誰も傍へ寄せつけなかつた。彼は訴訟の事件について考へたり、或は財政を整理したりするやうな容態ではなかつた。で、エゴロフナは、聖・ペテルブルグに設けられてある近衛歩兵聯隊に勤務中の若いドウブロフスキーに、一伍一什を通知する必要があるのを見てとつた。こんな譯で彼は帳簿の紙を一枚引裂いて、キステネフカで唯一人文筆のたつカーリトンといふ料理人に手紙を口授させ、それを即日街のポストに入れて遣つた。

しかしながら、讀者諸君はこの物語の眞の主人公をお求めになる時分である。

ウラディミル・ドウブロフスキーは士官學校で教育されたが、そこを卒業すると、少尉として近衛に這入つてゐた。彼の父は、彼に身分相應な生活をするのに足るだけのものは何ものに依らず出し惜しみをしなかつたので、この青年は自分が豫期する權利より以上の多額を自家から貰つてゐた。輕卒な、虚榮心に富んだ彼は、豪奢な風習に溺れ、負債をこしらへ、そして行末の事などはさまで思ひ患はなかつた。自分は早晚資産家の花婿になれるに違ひない、といふ思考が時々彼の心の中を掠め去るのであつた。

ある晩、五六人の士官が彼と一緒に、寢臺の上に寢轉んだり、琥珀の吸口のパイプを喫つたりしながら時間を潰してゐると、彼の從卒のグリーンシャが、たちまち青年達の注意を引くやうな封筒と宛名の、一通の書面を彼に届けた。彼はそれを急いで展いて、次のやうに讀んだ。

『ウラディミル・アンドレイヴチの旦那さま、貴方の古い乳母なる妾が、御父上さまの御容體について謹んで御通知申し上げます。御父上さまは非常にお氣の毒な御方で、時々讒語を仰しやいまして、一日ぢう愚かな子供——しかも生命も死も神様の御手にある——のやうに坐つたまふていらつしやいます。妾の元氣のいゝ小さな鷹さまよ、どうぞおいて下さいまし。ついでにはペソチノエ村お迎へ致すやうに馬を送つて置ませう。承れば政府では、妾どもをキリラ・ヘトロローヴチ・トロエウロフにお引渡し遊ばすお所存だとか申しますのは、もともと妾どもはトロエウロフの所屬だからださうです。けれども、妾どもはいつだつて貴方さまの所屬なのでございまして、妾どもに物おぼえがつかしまして以來、常にさう聞かされております。貴方は聖・ペテルブルグにお滞在の中にこのことをば、皇帝陛下に上奏遊ばすかも知れませんが、さうなれば、陛下は妾どもを無法な仕打の儘に打捨てはおゝきになりませんわ。雨が今日で二週間も續いて降つてをります。そして羊飼ひのロディアは聖みける祭の日に歿しました。グリーンシャには私が母としての志の品を送つてやりま

した、彼は貴方に能くお仕へ致して居りますか、貴方さまの忠實な乳母より

「アリナ・エゴローフナ・ボウヂレラ」

二〇

ウラディミル・ドゥブロフスキーは非常に惑亂して、これらの多少解し難い行は幾度も讀み直した。彼は幼少の頃に母を失ひ、八歳の時また聖ペテルブルグに遣られたので、殆んど父をも知らなかつた。それにも拘らず彼は、父に對して空幻的な愛著を持つてゐた。そして家庭生活の愉樂といふものを享くる機會が餘りなかつたので、従つて彼は家庭生活を何よりも一層慕はしく思つてゐた。父を失ふといふ思慮は、非常に彼には苦痛であつた。で、乳母の手紙から憐れな病身者の症状を推量して、彼は悚然とした。邊鄙な片田舎に獨り取殘されて、頼間な老婆や下男の間で災厄に脅かされ、そして精神的にも肉體的にもともに苦悶の中に介抱もなく絶命する父を、彼は想像してみた。ウラディミル・アンドレイヴツチは自分の恕し難い怠慢を心に責めた。永い間父親の近況を丸で知らなかつた彼は、父が管轄地を巡視したり或は支配したりしてゐるものとばかり想つて、彼の安否を尋ねようといふ考へさへも持たなかつたのだ。その夜の中に、彼は賜暇を得るに必要な手続きを了した。そして二日の後には、彼は忠僕のグリーシヤを伴つて驛馬車で出立した。

ウラディミル・アンドレイヴツチは、キステネフカ村へ乗り換へる驛場に近づいた。彼の心は物悲

しい豫想で一ぱいになつてゐた。彼はもはや父が生きてゐないのではあるまいかと心配してゐた。彼は自分を待ち受けてゐる村のわびしい生活を心に描いた。寂愁、孤獨、自分のまるで知らない仕事の不便や監督といふやうなものを。驛場に著くと、彼は驛長のところへ行つて、新しい馬を頼んだ。驛長は彼の行先を訊くと、キステネフカ村から届けられた馬が、今日で四日間も彼を待つてゐるのだと話した。間もなくウラディミル・アンドレイヴツチの前へ老馱者のアントンが出てきた。アントンは以前に彼を厩へ案内したり、彼の小馬の世話をして呉れたりしたことのある男であつた。アントンの兩眼は若旦那を見ると泪に充ちた。そして地面までも低くお辭儀をしながら、大旦那様はまだ御存命でゐらせられます、と謂つて、それから、急いで馬に馬具をつけた。ウラディミル・アンドレイヴツチは薦められる朝飯をも斷つて、出立を急いだ。アントンは國道に沿つて馬車を走らせた。そして會話が彼らの間に始まつた。

「ね、どうか、聞かせてお呉れ、アントンや、親爺とトロエウロフとの仲は、どうなつてゐるんだい。」  
「神様が御存じてございますよ、若旦那のウラディミル・アンドレイヴツチ様、大旦那様はキリラ・ペトロヴツチとお争ひなすつた相でございます、そしてキリラ・ペトロヴツチは、お白洲へ大旦那を召喚したとかいふ噂でございますよ、キリラ・ペトロヴツチはいく度も自分が裁判官になつた身でございまするのにねえ、かうして旦那様のなさる事を、兎や角言ふなあ、召使ひ風情のする業

「ぢやございませぬけれど、キリラ・ペトロウヅッチなんかとお争ひなさるのは、大旦那様の不利益だつたんでございますよ、あんな奴を相手になさらなければ宜かつたんでした。」

「ぢや、なんだね、キリラ・ペトロウヅッチは、お前達の仲間て勝手な振舞をしてゐるやうだね、」

「ほんとうに、その通りです、旦那様、あの人はお役人達には一向おかまひなしてございますのに、警部長の方であの人の使ひ走りをしてゐるんです、貴族方はあの人を尊敬して、あの屋敷へ多勢行くのです、それといふのも諺にいふ通り『グリ鉢(譯註―動物に與る飲食物の器)』のある所には豚もをる』とか申しますやうになあ。」

「我家の領地を取りあげようとしてゐるつていふのは、ありや眞個かい。」

「お、旦那様、わしどももさう聞いておりますだ。三四日前に、ボクロスコエ村から來てゐた寺男が、わしどもの監督者のお家で洗禮式があつた折に謂ひましたつけ、『お前さん、樂みはできるうちにやつて置くもんだよ、キリラ・ペトロウヅッチ様に召抱へられるやうになつちや、そんな機會はめつたにやないだらうからなあ、』つてね。すると、鍛冶屋のニキタがその男に謂ひましたよ。『サ、ダイリツチさん、お前さんの子供さんの名づけ親に心配をかけるもんぢやない。お客さん方をお騒がせするものぢやないよ。キリラ・ペトロウヅッチ様はあれだけの人だよ、アンドレイ・ガヴリロウヅッチ様だつても同じことだ――皆んなわしどもは神様の、いや陛下様のものなんだ』けれど他人の

口に釘をはめるわけにや參らないものでございませぬあ。」

「ぢや、お前はトロエコウロフの抱へにならうとは思はないのかね。」

「キリラ・ペトロウヅッチの抱へにだつて！ 御免を蒙りませぬあね！ あそこの奴ら、どうもひどい物を喰はされてゐますだ、でもし新奇の者が雇はれたら、皮ばかりでなく、肉までも引剥かれるでせうぜ、あゝあ、神様、アンドレイ・ガヴリロウヅッチ様の御壽命を永くお恵み下さいませやうに。けれども萬が一にも、神様がお引とりなすつたらば、私どもは、恩人の貴方様をのぞいちやあ、誰を頼りにいたしませう、私どもをお見捨て下さいませ、さすれば、わしどもは貴方様のお味方をいたします。」

かう謂ひながらアントンは鞭を揮り廻して、手綱をしごいた。そして馬は跑を踏んで駈け出した。老奴者の誠意に感動したドウブロフスキーは黙つて、回想に耽つた。一時間以上も過ぎた。不意に「あそこがボクロスコエ村です！」といふグリーンシャの叫び聲が彼を喚び醒した。ドウブロフスキーは頭をあげた。彼らは今しも廣い湖水の堤に沿つて進んでゐるところであつた。その湖水からは細い小川が、丘の間に蜿蜒つて流れてゐた。ある丘の繁茂つた緑の森の上には、廣大な石造の家の綠色屋根と望閣樓とが、古めかしい鐘樓の五つの内屋根の寺院と一しよに聳え立つてゐた。あたりには花園や、井戸のある鄙びた茅屋があちこちに散在してゐた。ドウブロフスキーはこれらの光景を眺めた。彼はまさしくあの丘の上で自分より二つ年下の、子供のマーシャ・トコエコウロフと

遊んだことがある事や、マーシヤ・トルエウロフはその時ですら立派な美人として頼母しかつたことなどを憶ひ出した。彼はアントンに彼女のことを訊ねたくてならなかつたが、ある羞恥が彼を押しとどめた。

館に近づくとつれて、彼は園の木立の間に白い衣物がちらほらするのが眼についた。その瞬間にアントンは馬に鞭をあてた。そして普通一般の馭者にも田舎馭者にも共通な虚榮心から馬を追ひ立て、素晴らしい速度で橋を渡り、園を通りすぎ、村落を出て、彼らは丘を登つた。そしてウラデイミルには、樺の木のこんもりした森と、左手の、廣々とした場所に赤屋根の小さな灰色の家とが眼についた。彼の胸はとどろき始めた——彼の前には父の賤しい住ひのキステネフカ村があつたので。

約十分ばかりして、彼はその中庭に引き込まれた。彼は名状し難い感情をもつて、周囲を見廻した。彼がこの故郷の地を最後に見をさめてから、十二年を経過してゐたのである。恰度その當時板塀の近くに植わつてゐた小さな樺の木は、今ではもう高い木となつてゐた。庭園も以前には、形の正しい三つの花壇で飾られて、その合間々々には念入に掃除の行き届いた廣い路がついてゐたが、今は牧場に變つてしまつて、繋がれた馬が草を喰つてゐた。犬が吠え出したが、アントンを見ると、黙つて、房々した尾をふり出した。召使どもは家から飛び出してきて、歡びを表はす大きな聲をあ

げながら若旦那を取圍んだ。彼は熱狂した群集をやつとの思ひでおしわけて通つた。彼は古びた階段を駆け登つた。廊下で彼はエゴロフナに出逢つた。エゴロフナは涙ぐむて彼を抱擁した。

「どんな鹽梅だ、どんな鹽梅だ、」と、彼は善良な老婆を胸に抱きしめながら繰り返した。「ねえ、お父様は？ どこにゐらつしやるんだ？ どうしてゐらつしやるんだい？」

その瞬間に蒼白い、瘠せほゝけた、脊の高い老人が闇衣に帽子を冠つたまゝ、運ぶ足もむづかしく引ずりながら部屋へ這入つてきた。

「ヴォロドカはどこにゐる？」と、その老人は弱々しい聲で謂つた。そして、ウラデイミルは愛情深い感情をもつて父を抱擁した。

その歡喜は、病める人にあまりに烈しく、たへられなかつた。父は力がゆるんで、兩足はくず折れた。そして息子が彼を支へなかつたら、彼は倒れたに違ひない。

「どうして、まあ、貴方、お床から起きてゐらつしやいましたの」と、エゴロフナは彼に謂つた。「貴方、大旦那様はご自身で立つことがおできにならないのでございます、それなのに、達者な者のする事を同じやうにしたがつてゐらつしやいますのよ。」

老人は寢間に連れ戻された。彼は息子と話をしようとしたけれども、自分の思想を纏めることができなかった。彼の言葉はどれもこれも連絡がなかつた。彼は口を噤んで、うと／＼とした。

ウラディミルは父の容態に心を撃たれた。彼はこの寢間に落着いて、父と二人つきり残したまゝにして置いて呉れと頼んだ。召使達はこの言葉に従つた。そして皆の者はグリーンシャの方に振ぢむひて、女中部屋へ行かうと、伴れ去つた。彼らは女中部屋で素朴な慣例によつて、心からなる歓迎をグリーンシャにしたが、その間も彼らは責問したり挨拶したりして彼を弱らせた。

## 四

彼が到着してから数日たつて、若いドゥプロフスキーは家事に注意を向けようと思つたけれども、彼の父は、彼に必要な説明をしてくれるやうな容態ではなかつた。それにアンドレイ・ガヴリロヅチには信任ある顧問もなかつた。書類を調べてみたが、ウラディミルは、かの顧問からきた最初の手紙と父のそれに對する答辯の亂雑な下書とを見出したゞけであつた。これらのものでは別に訴訟事件に關する明確した觀念は獲ることが出来なかつた。で、彼は父の正當な理由を信頼しつゝ結果を待たうと決心した。

その間にもアンドレイ・ガヴリロヅチの病勢は刻々險惡になつていつた。ウラディミルは父の臨終の遠くないことを豫見した。そして、今は全くあとけなくなつてゐるかの老人の傍をば決して離れなかつた。

兎角する中、猶豫期間も切れてしまつたが、控訴狀は提出されなかつた。キステネフカ村はそれ故、トロエコウロフの所有となつた。シヤバシキンはトロエコウロフのところへやつて來た。そして溢れるやうな慶賀よろこびの詞を述べて、閣下は、こんど手に入れた地面を何時お引取りなさるおつもりか——閣下が直接行つて、御自身で手続きをなさるか、それとも誰か他の者を代理に、委任なさるか、と訊ねた。

キリラ・ペトロウヅチは迷惑に思つた。性來彼は強慾者ではなかつたのである。彼は怨恨を晴したいといふ熱望が、あまりに彼を深入りさせたのであつた。そして今更ながら彼は良心の苛責を感じてゐた。彼は自分の若い頃の古い同僚たるかの仇敵が、どんな容體で寝てゐるか、よく知つてゐたので、彼が勝つたといふ事は彼の心に少しも喜びを齎らさなかつた。彼は何とか自分の不快を洩らすやうな口實はないものかと探しながら、シヤバシキンを擬乎と見てゐた。けれどもこれといふ適當な口實も見出されなかつたので、ぶり／＼した調子でかう謂つた。

「むかふへ行つて呉れ！ お前に用はないんだ！」

シヤバシキンは主人の機嫌がよくないのを見てとると、お辭儀をして、急いで引退かつた。そしてキリラ・ペトロウヅチは獨りになると、「歡呼の聲は鳴り渡る！」と口笛を吹きながら、往つたり來たりし始めた。これは彼にとつて毎時も並々ならぬ苛立たしい心の、徴候にきまつてゐた。

到頭彼は四輪馬車を用意するやうに吩咐けて、(時はもう九月の下旬だつたので)暖かく身を包んだ。そして自分で手綱を執りながら中庭から乗り出して行つた。

彼には間もなく、アンドレイ・ガヴリロヴツチの屋敷が見えてきた。矛盾した様々な感情が彼の心に一ぱいになつた。復讐する満足や権力に對する愛が、ある程度まで、更に崇高な憐憫の情を鈍くした、が、遂にその憐憫の情は打克つた。彼は古い隣人と争ふ計略を念頭から抹殺し、彼の財産を還して和解を遂げようとまで決心した。この善良な目論見によつて彼の心は安らかになつたので、キリラ・ペトロヴツチは隣人の住ひの方へ馬を馳せて、中庭へずつと這入つて行つた。

その瞬間に病人は寢室の窓のところに腰かけてゐた。彼はキリラ・ペトロヴツチを認めた、——さうして彼の顔は恐ろしく感動した表情を呈した。青白い亢奮した色は普段の蒼白さを入代り、眼はぎら／＼輝き、わけの解らぬ言葉をぶつぶつ呟いた。帳簿を調べながら其處に坐つてゐた彼の伴は、頭を擧げて、父親の容態の變つたのに心を撃たれた。病人は憤怒と嫌惡との表情をもつて、中庭の方を指さした。その時、エゴローフナの重い足音と、かう云ふ聲とが聞えてきた。

「旦那様、旦那様! キリラ・ペトロヴツチの奴がきましたよ! キリラ・ペトロヴツチが石段の上にをります!」と、彼女は叫んだ……「あゝあ、神様! どうなりましたか? どんなことが起きるんでございませう?」

アンドレイ・ガヴリロヴツチは急いで、閑衣の裾をまくし上げて、肘掛椅子から立ちあがらうとした。彼はひとりて立ちあがつた。——と、突然倒れてしまつた。伴は彼の方へ駆け寄つた、老人は氣絶して倒れたまゝ、微かな息もなかつた。彼は癱瘓に襲はれたのであつた。

「早く、早く! 急いで、街へ、醫者を!」とウラディミルは叫んだ。

「キリラ・ペトロヴツチ様がおめにかゝりたいと仰しやつてございます」と、下女が部屋に這入りながら謂つた。

ウラディミルは怖い顔附をして見せた。

「一刻も速く歸れとキリラ・ペトロヴツチに云つてくれ、わしが出てゆかぬさきに——行け!」

下女はいそいそと主人の吩咐を果すために部屋を出て行つた。エゴローフナは双手を天へ擧げた。「旦那様」と、彼女は聲を張り上げて叫んだ。「えらいことになりました! キリラ・ペトロヴツチが妾どもをみんな喰べてしまひます。」

「乳母や、靜かにしろ、」と、ウラディミルはむしやくしやまぎれに謂つた、「アントンを直ぐに街へ、醫者を呼びにやつてくれ。」

エゴローフナは部屋を出て行つた。控室には誰も居らなかつた。召使達は皆、キリラ・ペトロヴツチを見るために庭へ駆け出してしまつてゐた。彼女は石段のところへ出て行つて、下女が若旦那

那の返事を陳べてゐるのを聞いた。キリテ・ペトロウッチはそれを聞いて、四輪馬車に乗り込んだ。彼の顔は夜よりも暗かつた。彼は侮蔑的な笑みを浮べながら、寄り集まつた召使達を脅すやうに見渡した。そして中庭からゆる／＼車を乗り出して行つた。彼はアンドレイ・ガヴリロウッチが一分間前に坐つてゐた窓を眺めた、が、彼はもはや其處には居らなかつた。乳母は主人の吩咐も打ち忘れて、階段の上に立ち盡してゐた。召使達は今しも起つた事についてがや／＼話し合つてゐた。不意にウラディミルが彼らの間へ現はれた。そしてきれきれにかう謂つた。

「醫者の要はない……父は死んでしまつたのだ！」

多勢の者の驚愕がこの言葉のあとにつゞいた。召使達は彼らの老主人の部屋へ飛び込んで行つた。老主人はウラディミルが据ゑて置いたとほりに、安樂椅子に横はつてゐた。彼の右手は床へ墜れ、頭部は胸の上へ力なく伸掛つて——肉體はまだ冷えきつてはゐなかつたが生命のあるらしい様子はいふになく、もはや死によつてぐつたりなつてゐた。エゴローフナはうめき出した。召使達は世話をまかせられた主人の死骸を取巻いて、それを洗つたり、千七百九十七年代に造つた軍服を著せたりした。そして永い年月の間、彼らが自分達の主人に給仕してゐたその同じ食卓の上に主人の遺骸を安置したのである。

## 五

葬儀は三日目に執行された。柩に納められた不幸な老人の死體は、哀悼の歎きに掩はれ、夥多の蠟燭に取巻かれてゐた。食堂には柩を運び出すやうに支度をした召使達が一ぱい居た。ウラディミルと召使達とは柩を擔ぎ擧げた。僧正は先頭に立ち、僧侶は死人に經文を唱へながらそれにつゞいた。キステネフカ村の領主が自分の家の鬮を跨ぐのもこれが最後なのだ。柩は森の中を通つて静々と運ばれていつた——寺院はちやうどその裏にあつたのである。その日は晴れて、冷めたく、秋の木の葉は木から落ち散つてゐた。森を出ると彼らはキステネフカ村の木造の寺院と楡の古木に影つた墓地とを面のあたりに見た。その墓地にはヴラディミルの母堂か安らかに永眠してゐるのであつた。そしてその、母の墓の側には前日から新しい塋穴が掘つてあつた。

寺院はキステネフカ村の領主に最後の敬意を捧げようとして集る百姓達で満たされた。若いドゥプロフスキーは聖壇所に立つてゐた。彼は泣きもせず、祈禱もしなかつたけれども、その顔の表情は物凄かつた。追悼の儀式は終りに近づいた。ウラディミルはまつ、亡骸に別れを告げるために進み寄り、その後から召使達が従つた。蓋が持ち來たされて、棺は釘づけにされた。婦人は聲を擧げて泣き、男子は屢々握拳で自分の涙を押し拭つた。村中の人達に見送られながら、ウラディミルと三



人の下僕らは、墓地まで柩を運んで行つた。柩が墓穴の中に降されて、居合す人々は一握宛の土をその上に投げ入れた。穴が埋まつてしまふと、群衆は最後の禮拜をして、それから解散した。ウラデイミルは誰よりもいち早く、急いで立ち去つた。そしてキステネフカ村の方へ姿を消した。

エゴローフナは自分の主人の名義で、若旦那様は御出席なさる氣にはなれない相ですがと披露しておいて、牧師やすべての僧侶を葬儀の馳走に招待した。

そこで神父アニシム、その妻フォドロフナ、並びに僧侶は、領主のお屋敷へ行くことになつて、道すがら故人の美點だの、その後継者の身の上に十中の八九起り相な事をあれや之やとエゴローフナと話し合つた。トロエエーロフの訪問と彼が喰はされた逆撃とは、最早近所界限に委く知れ渡つてゐたので、地方の政事家連は由々しき棒事がその結果として起るだらうと、豫言してゐたのであつた。

「どうなる事でせう、どうなりませう」と、牧師の妻は謂つた。「だつて、ウラデイミル・アンドレイヴツチ様がわたしどもの御領主様におなりにならないとしましたら、残念ですわね、あの方は美しい若様ですもの、全くよ。」

「それにあの方が御領主様におなりにならないならば、いつたい誰が御領主様になりませう。」と、エゴローフナは口をはさんだ。「キリラ・ペトロヴツチは出しやばるには及ばない——お相手になるやうな弱蟲は居ませんものね、私家の若旦那様にしても、どう申し開きするものかぐらゐは御存じ

でせうし、お蔭さまで、味方をなさる方がないこともありませんからね。キリラ・ペトロヴツチの方だつて、己惚が強すぎますよ、それで、私のところのグリーンシャがあの人には『出てうせろ、老耄れ野郎！ 掃き出してやるぞ！』つて、怒鳴られてからといふものは、グリーンシャは兩脚の間に尻尾をはさみ込んでしまひましたよ。」

「おー、エゴローフナさん」と、僧侶は謂つた。「だが彼奴の舌は、よくもまあ、そんなことがぐづぐづぬかせたものだね、私が思ふにやあ、キリラ・ペトロヴツチを尻目にかけるよりか、悪魔と顔を突き合した方がよつほどましだよ、お前さん、彼奴に會つてごらん、震へあがつて、お前さんのその脊骨が曲ちまうぜ！」

「徒勞だよ、徒勞だよ！」と、僧正は謂つた。「供養は今日アンドレイ・ガヴリロヴツチ様のためにしたやうに、キリラ・ペトロヴツチにも何日か唱へてやらにやならんのだ。その葬式は多分ずつと壯大に行はれもするだらうし、お客もずつと大勢招待されましょう。だが、神様のお眼にはどれもこれも皆同じではあるまいか？」

「おー、神父様、私どもは近所のお方を悉皆お招きしたいと思ひましたがね、ウラデイミル・アンドレイヴツチ様がお好みにならないのですよ。お驚きなすつちやいけません、私どもは充分お歡待するやうにしてあるんですよ……けれどもどんな事が妾どもにできませう？ 兎に角、大勢人がおい

でにやらなければこそ、貴方々に、お歡待がよつくできるといふものですわ、」  
 「おいしいパイが用意されてゐるといふこの煽動的な約束と希望とは、談者達の足を早めさせた。  
 そして彼らは恙なくお屋敷へ著いた。そこには既に食卓も据附けられ、ブランドイまで供へてあつた。

その間にウラディミルは心の愁傷を、運動と疲労とによつて紛らさうと努めながら、森の小徑に深くわけ入つた。彼は路傍の何ものにも目をくれずに歩きつゞけた。木の枝は絶えず彼をさすつたり引つ掻いたりした。さうして彼の足は續けさまに濕地にはまり込むのであつた——彼はまるで氣をつけなかつたのだ。遂に彼は周圍を樹木に圍まれた小さな沼地の所に達した。細い流れが秋になつて半ば葉のもぎとられた木立の間を、黙々とうねつてゐる。ウラディミルは足を駐めて、冷んやりする芝生の上に腰を下ろした。するといろいろの思想が、どれもこれも一層憂鬱に彼の心を壓しつけるのであつた。……彼は非常に鋭く寂愁を感じた。行末の事が恐ろしい雲に閉ざされて現はれた。トロエコウロフに對する怨恨は新らしい不幸を彼に豫言した。彼の當然受くべき世襲財産は他人の手に移つてしまふかも知れない、さういふことにでもなれば赤貧が彼を待つてゐるのみだ。長い間、彼は同じ場所に全く身動きもせずに水の靜かな流れを、枯れ萎んだ木の葉の二つ三つ、その表面に沿つて流れゆくの見成りながら、そこに人生の類似を生き生きと想像してゐた。到頭彼はあたりの

暗くなりかけたのに氣が附いた。彼は立ちあがつて、家路を捜したが、わが家の門へ眞直につゞく小徑へ踏み入つたのは、長い間慣れぬ森を彷徨ひ歩いた揚句であつた。

彼がさして遠く歩かぬさきに、僧正が彼の僧侶達を引きつれてこちらへ来るのに出會つた。

(譯註—僧侶—出遣ふことは露西(亞)では凶兆と見なされてゐる)これは不幸を豫言するものだ、といふ思考が忽ち彼の念頭に泛びあがつた。彼は思はず側道に逸れて、木立の背後に身を隠した。僧侶達はそれに氣が附かず、非常に熱心に話しつゞけてゐた。

「惡事を避けて善をなせ、だ。」と、僧正は彼の妻に謂つた。「こゝに滞在してゐる必要は、ちつともないんだよ。どう片が附かうが附くまいが、私達にや關係のない事だよ、」

僧正の妻は何か返事をしたが、ウラディミルには、彼女の言つた事が聞えなかつた。

屋敷へ近づくと、彼は大勢の人が集まつてゐるのを見た。つまり自分の屋敷の召使達や小作人達が中庭に群がつてゐたのだ。遠くからウラディミルは常ならぬ騒擾と眩き聲とを耳にした。馬車納屋の近くには、二臺の旅行馬車が駐まつてゐた。石段の上には、制服を著た五、六人の見知らない男が、口論してゐるらしかつた。

「どうしたといふんだ」と、ウラディミルは自分を迎ひに駆け寄つて來たアントンに、ぶりぶりして訊いた。「あの人達は誰だい、え、何しに來たんだい。」

「お、ウラディミル・アンドレイヴツチの旦那様」と、アントンは息をきらしながら答へた。「裁判所から来たんでございます。彼の人達は私どもをトロエコウロフに引渡さうとしてゐるんです、旦那様のお邸から連れてゆかうといふ人です……」

ウラディミルはぐつたり頂垂れた。下僕達はこの不幸な主人を取巻いた。

「貴方は私達の旦那様です」と、彼らはウラディミルの手に接吻しながら叫んだ。「私達は貴方のほかに、ご主人様は一人も要りません、私達は死んでしまひます、さうして私達は貴方と離れません、離さないと仰しやつて下さい、旦那様、さうすれば、私どもはぢきにお白洲で取極めて参ります、ウラディミルは彼らを見遣つた。そして暗い思想が彼の心にむらむらと起きた。

「静かにしてゐろ」と、ウラディミルは彼らに謂つた。「わしが役人達に話をしてやらう。」

「さうだ、——旦那様、彼の人達とお話なすつて下さいまし」と、大勢の者は叫んだ、「あの呪はれた恥知らず達に恥を知らしてやつておくんさい——」

ウラディミルは役人達に近づいた。シヤバシユキンは、帽子を冠つたまゝで横柄にあたりを見廻しながら、臂を張つて突立つてゐた。執行官は緞ら顔の口髭を畜へた五十歳位の、脊の高い、頑丈な男だつたが、ドウブロフスキーの近づいてくるのを見ると、咳拂ひして、皺枯れた聲で叫んだ。

「つまり、本官が既に云つた事を君に繰り返すと、地方裁判所の判決に依つて、君は現にキリラ・ベトローヴツチ・トロエコウロフ氏の配下になつてゐるのだ、エム・シヤバシユキンはトロエコウロフ氏の代理としてこゝにゐられるのだ。トロエコウロフ氏の命ずる事は何によらず君は従ふんだ。それから、女のやうな君達は、トロエコウロフ氏が君達を愛するやうに、あの人を愛し敬ふんだよ。」この機智に富んだ駄洒落に、執行官は笑ひ出した。シヤバシユキンは他の役人達もその例に倣つた。ウラディミルはかつと憤懣の情に煮えたぎつた。

「お訊ねしますが、そりや一體、どういふ意味ですか」と、彼は馴れた執行官に平静を装ひながら訊いた。

「それはかういふわけなのさ」と、頓智のいゝ役人は答へた。「本官達はこの領地の所有權をキリラ・ベトローヴツチ・トロエコウロフに譲り渡させにきたんだ。永久にこの徒輩を、引渡させにきたんだ！」

「しかし貴方々は我家の百姓達に傳達なさるよりか、まづ、私にすべての顛末を傳達なさるのが當然だと私は考へますね、つまり當局の判決を地主に通告するのが當然ですよ——」

「先の地主の、アンドレイ・ガヴリロヴツチは、神の御意志に従つて死んでしまつたんだ、が、君は誰だい？」と、シヤバシユキンは横柄な顔附をしながら謂つた。「われわれは君を知らないし、また、

知らうとも思つてゐないんだよ。」

「お役人様、このお方は私どもの若旦那様でございます」一人、群衆の中で謂つた者があつた。「誰が、一體、貴様に口を開かしたんだ？」と、執行官は恐しい調子を帯んで謂つた。「これが貴様達の旦那だといふのか？ 貴様達の旦那はキリラ・ペトロヴッチ・トロエウロフ様だ……判らんか、馬鹿ツ！」

「そんなことはございません！」と、同じ聲が謂つた。

「やあ、反抗をするな！」と、執行官は怒鳴つた。「ふむ、執行吏、遣つてくれたまへ！」

執行吏は前へ進み出た。

「誰がああ口答へするか、すぐ、見つけ出してくれたまへ、本官が懲らして遣る。」

執行吏は群衆の方へ向いて、口答するのは誰だと詰問した。しかし、皆、黙つてゐた。間もなく、ぶつぶついふ聲がその背後の方に聞えた。その聲は次第次第に大きくなつて、今にも恐しい哀哭に爆裂しさうになつた。執行官は自分の聲を低めて、静かにせよと彼らに説き勧めようとしかけた。

「何故、あの野郎と睨みつきをして立つてゐるんだ？」と、下僕達は叫んだ。「つゞけ、若い衆、進め！」さうして群衆は動き出した。

シヤバシユキンやその他の法官達は、支關へ飛び込んだ。さうして扉をびつしやり閉めてしまつ

た。

「捕まへろ、若い衆やい！」と、同じ聲が叫んだので、群衆は犇々と前へ押し寄せた。

「まつた！」と、ドウブロフスキーは叫んだ。「馬鹿ツ！ どうしようといふんだ。お前達は自分の身をおまけに俺までも、亡ぼすのだな、皆お前達は家へ歸つて、俺獨り残しておいて呉れ。大丈夫だよ。陛下は慈悲深くていらつしやる。俺は請願書を提出するよ、——陛下は吾々を不正な犠牲にしておかれはしないのだ。吾々は皆陛下の赤子だ。けれども、若しお前達が反抗つり強奪たりしたら、どうして陛下はお前達に加擔なざることができよう？」

若いドウブロフスキーのこの言葉、その朗らかな聲や凜々しい面差は、望みどほりの効果を與へた。群衆は静かになつて、解散した。中庭が空虚になつても、法官達はまだ家の内部に這入つたままであつた。ウラデイミルは悲し相に石段を登つた。シヤバシユキンは扉を開けて、詔ふやうな時儀をしながらドウブロフスキーの義侠的な中裁を感謝し始めた。

ウラデイミルは輕蔑しながら、それを聽いてゐたが、返事はしなかつた。

「私達は」と、執事は言葉を續けた。「貴方のお許しを得まして、今夜は此處に泊まらうと決心しました、もう暗くなつてゐますし、お屋敷の百姓達が、途中で待ち伏せしてゐるかも知れませんからね、どうか、客間の床へ私達のために乾草を寄附するやうにお吩咐け下さい。夜が明けさへすりや

出立ます。」

「勝手になさるがいゝ」と、ドウブロフスキーは素氣なく答へた。「私はもうこゝの主人ぢやないんですからね。」

かう謂つて、彼は父の居間へ這入つて、扉に錠を下ろした。

## 六

「かうなつちや、萬事休すだ！」と、ウラディミルは獨言ちた。「今朝まで俺は隠家と一片のパンとを持つてゐたのだが、明日は自分の生れたこの家を立ち退かなくちやならないのだ。父の死んだことゝいひ、わしの零落といひ、永眠る土地を持つてゐる父は、憎らしい人の部類の人間だ！」……ウラディミルは齒を喰ひしばつて、眼を母の肖像畫の上におつと据ゑた。その畫家は母が眞白な朝衣あさぎを著け、頭髮に一輪の薔薇の花を挿して、欄干に凭れ立つて居るところを描いたのであつた。

「それに、あの肖像畫もわが家の仇敵の手に落ちるのだらう」と、ウラディミルは考へた。「物置きへ壞れ椅子と一緒に放り込まれるか、それとも犬守風情の笑草の種子に控の間に懸けられる位のものだ。」さうして母の寢間は、父の死んだあの部屋は執事の居間か、婦人部屋かに飾り附けられるのだらう。なんの、なんの！ トロエコウロフは俺を追ひ出さうとしてゐるが、彼奴にこの忌中の家を

所有させはしないぞ。

ウラディミルは又もや、齒を喰ひしばつた。と、恐ろしい思想が心の中に湧きあがつた。役人輩の聲が聞えてきた。彼らは指圖をしながら家具を一つ一つ整理してゐるのであつた。さうして、惱ましい瞑想の最中にある彼を、わずらはしく掻き擾したのであつた。

やがて靜まり返つてしまつた。

ウラディミルは抽出や箱の錠をあけて、亡き人の書類を調べ始めた。それらは大部分、様々な事務に關聯した貸借の勘定書や手紙の類であつた。ウラディミルは碌々読みもせず、それらを引破いた。その中に彼は「わが妻よりの手紙」と記された一束が見當つた。深い感動の虜となつて、ウラディミルはそれを読み始めた。それらは土耳其古戦役中に書かれたもので、キステネフカ村から軍隊へ宛てたものであつた。ドウブロフスキー夫人は良人に對し、田舎にゐる自分の生活や家事向きの計畫や、離れ離れになつてゐる心細い哀訴や、愛妻の腕に能るだけ早く歸宅してくれとの歎願を書いたのであつた。それらの手紙のなかには、小さいウラディミルの健康に關する母の心遣ひが表はされてあつた。なかには、ウラディミルの智慧の早いのを歡び、その幸福にして光輝ある未來を、豫言してゐるものもあつた。ウラディミルはつひ牽き入れられて讀んでゐたので、彼の心は家庭的な幸福の幻影に魅せられてしまひ、世の中のあらゆる他の事柄を忘れ果て、どれほど時間

が経つたか、気がつかなくつたのである。壁に懸つてゐる柱時計は十一時を打つた。ウラディミルは手紙を衣囊に入れると、蠟燭を執りあげて、部屋を出た。客間には役人達が床の上に寝てゐた。卓子には彼らが呑み乾した洋盃が載つてゐて、ラム酒の強い香が部屋ぢゆうに瀰漫つてゐた。ウラディミルはその胸の悪さに顔を外向けながら、客間を通り抜けた。其處は眞の暗闇であつた。誰だか、燈火を見て、片隅へ蹲まつた。その方へ燈火を差し向けてみると、ウラディミルは鐵匠のアルキープであることがわかつた。

「何故、お前はこんな處にゐるのだ？」と、彼は驚いて訊いた。

「實はその、——お屋敷にお役人が居るかどうか、見に參つたんで」と、アルキープは聲も低く、口訥りながら答へた。

「で、お前は何故斧なんか持つてゐるんだ、」

「なんて斧を持つてゐるんですつて？ 今日此頃、誰が斧なしにゐられませう？ あの官吏どもは誰も知りませんけれど、恥知らずの悪者なんでございますよ——」

「お前は酒を呑んでゐるな、斧なんか投げ捨て、寢床へ行け。」

「わしが酒を呑んだらうつて、ウラディミル・アンドレイヴツチの旦那様、ブランディなんて、たゞの一滴も肩へ通しはいたしませんぜ、それに第一そんなことをしようなんて考が起らない事はちや

あんと神様が御照覽になつて居ります、こんなことはもうお聞きになりましたかね、あのお役人達が、このお屋敷から旦那様を追ひ出して、わしどもを治めようと、企らんでゐるんでございますぜ……なんといふお役人達の駢のかきさまだ、悪たれめ！ わしはいきなり、皆彼奴らの息の根をとめてやりたうござんすわい。」

ドウブロフスキーは眉を蹙めた。

「よく聞け、アルキープ」と、彼は鳥渡間をおいたのち謂つた。「そんな理想は止めてくれ、これは役人が悪いんぢやないんだ。提灯を點けて、俺に隨いておいで。」

アルキープは主人の手から蠟燭を執ると、暖爐の裏から提灯を見つけ出しそれに火を點けて、それから二人はそつと階段を下りた、そして中庭を廻り歩いた。見張番が鐵板を敲き始めた、犬が吠え出した。

「誰が見張り番だい？」と、ドウブロフスキーは訊いた。

「わしどもなんて、若様」と、細い聲が應じた。「ヴァシリサとロウケリアでございます、」

「家へ歸れ、」と、ドウブロフスキーは彼らに謂つた。「お前達の暇はあいたよ。」

「お前さん達、休んでもいゝんだとよ、」と、アルキープが附け足した。

「有難たう存じます、御恩人様」と、婦人どもは答へて、彼らはすぐに家へ歸つて行つた。

ドウブロフスキーはずつと遠くまで歩き続けた。二人の男が彼に近づいてきた。彼らはウラディミルに誰何した。そして、ドウブロフスキーにはアントンとグリーシャとの聲である事が判つた。

「お前達はなぜ寢床へ這入つて、寝てゐないんだな」と、彼は彼らに訊いた。

「寝ることなんか考へる道はありませんや」と、アントンは答へた。「わしどもが、かうならうとは、誰に考へられましたらう。」

「もつと静かに」と、ドウブロフスキーは口を挿んだ。「エゴローフナは何處にゐるんだい。」

「お屋敷にをります、彼女の居間に。」と、グリーシャは答へた。

「行つて、こゝへ伴れてきてくれ、そして、吾々は皆、屋敷から出てしまふんだ。役人達の他には一人も残つてゐないやうにしよう、それからお前は、アントンは、馬車を支度して置いておくれ。」

グリーシャは去つた。一分後に彼は自分の母を伴れて歸つてきた。老婆はその晩、著物を脱かずに居た。役人達をのぞいては、誰一人眼を瞑つた者はなかつたのだ。

「これで皆、こゝにゐるのか」と、ドウブロフスキーは尋ねた。「屋敷に残つてゐる者はないか、」

「お役人達の他には、一人もありません」と、グリーシャは答へた。

「乾草でも、麥稈でも、少しばかりこゝへ持つてきてくれ」と、ドウブロフスキーは謂つた。

召使達は厩へ駈けて行つたが、乾草を抱へて還つてきた。

「石段の下へ置いとけ——さうだ、そこで、若い衆、火をつけるんだ！」

アルキープは提灯を明けたので、ドウブロフスキーは炬火に火を移した。

「鳥渡待てよ」と、彼はアルキープに謂つた。「俺は、慌て、支關の戸に錠をかけた儘てきたやうだ、はやく速く行つて、開けてきてくれ。」

アルキープは支關の方へ走つて行つた。扉は開いてゐた。「俺は開けておりてやりたいのだがなあ！」と、アルキープは低聲で呟きながら扉に錠を下した。さうしてドウブロフスキーの所へ歸つてきた。

ドウブロフスキーは乾草に炬火の火をつけた。乾草は一面に焚きついて、火炎はぐんぐん高く燃え昇り、庭中を明るく照らした。

「あゝあゝ」と、エゴローフナは哀しげに叫んだ。「ウラディミル・アンドレイヅッチ様、どうなさるおつもりでございますの。」

「黙つておいで！」と、ドウブロフスキーは謂つた。「ぢや、皆の衆、さようなら！ わしは神の導き給ふ所へ行くのだ。お前達の新しい主人とともに幸福に暮すがいい。」

「私どもの旦那様 私どものご恩人様！ 一と、百姓達は叫んだ「私どもは死んでしまひます——さうして、私どもは貴方様を離れません、私どもはお伴をいたします。」

馬は用意されてゐた。ドウプロフスキーはグリーンシャと馬車に乗り込んだ。アントンは馬に鞭をあて、彼らは中庭から出て行つた。

瞬く中に、屋敷中は火炎に覆まれてしまつた。床はばちばち音を立て、破れた。燃えあがつた光は下火になりだした。赤い煙は屋根の上まで昇り、隣れな唸きと、「救けて呉れ、救けてくれ！」といふ叫び聲とが起つた。

「悲鳴をあげてゐやあがる！」と、アルキープは底意地の悪い微笑を泛べて、火炎を眺めながら謂ふのであつた。

「ねえ、アルキープや」と、エゴローフナは謂つた。「あの悪黨達を救けておやりよ、さうすりや、神様がお報ひなさるだらう。」

「叫ばして置いてやるがいよ。」と、鐵匠が答へた。

その刹那、役人達の姿が、二重窓框までも燃え盡きようとしてゐる窓際に現はれた。しかしそれと同時に、屋根が凄まじい音を立て、崩れ落ちた、——それつきり叫び聲は歇んでしまつた。

やがて百姓たちは擧つて、中庭へ闖入した。婦人たちはやたらに叫び聲を發しながら、役人達の果てるのを救はふと急ぐのであつた。子供らは炎燒のを歎賞しながら踊り廻つてゐた。火の粉は小屋小屋に飛び火しながら眞赤な驟雨の中に舞ひあがつてゐた。

「さあ、これでいよ！」と、アルキープは謂つた。「何んてまあ、よく焼けることだらう！ 嘘ぞ、ボクプロフスコエ村ぢや莊觀だに違ひない。」

その刹那に新しいものゝ出現が、彼の注意を惹いた。一匹の猫が燃え盛る納屋の屋根に沿つて、どこから跳んだら好いか分らないので駆けつり廻つてゐた。火炎は四方から猫を引包んだ。その可憐な動物は、哀し相にニヤアニヤア鳴きつゝ助けを呼んでゐた。子供連はその絶望した様子を見ては、わいわい笑ひながら囃し立てた。

「何をお前達は笑つてゐるんだ、小悪魔達」と、鐵匠はぶりぶりして謂つた。「神様は怖かなくはないのか、神様のお造りなされたものが、消え失せようとしてゐるのに、お前達はそれを嬉しがつてゐるんだなあ。」そこで燃えてゐる屋根へ、梯子をかけて、鐵匠は猫の方へ攀ち登つて行つた。猫は彼の意向を悟つて、いそいそと待ち遠しかつたといふ風に彼の袖を確かり掴まへた。半焼けになつた鐵匠は、その荷物とともに降りてきた。

「それぢや、皆の衆、さやうなら」と、彼は消魂する百姓達に謂つた。「もう此處にはわしのする事はないんだ。お前さん方、幸福に暮さつしやい、わしのこともあんまり悪う思ふて下さるなよ。」

鐵匠は立ち去つた。火災は暫くの間荒れ狂ふてゐたが、やがてそれも消えてしまつた。眞赤な燃え残りの、高層な建物は、夜の闇に赫々と輝いてゐた。そしてキステネフカ村の焼き出された住民



達がその周囲を徘徊してゐるのであつた。

## 七

翌日、その火災の噂が、近所近在に擴まつた。人々は銘々それを異つた風に解釋した。なかにはドウブロフスキーの召使達が蕪儀の酒に酔拂つてゐたので不注意から、失火したのだと主張する者もあり、なかにはまた、役人達かその新しい宿で泥酔したのを非難する者もあつた。或者に至つては真相を言ひあて、恐しいあの災厄の發頭人はドウブロフスキーその人が、遺恨と絶望とに鼓舞されて、この犯罪にまで驅立てられたのだ、と斷言した者もあつた。多くは、役人達や召使達とともに、ドウブロフスキーも火焰の中に消え失せたものだ、と言ひ張つてゐた。

トエロコウロフは翌くる日火災のあつた現場に来て、自ら検屍に執りかゝつた。執行官や地方裁判所の陪審官や、辯護士や、書記は、ウラディミル・ドウブロフスキーや、乳母のエゴローフナや下男のグリーシヤや馭者のアントンや、鐵匠のアルキープらと同じやうに行方不明で——誰一人何處へ行つたものか知る者が無い——といふ話であつた。召使達は、役人達の姿は屋根が焼け落ちた瞬間に消えてしまつた、と斷言した。彼らの黒焦げになつた死骸が實際に發見された。デアシーリサとロウケリアとの二人の婦人は、火災の起る數分間前に、ドウブロフスキーや鐵匠のアルキープ

に逢つた、と謂つた。鐵匠のアルキープは、一般の證明するところに依れば、現に生きてゐる、そして放火は彼一人が發頭人でないにしても、多分主犯者には違ひないとの事であつた。多數の人の嫌疑はドウブロフスキーの上に落ちた。キリラ・ペトローヴチはその筋へ、悉く起つた事件の詳しい報告文を届け出した。かくて新たな起訴が成り立つた。

程なくまた別の噂が好奇心と雑談とに新奇な餌食を與へるにいたつた。盜賊が出没して、近所界隈に恐怖の念を擴めたのである。盜賊達に對して執つた政策は、つひに何らの效をも奏さなかつた。強奪は益々大膽になつて續々引ついで行はれた。街道にしろ、村落にしろ、いづこにも安泰な場所といふものがなかつた。盜賊を乗せた數臺の旅行馬車が、旅人達や郵便車を駐めながら、眞晝中いたる所を横行するのであつた。どの村にもどの村にも盜賊は訪づれて納屋を襲ひ、火を附けるのであつた。その隊長は聰明で、大膽で、一種の義侠心に富んでゐるといふので非常な評判になつてゐた。いろいろ奇怪な事柄がその男に就いて言はれてゐた。ドウブロフスキーの名はあらゆる人々の口の端にのぼつた。誰も彼もそれはドウブロフスキーだ、向ふ見ずの盜賊達を指揮する者は彼をおいて、他には一人もないと信じてゐた。こゝに一つ顯著な事があつた、といふのは、トロエコウロフの領地と財産とが捨て、置かれたことである。盜賊共はトロエコウロフの穀物倉は一つとして襲つたことはなく、彼の所有にかゝる荷物は一つとして差し止めたこともなかつた。例の横

柄なトロエウロフはこの例外を、彼がその村に編制したところの優秀な警察のお蔭であると、もに、自分が全領土に注入したおのれに對する畏敬に歸してゐた。最初の間近隣の人達はトロエウロフの僭越を苦笑しながら、あの招かざる客人がボクロフスコエ村に訪づれて、何か價值あるものを盗んでゆくだらうと、誰も彼も豫期してゐたが。遂に彼らもトロエウロフには盜賊共が不思議な尊敬を示してゐる事に同意せずにはゐられなくなり、認めなくてはならなくなつた。トロエウロフは得意なもので、ドウブロフスキーの事件に關する新しい探索の報告がくることに、いつも隊長や執行官や知事の迷惑を皮肉な言ひ方で心任せに言ふのであつた。それらの人々は常に盜賊の頭を罰しめせずに見通してゐたからである。

兎角する中十月一日がきて、トロエローロフの村では例年の如く教會の祭禮の日になつた。けれども先へ事件を書き進める前に、若きドウブロフスキーにとつては新しい人物であり、本篇の始めにちよつと述べておいたところの人物に就いて、私は讀者諸君に申し上げておかねばならない。

## 八

讀者諸君はもはや恐らく私が、まだいたつて幼少いやうに謂つてゐたキララ・ペトロウヅッチの娘が本篇の女主人公であるといふことを豫想して居られるであらう。私が今お話ししようとしてゐる

時期は、彼女の十七歳頃の事で、その美は花ならば満開である。彼女の父は盲目的に彼女を可愛かつてゐて、或時は彼女の鳥渡した氣まぐれをも満足させて遣らうと努めたり、又或時は猥褻な、そして時には肉慾的な行爲をして彼女を驚かしたりしながら、自分の好き氣儘に育てゝゐたのである。彼女の愛戀の情を信服するには、まだ彼は彼女の信頼を得ることが出来なかつた。彼女は自分の思想や感情を父に押し隠すのが癖になつてゐた。何故なら、彼女はどんな鹽梅に二人が應接するものか分らなかつたからである。彼女には友達といふものもなく、孤獨のうちに育つた。近隣の細君や娘達は滅多にキララ・ペトロウヅッチの家へ訪ねて來なかつた。キララ・ペトロウヅッチその人は例の談話と娛樂とを、友達仲間に求めるので、婦人連は出席しなかつた。この美人も滅多に自分の父の家へ訪づれてきた客人達の中に姿を現すことはなかつた。彼女には十八世紀の佛蘭西作家の著作で大部分構成<sup>なつた</sup>てゐる廣大な圖書館が譲り渡されてゐた。彼女の父は「<sup>パルク</sup>完全な料理人」の他には決して何も讀まなかつたので、彼女に書物を選択する手引きはできなかつたけれども、マーシヤはいろいろの種類の作品に浸つたのち、小説を自づと選ぶやうになつた。こんな風にして始めミイチュウ嬢の指導のもとに手ほどきされた彼女の教育は完成しようとしてゐた。そのミイチュウ嬢といふのはキララ・ペトロウヅッチの厚い信任を受けてゐた女で、その交情の結果が餘り大びらになつたので、彼は到頭他の領地へ辛らくも落ち延びさせてしまつたのである。

ミイチュウ嬢はそのあとに、やゝ心よい回想を残して去つた。彼女は善良な性質の乙女で、キラ・ヘトローヴツチの絶えず取かへ引かへする情婦と區別されてゐたほど、明らかに彼を操つてゐたのではあるが、その勢力を濫用するなどいふことは決してなかつた。キラ・ヘトローヴツチ自身も他の者よりか、一層彼女を好いてゐるやうであつた。そして彼の屋敷の翼のところて述べておいたあの女達との間にできたキラ・ヘトローヴツチに瓜二つの、裸足の子供が、全く一團體も彼の部屋の窓下を遊び廻つてゐるといふ事實があるにも拘らず、キラ・ヘトローヴツチは南國風のミイチュウ嬢を思ひ出させる黒眼勝ちの、いたづらさうな子供を九人まで、わが兒のやうにして育てゝゐたのであつた。キラ・ヘトローヴツチは幼い息子の、サーシャのために、佛蘭西人の家庭教師が雇ひたいとモスコウへ書面を出しておいたので、その家庭教師は恰度今、私が述べてゐる事件のあつたその時に、ボクロフスコエ村へやつてきたのである。

この家庭教師は、その愛嬌のいゝ容貌と率直な態度とに因つて、キラ・ヘトローヴツチの心に頗る感じのいゝ印象を與へた。家庭教師は自分の推薦状をキラ・ヘトローヴツチに差し出した、がその書類といふのは、その男が家庭教師として四年間一緒に暮してゐたトロエコウロフの親戚の一人から附けて貰つたものであつた。キラ・ヘトローヴツチはそれを一通り調べたが、うひうひしい佛蘭西人だといふ、それだけでもう不満だつた。あながち彼は、家庭教師といふ有がたくない呼び名

に對して必要な忍耐力や経歴やに矛盾する面白い缺陷を考へたからではなく、お定まりの疑念を抱いたからで、その疑念はすぐ晴らして了はうと彼は決心した。かうした目的から、彼はマーシャに吩咐けて、家庭教師を呼びにやらせた。キラ・ヘトローヴツチは佛蘭西語が話せなかつた。で、彼女は父のため通辯の役を勤めた。

「マーシャ、此處へおいで。さうして、この先生にかういふことを話しておくれ、私が先生に御承諾いたすには先生が斷じて吾家の娘つこの機嫌をおとりにならないといふ條件つきにかぎるんだよ。なぜつて、もし先生が其様な、犬の子のやうな眞似をなさるなら、私は……マーシャ、先生にこれだけお譯し。」

マーシャは顔を赧らめた。そして家庭教師に向ひ、父が先生の慇懃な、しかも規律正しい操行を數へあげたのだ、と佛蘭西語で談した。

佛蘭西人は彼女に頭を下げた。そしてたとひ厚意が受けられないにしても眞心からの敬意を捧げさせて貰ひたいと答へた。

マーシャはその返事を逐字的に譯した。

「よろしい、よろしい、」と、キラ・ヘトローヴツチは謂つた。「先生には厚意も、敬意もどちらも持つていたゞかなくてもいゝんだよ、先生の仕事はサーシャの世話をして、あの子に文法や地理を教へ

て遣つて下れさばいゝんです、——お譯し。」

マリヤ・キリローフナはそれらを通譯しながら彼女の父の荒々しい言葉附きを軟けた。それで、キリラ・ペトロヴッチはその佛蘭西人を家庭教師の部屋に構らへた屋敷の翼室へ退かした。

マーシヤはその若い佛蘭西人のことを念頭に置いてゐなかつた。貴族的な偏見を持つて育てられた彼女の眼には、家庭教師といふものが、只一種の下僕か、或は職人かなんぞのやうに見えてゐた。そして下僕とか職人とかいふものを彼は些しも人間らしく思つてゐなかつた。彼女はデスフォルヂエス先生に與へた自分の印象だとか、彼の狼狽だとか興奮だとか聲の震へたことだとかについては一切氣を附けなかつた。その後數日の間に彼女は非常に屢々彼と顔を合はしたけれども、多くの注意も拂はなかつた。さはいへ、思ひがけない事から彼女は、彼に敬服する全く新しい印象を受けたのである。

キリラ・ペトロヴッチの中庭には日頃から五、六匹の小熊が飼つてあつた。そして、それらの熊はクボロフスコエ村の主人の娯樂の主要なるものゝ一つになつてゐた。熊の幼い間は毎日客間へつけ込ませ、客間でキリラ・ペトルヴッチは猫や小狗を熊にけしかけては、笑ひ興しながら終日時を費すのが慣はしてあつた。熊が大きく育つと、熱心に餌食を待ちあぐむやうに、鎖で結へ附けておかれるのであつた。時々邸の窓の前に連れ出されて、釘を打ち鑲めた空の酒樽がその前に置かれた。熊はそ

れを嗅いでみて、それからそつと觸つてみると、前足の裏をチクチク刺す。そこで腹を立て、非常な力を出して樽を押しのであるが、さうすればさうするほど彌々益々痛くなるばかりである。獸物はそこで全く無茶苦茶に昂奮して、人がこの無益な目的物を憐れな動物から遠く押し遣つてしまふ迄は、猛り狂ひながら樽に飛びかゝるのであつた。折々は二匹の熊を四輪馬車に結へつけ、喜ばるゝが喜ぶまいが客をそれに乗せて、どこへなりとも機會が熊を導くまゝに駆けさせることもあつた。が、キリラ・ペトロヴッチの最も好きな惡戯は、次のやうなことであつた。

飢ゑてゐる熊を、空室に閉ぢ込めて、壁に螺旋ねぢこんだ鈴付きの綱に繋いでおくのが常であつた。綱は殆んど部屋の長さ位あるので只反對の隅所へは、兇暴な獸物も達しられぬのである。新參者は大抵この部屋の入口へ連れて來られて、恰も偶然のやうに、熊と一しよに押し込まれるのであつた。すると扉に錠が下りて、不幸な犠牲者は毛むぢやらの所謂隱世者と二人つきり残されるのだ。氣の毒なその客は、シャツを引き裂かれ、手は掻きむしられて、間もなく安全な片隅を得るのであるが、時には三時間もぶつ通しに壁にびつたり身をよせて突立つたまゝ、二足と距たぬ所で殘忍な獸物が、後足で跳び上つたり、唸つたり、綱をびんびん引張つたりしながら彼にとどかうと努めてゐるのをぢつと見成つてゐなければならなかつた。かやうなことが露西亞紳士の高尚な娯樂とされてゐただ!

佛蘭西人の家庭教師が著いてから數日経つて、トロエウロフは彼につひていろいろ考へてゐたが、熊部屋の嗜好を彼にもやつてみようと思つた。かうした目論見のために彼はある朝彼を呼び寄せていくつか暗い廊下を通つて連れて行つた。唐突、側の扉が開いた——二人の召使が佛蘭西人を部屋へ押し入れて、あとからびつしやり扉に錠を下ろした。驚愕から我にかへつた家庭教師は、鎖に繋がれてゐる熊を見た。獸物は鼻を鳴らして、遠くからこの訪問者を引掻かうとした。そして、不意に後脚で立ち上がつて、彼に向つて進んで来た。……佛蘭西人は驚かなかつた。彼はたじろきもせず、却つて襲ひかゝつてくるのを待ち構へてゐた。熊は間近く詰め寄つた。デスフォルヂエスは衣囊から小型な拳銃を執り出し、飢ゑた獸物の耳に差し込んで發砲した。熊は轉かつた。人々は皆その爆音を聞きつけて、その現場に駆け集まり、扉を開けた。そしてキリラ・ペトロウヅチは這入つてみて、自分の悪戯の結果に吃驚した。

キリラ・ペトロウヅチは事件の顛末について説明を望んだ。誰が豫めこの悪戯をデスフォルヂエスに知らせておいたのだらうか、でなければどうして彼が裝填した拳銃を衣囊に持つてゐたのであらうか、彼はマシーヤを呼びに遣つた。マシーヤがきて、佛蘭西人に父の質問を通譯した。

「私は熊のゐることなんぞ、一度も聞いたことはありませんでした」と、デスフォルヂエスは答へた。「けれど私は拳銃を始終身につけて持つてゐるんです、といふのは、いくら職業のためだからつて、

不満なことをされて腹立ちをおさへてゐるようとは思はないからです。」

マシーヤは驚いて彼を眺めて、キリラ・ペトロウヅチにその言葉を通譯した。キリラ・ペトロウヅチは何とも答へなかつた。彼はその熊を運び出して、皮を剥がしてしまふやうにと命じた。それから人々の方へ振向いてかう謂つた。

「なんといふ勇敢な奴だらう！ 此奴はちつとも臆病者ぢやないわい。見事なものだ、確かに臆病者ぢやないぞ！」

その瞬間から彼はデスフォルヂエスを敬愛するやうになつた。そして、再び彼を試してみようなどとはもうもう考へなくなつた。

しかし、この事件はマリア・キリローフナに尙一層大きい印象を與へた。彼女の想像は動かされた。彼女は死んだ熊を、それからデスフォルヂエスが熊の向ふ側に靜かに立ちながら、落著き拂つて彼女に話かけてゐるのを見たのであつた。彼の勇敢な傲然たる自尊心は、只單に貴族社會に屬してゐるものではないといふことを知つて、その時から彼女は若い家庭教師に、敬意を示しだしたが、この尊敬の念は日に日に増していつた。ある馴染が二人の間に芽生えた。マシーヤは美しい聲と非常な音楽的の才能を持つてゐたところから、デスフォルヂエスは彼女に稽古をしてあげようと申し出た。その後、マシーヤが知らず識らずのうちに、彼女自身の方から彼に戀していつたといふこ

とは、讀者諸君にも容易に了解されるであらう。

私が既に述べたあの祭日の前夜のこと、客人達はボクロフスコエ村へぼつぼつ到着し始めた。なにかには領主の屋敷で間に合される者もあれば、翼室を當かはれる者もあり、執事の家に案内されるものもあつた。三番目の組は僧正のもとに、そして残りの者は暮らし向きのいゝ百姓の家に泊つた。厩といふ厩は來訪者達の馬で満たされて、庭や馬車納屋にはさまざまな種類の乗物が混雑してゐた。午前の九時になると、呼鈴が群衆に向つて鳴らされた。そしてキリラ・ペトロウヅチの建立して、年年歳々彼の寄進によつて美しくなつた禮拜堂の方へ、人々は誰も彼もそろそろと赴いた。禮拜堂は間もなく夥多の參詣人の群に雑沓してきたので、堂宇の中は一人の百姓も入る餘地を見出し得ぬほどになつた。そして車寄せの下や柵の内に立つてゐなければならなかつた。彌撒はまだ始まらなかつた。人々はキリラ・ペトロウヅチを待ちわびてゐた。やがて彼は六頭立の馬に牽かせた四輪馬車で到着した。そしてマリア・キリローフナを連れて、悠々と設けの席へ歩いて行つた。男達の眼も女達の眼もともにマリア・キリローフナの上に注がれた、——男達は彼女の美しさに驚き、女達は非常な注意をもつて、彼女の衣類を吟味した。

彌撒は始まつた。召使の歌ひ人は合唱して唄つた。そしてキリラ・ペトロウヅチもそれに加はつて唄つた。彼は右にも左にも、側目をふらずに祈禱した。そして副牧師が聲高らかに教會の創立者の名を読みあげたときには、誇りやかな謙讓さをもつて地面までも頭を下げた。

彌撒は終りに近づいた。(總西亞の教會では祈禱の終りに參詣人が悉く十字架に接吻する)キリラ・ペトロウヅチはまづ一番に、十字架に接吻した。他の者も皆それに違つた。近隣の人達は尊敬をもつて彼に近づき、婦人達はマーシヤを取巻いた。キリラ・ペトロウヅチは禮拜堂を出て、誰も彼も自分に伴いて晚餐に來るようにと招待した。それから彼は四輪馬車に乗つて家路についた。客人達は皆、その後につづいた。

部屋といふ部屋は來訪者達で一ぱいになりだした。一瞬間ごとに新しい顔が現はれた。そして主人に近寄る事は容易ではなかつた。婦人達は一面に眞珠や金剛石で蔽はれた、色こそ褪せてはゐるが高價な地の衣類を、昔流に着こなして、行儀よく半圓を造つて坐つてゐた。男子達は非常に興奮して話し合ひながら、鱒魚やブランドイのまはりに雑沓してゐた。食堂では卓子が八十人前用意されてゐた。召使達は塚や徳利を列べたり、食卓布を眞すぐに直したりしながら急ぎ廻つてゐた。

やがて執事が馳走の支度のできたことを知らせてきた。キリラ・ペトロウヅチは眞先に進んで食卓に自分の席をとつた。婦人達は彼のあとにつづいた。そして極めて沈着さうな風をしながら、それでゐて先頭にたとうと氣をもんで銘々の席をとつた。若い婦人達は内氣な仔羊の群のやうに、

一しよこたにこみ合つて、互に席を譲り合つてゐた。彼女らの向ひ側には紳士達が坐つた。食卓の端には、小さなサーシャと並んで家庭教師が坐つた。

召使達は客の階級順に皿を配り始めた。召使達が、次は誰のところへ皿を配らうかと迷ふてゐると、仲間同志で本能的に案内するといつたやうな風であつたが、彼らの推量は殆んどいつも正確であつた。皿と匙の落ち音は、客の大きな談聲に交じつた。キリラ・ペトローヴチは愉快さうに、食卓のまはりを眺め廻して、こんな愛想のよい饗宴を願ひ得られる生の幸福を心ゆくまでに享樂してゐたその時、六頭立の四輪馬車が、中庭へひきこまれた。

「ありや、誰だい」と、主人は訊いた。

「アントン・バアフノーチチです」と、五六人の聲が應じた。

扉が開いた。そしてアントン・バアフノーチチ・スピチーンといふ圓い痘瘡面の、五十歳ばかりの頑丈な男が、お時儀をして微笑みながら食堂へ轉げこんで、申し譯をしようとした。

「一人前、こゝへ」と、キリラ・ペトローヴチが叫んだ。「どうかお掛け下さい、アントン・バアフノーチチ君、さうしてどういふわけかきかせたまへ、君はわが輩のところの彌撒にも來ず。晚餐にも遅れたんぢやないか、君にも似合はない事だ。君は敬虔な人でもあるし、馳走好きでもあるのだ。」

「お許し下さい」と、アントン・バアフノーチチは上衣の釦の穴に食卓拭布を結びつけながら答へた。「お許し下さい、キリラ・ペトローヴチさん、これでも私は早く出掛けてきたのですが、十露里も來ない中に、突然、前輪の輪鐵が二つに折れてしまつたんです。どうしようかと思ひましたよ、幸に村までは遠くなかつたのです。そこまで迎りつく迄に鍛冶屋が見つかつて、すつかり直させてしまつてみると、三時間も経つてしまつてゐました、どうにも仕様がなかつたのです、キステネフカ村の森を通つて、一等近道をとるなんてことは、私にはどうしたつてできませんからね、そんなわけで、遠まはりをしてきました。」

「あゝあ、あゝあ」と、キリラ・ペトローヴチは口を挿んだ。「明らかに君は十勇士の勇敢な仲間に入られないんだなあ、何を君は怖がつてゐんだね。」

「どうして、何を私が怖がつてゐませう、キリラ・ペトローヴィチの旦那、ぢや、ドウブロフスキーとても仰しやるんですか？ 私は捕へられるかも知れませんが、あの男は決して自分が狙つたら外しつこはない男なんですから——誰一人だつて遁かしつこはありませんよ、さうして私を捕まへたら、普通より二倍もひどく殴るにきまつてゐます」

「どういふわけで、君、そんな區別が？」

「どういふわけつて、貴方、キリラ・ペトローヴチさん、貴方のお望みどほりに、いはゞ良心と正

義とに従つて、ドウブロフスキーは何らの権利もなしにキステネフカ村を所有してゐるので、只貴方のお蔭に過ぎないのだといふことをはつきりさせたのは、私でなくて誰でせう、してみればあの亡くなつた人は——可哀相に！——私に、思ふがまゝ怨恨を晴らさずにはおかないぞ、と誓ひはしなかつたでせうか、息子は父の言葉を守らないでゐるでせうか。これまでは天は私に慈悲深くしてゐて下さつた、今までは私の納屋からばかり奪はれてゐたのですが、いづれその中に支關へのり込んでくるでせうよ。」

「あれらはどこでうまい餌そとを見つけるんだらうね」と、キリラ・ペトロウッチは眼を胸つた。「わたしはあの小さな、赤い金庫へ入るだけ填めてあるつてことを疑はないよ。」

「いゝえ、キリラ・ペトロウッチさん、一ぱいにするにはまだ中々です、今は全く空っぽです。」

「嘘を云ひなさんな、アントン・バアフノーチ君、わかつてゐるよ、君がどこでお金を費ふかつていふことはね。家ぢや君は豚のやうな暮しをして、誰一人招待よんだことはなし、おまけに百姓からは詐取だましつてゐるんだらう、貯める一方で、君は鏝一文使はないぢやないか。」

「御冗談ばかり、キリラ・ペトロウッチさん」と、アントン・バアフノーチは微笑み乍ら呟いた。「けれども誓つて云ひますが、私なんざあ、零落おちれてゐます。」そしてアントン・バアフノーチは魚肉パイの脂氣の多いところを、その主人の戯言と一しよに鵜呑うのみにした。

キリラ・ペトロウッチはその話を打切つて、新任の執行官の方へ向いた。新任執行官は始めての客で、家庭教師の傍の食卓の向ひ側の端に坐つてゐた。

「ね、執行官どの、君の賢明な證據を見せてくれたまへ、われわれのためにドウブロフスキーを捕縛へてね。」

執行官はどきまぎしたらしく、頭を下げ、會釋して口訥つた。が、到頭かう謂つた。

「閣下、試つてみませう。」

「フ、ム！ 試つてみる！ 君がこの國から追剣を逐つ拂らはうとしてゐるのは長い間のこつてすね、誰一人どんな風にもその仕事が行はれてゐるか知つてゐるものはありません、が、一たいどうして捕へようと思ひですな？ ドウブロフスキーの賊どもは執行官たちデヨロレイに疵護かまれてゐるんですぞ、探索したところによると、執行官の衣囊ポケットへ、旅費や小錢を押し込むからだ相だ、決してドウブロフスキーは捕へられつこはない、こんな恩人をどうして取押へられよう？ さうぢやありませんか、執行官どの。」

「いかにも御尤もです、閣下」と、すつかりどきまぎしてしまつた執行官は答へた。

客人たちは笑ひどよめいた。

「かういふ淡泊な人が、好きだ。」と、キリラ・ペトロウッチは謂つた。「あの亡くなつた執行官がも



うわれわれと一しよに居ないのは口惜しいことだね、あの執行官さへ焼け死んでくれなかつたら、この邊はもつと平隠なものだに違ひないんだ、だが、ドウブロフスキーについて、何か變つた話はありませんか、最近はどこへ現われましたかね。」

「キリラ・ペトローヴチさまデヨロレイ私の家で。」と、女性の聲がした。「先週の火曜日に私、あの仁と一しよに食事をしましたの。」

すべての眼は、アンナ・サヴィシナ・グロボーヴァといふ、親切なやさしい氣立のために人々から可愛がられてゐるいたつて質素な寡婦の上に注がれた。誰も彼も最も深い興味をそゝられて彼女の物語に耳を傾けようと身構へた。

「三週間前に私が伴のヴァニシヤに宛てた手紙をポストに入れに、執事を使にやつたといふことを、まづ御承知おき下らなければなりません、私は伴を甘やかさない方です、いゝえ、そればかりではありません、たとひ甘やかしてやりたいと存じましても、甘やかしようがございませんのよ、でもね、ご存じのとほり近衛の將校といふものは身分相應な暮しをしなければならぬのですわ、ですから能るだけヴァニシヤには私の収入を分配てやりますの、まあ、二百留は送つてやりますわ、さて、ドウブロフスキーの思想は一度ならず私の心に浮んだのですけれど、市街へは遠くありません——何しろ七露里かりばですからね、多分神様が、何事も都合よくお守護下さるだらう

と、自分で獨り考へておりました。」ところが、どうでせう？ 夕方になつて、執事が眞青な顔してボロを著て、跣足で歸つて參りました。(どうしたの、何か起つたの)と、私は叫びました。(奥さまアンナ・サヴィシナさまツ)と執事が答へました。(追刺にふんだくられてしまつて、私はもう少しで殺されるところでした。ドウブロフスキーもそこに居りました、さうしてドウブロフスキーは私を絞り首にしようと思つてゐたのですが、後になつて私を氣の毒がつて、遁がしてくれましたよ、けれど私は何もかも、——お金も馬も車もふん奪られてしまつたんです)私は氣が遠くなつてしまひました。まあ、どうしたものでせう！ 私のヴァニシヤはどうなりました、なす術がないのでございます、私は新たに手紙を書いて、起つた事をすべてヴァニシヤに告げ、一文もなしに伴を祝福してやつたのでございます、一週間は過ぎ、それから亦一週間はたちました。突然、ある日、四輪馬車が中庭へ這入つてきました。將官の方が私に逢ひたいと仰しやる。私はお通しするやうに吩咐けました。その人は部屋へ這入つてきました。そして色の黒い、歳の頃三十五位の髪毛も口鬚も頬鬚も眞黒な——まさしくコールネエフの肖像畫にあるやうな男が、私の前に現はれました。その人は私の亡夫のイヴァンアンドレイヴッチの友達でしかも同僚であつた、と自分で紹介しました。偶然通りかゝつて、私がそこに住んでゐるのを知つてゐたので、舊友の寡婦を訪問ずにはゐられなかつたと言ふんです。私食事をすゝめました、そしてあり合せたものを出しました。私たちはあれやこ

れやと談してゐるうちに、やがてドウブロフスキーのことを談しました。私は自分の災難の一伍一什を語りました。その軍人は眉を顰めて（そりや、奇態だ）と云ひました。（ドウブロフスキーはお金持ちで有名な人の他は、決して製はない、製つたところでそれらの人々の所有の一部分は残してゆく、そして悉くは掠奪しないといふ話です。人を虐殺するなんて、まだ一人も告發した者さへありませんよ、そりや、瞞されてゐなさるんだ、どうかお宅の執事呼んで下さい。）

「執事呼びにやりました、すると執事は早速参りました。けれども將官を一目見るや否や、執事は石のやうに棒立ちになつてしまいました。」

（お話しよ兄弟、どんな具合にドウブロフスキーは盗んだんだい、そして、どういふ譯でお前を絞りにしようとしたんだい。）執事はふるふる震ひだして、將官の足下に平伏しました。

（旦那様、私が悪いのです、魔がさしたのでございます。私は嘘をついてゐました。）

（さういふ譯ならあつた顛末を悉皆、女主人に申し上げるんだ。わしも聽かして貰はう。）

「私の執事は正氣づくことができませんでした。」

（ああ、それぢや）と、將官は言葉を續けました。どこで君はドウブロフスキーに逢つたか言はつしやい。）

（二本松のところで、旦那さま、二本松の木のことです。）

（お前に何と云つたね？）

（貴様は何者だ、どこへ行くんだ、何をしにつ、て訊きました。）

（成程、そして、それから？）

（それから私に手紙とお金とを出せと言ひました。ですから私はそれを渡しました。）

（それで、その男は。）

（へい、それでその男は……旦那さま、お宥し下さいまし！）

（ええ、どうしたんだい。）

（お金と手紙とを私に返戻しました、そして『誓つてこれをポストへ入れて来い』つて謂ひました。）

（ええッ！）

（旦那さま、お宥し下さいまし！）

（俺がお前の片は附けてやる。阿呆つ）と、手厳しく謂ひました。ところで貴方、夫人、この破戸漢の鞆を調べるやうにお吩咐下さい、そして、此奴のことは私に委せて下さい、私が懲らしてやります。）

「私はその方が誰だか、見當はついてゐました。けれども私は少しも氣がつかないやうな顔をして

りました。馭者は四輪馬車の箱に執事を縛りつけました。お金は見つかりました。軍人は私と一しよに食事をしました。さうしてそれから直ぐに執事を伴れて立ち去りました。執事は森の中でその翌日、しなの木のやうにポロポロの着物を着て樫の木にからげられてゐるところを發見されました。」

居合はず人々は誰も彼も、殊に若い婦人達はアンナ・ザヴィシュナの物語に黙つて耳を傾けてゐた。多くの人はドウブロフスキーを、ロマンチックの主人公のやうに思ひ做して、密かに彼によかれかしと望んでゐた。とりわけ情に脆い、感傷的な乙女であるマリア・キリローフナは、(現今では殆んど忘れられてゐるロマンチック派の小説「伊太利人」「ウドルフオの神秘」「森のローマンズ」の著者で、一世紀以前には非常に人氣があつた)アンナ・ラデクリーフ夫人の神秘的な恐怖が身内に浸み渡つたのであつた。

「それでアンナ・ザヴィシュナさん、貴女を訪つてきた男が、ドロブロフスキーだと思ひになるんですな。」と、キリラ・ペトロヴッチは訊いた。「貴女は大變な誤解をしてゐらつしやる、私はそのお客さんが誰だつたか、知らない。けれどもドウブロフスキーぢやなかつたといふことは確かだといふ氣がしますよ。」

「どうして、貴方、ドウブロフスキーでないといふことが? けれど、ぢやあ、誰でせう? もし

さうでないとしたら、旅人を街道とめて、吟味するのは誰でせう。」

「わしは知らない、けれども、ドウブロフスキーでないといふだけの確信は持つてゐます、わしは子供の頃のドウブロフスキーを憶へてゐます。あの髪毛が黒く變つてゐるかどうかは知らないが、その時分は縮れた、亞麻色の頭髪をした兒でした。だがドウブロフスキーは私家のマーシャより五つ年上なんだから、従つて三十五にはならない、二十三位だといふ確實な事實を知つてゐるんです。」

「その通りです、閣下」と、執行官は謂つた。「私はこの衣囊ポケットの中に、ウラデイミル・ドウブロフスキーの人相書を持つてゐます。それには、二十三歳だと明らかに解説してあります。」

「あゝ」と、キリラ・ペトロヴッチは謂つた。「序でのごことに、それを讀んでくれたまへ、聽かせて貰はうよ、あれの人相書を知つておくのも悪くはないだらうからね、多分あれはわれわれの掌てにかゝることもあるだらう、が、さうなりや容易に遁げられはしないからね。」

執行官は衣囊から、どちらかと云へば汚い紙を一枚とり出して、非常に重大らしい面持でそれを披いた。そして單調な節で讀みだした。

「ドウブロフスキーの人相書は、彼の以前の召使の證言するところに基けば左の如し。

「年の頃二十三歳、中脊にして晴れやかな顔色で鬚を剃り、蒼色の眼、亞麻色の頭髪、眞直な鼻を

持つてゐる。別に著しい特徴があるやうには見えない。」

「ぢや、それで、皆ですか？」と、キリラ・ペトロヴッチは謂つた。

「これですつかりです」と、紙を折り畳みながら執行官は答へた。

「御苦勞でした、執行官どの、中々貴い書類だ。その人相書を持つてゐればドウプロフスキーを探し出すのは、譯はないだらう！ 誰か中背の者はないか？ 誰か亞麻色の頭髮をした、眞直な鼻の、鳶色の眼を持つ者はないかつてぬ？ わしは賭けていふが、そんな風ぢや君はドウプロフスキーと三時間ぶつ通して話をしたつて相手が誰だか分りつこはないよ。成程、さういふお役人達は頭腦がいゝにきまつてゐるよ。」

執行官はおどおどして紙を衣囊に收めて、無言で鷲鳥の肉やキャベツをがつ／＼喰べてゐた。召使達は夫々洋盃に注ぎながら、客のまわりを、もはや數回往たり來たりした。數本の高加架酒ハイカサは大騒ぎをして扱かれた。そしてシャンパンの名のもとに有がたく受け容れられた。人々の顔は眞赤になり出した。そして談話はだんだん大きくなり、だんだん聯絡がなくなつて一層活氣づいてきた。

「さうだ、」と、キリラ・ペトロヴッチはつゞけた。「亡くなつたタラス・アレキセイウッチのやうな執行官は、二人とない！ あの男はさう易すく追跡の眼をくらまされる男ぢやなかつた。先生が饒け死んでしまつたのは實に残念だつた、だつてさ、悪者の連中は一人だつて遁げられつこはない

んだからね、あいつらを一擧に捕へてしまふだらうよ、だからドウプロフスキーだつて遁がれつこはないだらう。タラス・アレキセイウッチだつてドウプロフスキーから恐らくお金を貰らふだらう、が、遁がしはしないだらう。かういふのが故人の遺口だつたんだ、こんどは、わしがこの事件を一手に引受けて下々のものと一しよに、盜賊どもを追拂ふ以外には明らかに施す術がない、わしは森を探索させるために二十人派遣しだしてみよう、わしに仕へてゐる下々の者は腰抜けぢやない。どれもこれも單身で熊と組み打ちもする。だから賊に脊を向けることなんざあ、斷じてないよ。」

「キリラ・ペトロヴッチさま、お宅の熊はどうしてゐますね、」と、アントン・バアフノーチッチはこれらの話で、毛むじやらの古馴染のことだの曾ては熊の娛樂の、犠牲となつたことだのを思ひ出しながら訊いた。

「ミイシャ（譯註ミカエルの指小辭にし）は君に長命を祈つてゐるよ（譯註死んだといふ意味の、露西亞風の言葉である）」と、キリラ・ペ

トロヴッチは答へた。「ミイシャは敵の手に名譽の死を遂げましたよ、それをこに、征服者があるんだ！」と、キリラ・ペトロヴッチは佛蘭西の家庭教師を指さした。「あの方が君の——こんな風に言ふのを許して呉れるんなら——仇敵を討つて下すつたんだよ、——君、おぼへてゐるかね？」

「どうして忘れられませう、」と、アントン・バアフノーチッチは頭をかき乍ら謂つた。「あれだけはよく憶えてゐます、さうですか、ミイシャは死んだんですか、ミイシャは氣の毒でしたね、——ほん

とうに氣の毒ですなあ、なんといふ面白い奴だつたでせう、なんといふ賢い奴だつたでせう。あのやうな熊はもう二匹とありますまいよ。ちや、どういふわけで、あの先生がお殺しになつたんですな。」

キリラ・ヘトロローヅチは大満足で、佛蘭西人の手柄話を述べだした。それといふのも彼が自分の身邊にあつた事は何事によらず自慢するといふお目出度い性質をもつてゐたからである。客人達は非常に注意してミーシャの死んだ話を聞いた。そして驚いてデスフォルヂエスを眺めた。デスフォルヂエスは自分の勇敢が話題にのぼつてゐることを怪しみもせず、自分の制し難い生徒に何やら忠告を與へながら、彼の席に落着拂つてゐた。酒宴は三時間ばかりつゞいたのち、をほりに近づいた主人は彼の拭巾を食卓の上においた。そして人々は起ちあがつて、客間にぞろぞろと戻つた。客間には珈琲や骨牌や、さうしてあのやうに素敵に食堂で始められた酒宴のつゞきが彼らを待ち受けてゐた。

## 十

晩の七時頃に、客人達のなかには歸らうとした者もあつた、けれどもボンヌ酒で微酔機嫌の主人

は門に鏡をかけるやうに命じた。そして翌くる朝までは誰一人この家から出てはならぬと言ひ張つた。音楽は間もなく鳴り渡り、サロンの扉といふ扉は開け放されて、舞踏が始まつた。主人や主人と昵懇な人達は片隅に陣取つて、つゞけさまに洋盃を飲み干したり、きらびやかな若い婦人達に感嘆したりしてゐた。年増の婦人達は骨牌をやつてゐた。槍騎兵團の在る所は別として、いつもかういふ場合にきまつてあるやうに紳士達は婦人連よりも頭数が少なかつたので、相手に恰好な男は一人残らず、ぢきに舞踏の約束がついてしまつた。なかにも家庭教師は殊更際立つてゐた。皆婦人達は、悉く踊の相手方として彼を所望した。といふのは、彼女らはあの家庭教師とウォルツを踊れば非常に樂だと思つたからである。彼は五、六回マリア・キリローフナと踊つた。婦人達は非常に興がつて彼らを見てゐた。やがて眞夜中頃になつて、疲れ果てた主人は舞踏をやめさせ、舞踏晩餐をするやうに言ひ置いて、それから自分は寢室へ足を運び去つた。

キリラ・ヘトロローヅチの退場は、一坐の人々に一層の自由と活氣とを與へた。紳士達は思ひ切つて婦人達の傍近く坐つたり、少女らはあたりの者達と内證話をして笑つたり、貴婦人達は卓子のむかふへ、大きな聲で話しかけたり、紳士達は酒を飲んだり議論をしたり、騒々しく笑ひどよめいたりするやうになつた。一口に言へば、晩餐は非常に愉快であつた、そして裏面に甚だ快よい印象を残した。

たつた一人だけは一般の歡びに加はらなかつた。アントン・バアフノーチッチは自分の席に憂鬱に黙つて坐つたまゝで、茫んやりして喰べてゐた。が、非常に不安さうであつた。盜賊の談話が彼の想像を働かせたのであつた。彼が盜賊を恐れる正しい理由といふものは、やがて諸君にもお分りになるであらう。

アントン・バアフノーチッチは小さな赤い金庫が空虚であつたといふことは嘘でもなく罪を犯してゐるわけでもない、その證明には神様を引合ひに出してもいい。實際小さな赤い金庫は空虚であつた。一時その中に入れておいた銀行紙幣は、彼の胸の、シャツの中に持つてゐる革財布に、入れ換へられてあつた。この豫防策だけは彼のすべての人に對する猜疑や絶えざる杞憂を安らかにした。他人の家でその夜を明かさねばならなくなつてみると、彼は盜賊が易す易す忍び込めるやうな孤獨な部屋に泊められるのではあるいまかと案じるのであつた。彼は信ずるに足りるやうな同宿人を物色しつゝ見廻はしてゐたが、たうたう彼の選擇はデスフォルヂエスの上に落ちた。彼の容貌は——力そのものを表してゐる、——上に、特に憐れなアントン・バアフノーチッチが戰慄なしには考へ得られない熊との合戦によつて、明らかにされた彼の勇敢がその選擇を決定したのである。彼らが食卓から起ちあがつたとき、アントン・バアフノーチッチは咳拂ひをしたり咳をしたりしながら若い佛蘭西人のまはりをうろつき始めた。が、到頭彼に振向つて、かう話しかけた。

「エヘン——エヘン——今夜は貴方のお部屋に泊めては戴けませんでせうか、先生、つまり貴方の御存じの通り——。」

「Que désire monsieur? (何を御望みですかの意)」とデスフォルヂエスは慇懃にお時儀をしながら訊いた。

「あゝ——これははしたり、まだ露西亞語を御存じぢやないんですか、je vais moi chez vous coucher. (御一緒の部屋に寝たいんですがの意) お解りになりますか」

「monsieur, tres volon tiers. (どうぞよろしうござりますともの意)」とデスフォルヂエスが答へた。『venillez donner des Orders en consequence. (よろしいごやお指圖をいたしませうの意)』

アントン・バアフノーチッチは自分が佛蘭西語の心得のあるのに大變満足して、すぐに必要な用意をするために出て行つた。

客人達はお互に寢息みなさいを言ひたくなりだした。そして銘々自分に割當てられた部屋へ退いた。そのひまにアントン・バアフノーチッチは家庭教師を翼室へつれて行つた。その夜は闇であつた。デスフォルヂエスは灯をもつて路を照した。アントン・バアフノーチッチはお金がまだあるかしらと確めるために、かくし持つた寶を折々胸をおさへつけながら、かなり大膽について行つた。

翼室に著くと、家庭教師は蠟燭に火を點して、兩人とも著物を脱ぎ始めた。そのうちに、アントン・バアフノーチッチは錠と窓締りとを調べてみると、不安なので頭を振りながら部屋中を歩き廻つ

た。扉はたつた一本の大釘で閉ぢてあつた。そして窓といふ窓にはまだ二重框がつけてなかつた。

(譯註露西亞人は多になると) 彼はデスフォルヂェスに不平を鳴らさうとした。けれども彼の佛蘭西語の知識は、彼が十分はつきり言ひ表はすことができるにはあまりに限られてゐた。佛蘭西人にはそれがわからなかつた。それでアントン・バアフノーチッチは、餘儀なく不平を喋むより外はなかつた。二つの寢床は互に向ひ合せに列べられた。彼らは二人とも横になつた。そして家庭教師は燈火を吹き消した。

「Pouregnoi vous toucher ; pouregnoi vous touchér? (なぜ消したりなんぞな) とアントン・バアフノー

ウチッチは露西語の動詞を佛蘭西流に消すといふ言葉に活用して叫んだ。

「私は暗くてはdormir(眠れ)ません」

デスフォルヂェスは彼の叫んだことが解らなかつたので、彼にお息みなさいと言つた。

「いまましい異教徒だなあ！」とスピチーンは夜具にくるまりながら呟いた。「彼奴め、灯を消さないではゐられないんだな、それだけ彼奴は悪い奴だ、わしは灯なしぢや眠れない——Hssoo, Hssoo.」と彼はつゞけた。「Je ve avec vous parler. (話がしたるな) (あとさふ意)」

けれど佛蘭西人は答へなかつた。そして間もなく軒をかきだした。

「佛蘭西人の畜生め、軒をかいてゐるな」とアントン・バアフノーチッチは考へた。それだのにわし

は中々寝つかれさうにないんだ。盜賊はいつなん時、扉を開けて、それとも窓から攀ち登つて忍び込んで来るか知れないぞ。だが彼奴め、大砲を射つたつて眼を醒ましつこはないだらう。畜生つー」

「Hssao! Hssoo! あゝ、糞つー」

アントン・バアフノーチッチは黙つてしまつた。疲労と酒の結果とが段々彼の恐怖を征服するやうになつた。彼はうとうととしたが間もなく深い眠りに陥てしまつた。不思議な感情が彼に起つた。彼は眠つてゐながら、誰かゝ密つと自分のシャツの襟を引張るやうな氣かした。アントン・バアフノーチッチが眼をあけてみると、秋の朝の蒼白い光線で、デスフォルヂェスが自分の前に立つてゐるのが見えた。佛蘭西人は片手にポケット用の短銃を握つて、一方の手には大事な革財布の紐が攪けかゝつてゐた。アントン・バアフノーチッチは氣が遠くなつた。

「Qu'es t ce que cest, Ma soo, qu'est ce que c'est? (どうしたといふんです先生、ど) と彼は震へ聲で謂つた。

「シッ！ 物を言ふな！」と家庭教師は純粹の露西亞語で答へた。「黙つてゐろー さうでないと思はれないぞ。ドウプロフスキーといふのは俺のことだよ。」

吾人は今、讀者諸君にこの物語の最後の出来事を、それらに先立ついろいろな情況と参照して、説明することを許可していただきたい。そして、これは、吾人が今迄に述べる折りがなかつたものであ。

×××驛場の、吾人が既に話したことのある驛長の家の片隅に、非常に内氣な悄然として見える一人の旅人が腰掛けてゐた。そして平民のやうにも又、外國人のやうにも、いはゞ驛路をつなく騒音も耳に入らない人のやうな容子をしてゐた。彼のブリーチカ(譯註廣い四輪馬車的一種で、車窓も扉も隨意にしまられるやうになつてゐる馬車といふ)は中庭に駐まつて、車軸に油を注がれるのを待つてゐた。そのなかには、甚だ質素な身代を語る女行袍が置いてあつた。旅人は茶も珈琲も吩咐けないで、窓の外を見やりながら中仕切の裏にゐる驛長が五月蠅がる位、口笛をふいて腰掛けてゐた。

「ほんとうに口笛をやめてくれ、ばい、のにねえ」と、女驛長は低い聲で謂つた。どうしてまあ、あんなに口笛なんか吹くんだらう？ はちきれてしまつてくれ、ばい、ほんとうにいまいまい奴だよ！」

「どうしたといふんだね？」と、彼女の良人は謂つた。「勝手に口笛を吹かしておゝきよ！」

「どうしたといふんですつて？」と、ぶりぶりした配隅者は逆振を喰らはした。「貴方にや、あれが分らないんですかよう。」

「何をいつてゐるんだ。あの口笛がお金でも吹き出すと言ふのかい、おゝ、バアクーモフナ、口笛を吹かうが吹くまいが、あの人からはほんの少しにしろ、お金が儲かるんださ。」

「ぢや、彼の人を出してやりませうよ、シドーリッチさん、あなた何が面白くつてあの仁を引きとめておゝきなさるの、馬を出して、おやりなさい、そして勝手に出しておやりなさいよ。」

「待たしておくさあね、バアクーモフナ、既に四輪馬車トロボスキーが三臺しかないのだよ、四臺目のは休んでゐる。それに、もつと重大な旅行者が、いつ何時やつて来ないとも限らないんだからね。だから、わしは、佛蘭西人一人のお蔭で、こちらの首を危なくしちゃ耐らないよ、……おい、そら見たことか、あの馬の駈けてくる音が聞えないかい、どんな人かなあ？ 將官らしいねえ。」

四輪馬車が石段の前にて駐まつた。召使が馬車から跳び下りて、扉を開けた。そして一分たつて、軍服に眞白な帽子を冠つた若い男が構内へ這入つてきた。そのあとから從卒が窓框に載せてあつた小さな箱を運んで、隨ひてきた。

「馬を！」と、士官は横柄な聲で謂つた。

「只今すぐに！」と、驛長は答へた。「どうぞ貴方の旅行券を。」



「旅行券は持つてゐない、僕は本道を通つて行きやしないんだからね……それに、君は、僕を認めてはくれないのかい。」

驛長は馭者に急ぐやうに促した。青年は部屋を往つたり來たりし始めた、それから、彼は中仕切の裏へ廻つて女驛長に低い聲で訊いた。

「あの旅人はどういふ人だね。」

「存じません」と、女驛長は答へた。「何だか佛蘭西人のやうですわ、五時間も馬を待つてゐるんですよ、そして何にもしないで、しよつちゆう口笛ばかり吹いてゐるんです、私、全く五月蠅くつてね、ほんとうに。」

若い男は佛蘭西語でその旅人に話しかけた。

「どちらへいらつしやるんですか」と、彼は訊ねた。

「隣の市街まで行きます」と、佛蘭西人は答へた。「それから、まだ僕に逢はないで家庭教師に雇つてくれた地主の所へ行かうと思ふんです、今日中にそこへ著かなけりやならないんですが、どうも驛長がさうはさせて呉れませんのでね、こんな田舎ぢや、馬を周旋するのも仲々ですわね、士官さん。」

「で、貴方を雇つたこの邊の地主といふのは？」と、士官は訊ねた。

「トロエコウロフなんです」と、佛蘭西人は答へた。

「トロエコウロフ？ そのトロエコウロフといふのはどんな人ですか。」

「*Ma foi* (實にといふ意) 貴方、噂ぢやあんまりよくない人だ相です、高慢ちきで、我儘な貴族だつていひます、そして召使達には苛酷なので、一人としてこの主人と圓滿にや暮されたい、といふ事ですよ、トロエコウロフと聞いたゞけて皆震へあがつちまふ相です、それに家庭教師にだつて、「萬事無遠慮だつていふ話です。」

「で、そんな人非人に、貴方は自分から進んで雇はれようとおきめなすつたとは。」

「どうしようもないぢやありませんか、士官さん、トロエコウロフからは澤山俸給を出すつて、つまり一年に何やかやで三千留出すつて、言つて寄越したんです。恐らく僕は、誰よりも一番運がよくなるでせう、僕には年寄つた母があるので、俸給の半分は、母の生活費に送つてやるんです、それでも五年間にはその殘金から、將來自分が獨立するだけの小さな資本金が貯められませう、さうなつたら、うまいもんです、僕は巴里へ歸つて、商賣をやりませうよ。」

「トロエコウロフ家の者を誰か御存じですか」と、士官は訊いた。

「誰も知りません」と、家庭教師は答へた。「僕はモスコウで、トロエコウロフの友達の紹介で雇はれました、その友達といふ人の料理人が僕と同國人で、僕を推薦したので、お話しなければ分り

ませんが、僕は元來家庭教師になるつもりはなかつたのです、糖菓商人にならうと思つてゐました。けれど、貴方々のお國ぢや、家庭教師といふ職業が一番儲かると聞いたもんですから、」

士官は黙つて考へてゐた。

「僕の言ふことを聴きたまへ」と、彼は佛蘭西人に謂つた。「もしそんな契約の代りに、すぐ巴里へ歸つてもいゝといふ條件附きて、一萬留のお金をそろへて出したら、君はどう謂ふね？」

佛蘭西人は吃驚して士官を眺めて微笑んだが、頭を打ちふつた。

「馬の用意ができました」と、その瞬間に驛長は部屋へ入りながら謂つた。

從卒はこの口上をもう一度確かめて言つた。

「今ゆくよ！」と、士官は答へた。「ちよつと部屋を出ていつておつてくれ」驛長と從卒は退きさがつた。「戯言ぢやありませんよ」と、士官は佛蘭西語で話しつけた。「僕は一萬留を君に與げます、たゞ君にゐて貰ひたくないのと、書類が欲しいためだけなんです。」

さう謂ひながら、彼は小さな箱を開けて、五六枚紙幣を取り出した。佛蘭西人は眼を眊つた。彼は考へるところを知らなかつた。

「僕の居らないことが……僕の書類が！」と彼は吃驚して繰り返した。「身元證明書はこゝにあるんですが……屹度貴方は戯言だ、なんのために僕の書類が貴方に要るんでせう、」

「そりや、君の知つたことぢやありません、どうです、承知してくれませんか」佛蘭西人は、それでもまだ自分の耳を信ずることが出来なかつたが、青年士官に書類を渡すには渡した。士官は素早くそれを調べてみた。

「旅行券……あゝ、成程、推薦状を……拜見ませう、出産證明書……首府！ ぢや、こゝにお金をおきますよ、お歸りなさるがいゝ、さやうなら。」

佛蘭西人はその場に膠り著いたやうに突立つてゐた。士官は戻つてきた。

「僕はもう少しで一番重要なことを、忘れるところでした。どうか誓つて、この事はすべて、僕達の間の秘密にとどめておいて下さいよ……名譽に誓つてね。」

「名譽に賭けます」と、佛蘭西人は答へた。「けれど僕の書類は？ あれがなくちや、僕はどう仕様もないぢやありませんか。」

「君が最初、市街へ着いたら、ドウブロフスキーに盗まれたつて仰しやい。役人はそれを信じますよ、そして新しい書類を呉れますよ、さやうなら、君の善いことは神が受け合つてゐるんだから、巴里へ急いでお歸りなさい、そして達者な母君に逢ひたまへ。」

ドウブロフスキーは部屋を出て、四輪馬車に乗り込んだ。そして行つてしまつた。

驛長は窓の外を眺めて立つてゐた。そして四輪馬車が遠く牽かれて行つてしまつたとき、彼は妻

に向つてかう叫んだ。

「バアクチーモフナ、今のは誰だか知つてゐるか、あれがドウブロフスキーだぜ！」

女驛長は窓際へ駆け寄つた。しかしもう遅かつた。ドウブロフスキーはもはやずつと遠く去つたあとであつた。で、女驛長は良人ががみがみ言ひだした。

「あなたは恥知らずだよ、せめて一眠でもドウブロフスキーを見たかつたのに、何故もつと早く知らせて下さらなかつたんです、けれども二度と逢ふ時機があるまでには、長い間待たなければならぬわ。ほんとうに恥知らずつて、お前さんのことだよ！」

佛蘭西人は化石したやうに突立つてゐた。士官との契約といひ、金子といひ——あらゆる事が彼には夢のやうであつた。しかし紙幣束はこの奇怪な事件の眞實であることを雄辯に確言しながら、彼の衣囊の中に入つてゐた。彼は馬を備つて次の街へ行かうと決心した。馭者は極めてのろくさく馬を走らせたので、彼が街へ著いたのは日暮であつた。

關門に近づくと、そこには哨兵がある代りに荒廢した哨兵小屋が立つてゐたが、佛蘭西人は馭者に駐めてくれと言つて馬車から出て、馭者には乗物と旅行鞆とをやるから、それでブランドイを買つてくれと手眞似て言ひ表しながら徒歩で立ち去つた。佛蘭西人がドウブロフスキーの申込みに驚かされたと同じやうに、馭者もまた佛蘭西人の寛大なのにひどく驚かされた。けれどもこの「獨逸人」

(譯註—露西亞ではすべて外國人を一般にから呼んでゐる)は氣が違つてゐるのだなと、見當をつけたので、馭者は彼に頗る丁寧な時儀をして感謝した。そして街へ這入る氣にもならないので彼は、懇意な旅亭の方へ歩みを向けたがその旅亭の主人といふのは彼の友達であつたので、其處で、一夜を明かして翌くる朝、はれぼつたい顔と赤い眼とをして、ブリーチカも旅行鞆もなしに、四輪馬車で家路の旅にのぼつた。

ドウブロフスキーは佛蘭西人の書類を得てから、既に諸君が御承知の如く、大膽にトロエウロフの屋敷に現はれて、其處で、自ら職に就いたのである。ドウブロフスキーの秘密な策略がどんなものであつたか——吾々は段々後になつて分るであらうが——彼の行動の中には聊かも嫌疑をよめるやうなものはない。全くのところ、彼は小さなサーシャの教育に全然没頭するといふことはなく、サーシャに對しては十分なる自由を許し、課業の事はあまり綿密にはやらなかつた。ほんの形式通りにやつてゐた。けれどもその可愛い生徒が音楽を稽古するときには非常な注意を拂つて、屢々ピアノに向へる彼の傍に幾時間も坐つてゐた。

あらゆる人々はこの若い家庭教師を愛してゐた。つまりキララ・ペトロロウッチは礦場に出たときの家庭教師の勇敢と敏捷とのために、マリア・キリロフナは彼の限りない熱意と奴隷のやうな感謝さとのために、サーシャは先生の堪忍深いのに、召使達はドウブロフスキーがその身の陰謀とは全

く矛盾した親切と寛大とのために、愛してゐたのであつた。彼は家中の者になつてしまつたらしく、その一族の一人と自らも思つてゐるやうであつた。

家庭教師といふ職名でドウブロフスキーが入り込んだ時から、あの忘れ難い祝宴の日まで殆んど一月は経過してゐた。そして、この慇懃な若い佛蘭西人が、あらゆる近隣の地主達にとつて恐怖の源泉ともいふべき眞實正銘のあの恐ろしい盗賊だとは誰一人考へた者がなかつた。ずつとその間も、ドウブロフスキーは只の一度もボクロフスコエ村を立ち退かなかつたけれども、掠奪されるといふ報告は田舎人の捏造的な想像のお蔭であとを絶たなかつた。それは又ドウブロフスキーの部下が首魁の留守の間に彼らの計畫を繼續したのかも知れない。

ドウブロフスキーは個人的な仇敵として看做すばかりでなく、自分に不幸をきたした主なる發頭人の一人である男と、同じ部屋に夜を過しながら、誘惑に抵抗しきれなくなつてきた。彼は財布のありかを知つてゐるので、財布を奪はうと決心したのであつた。

彼が家庭教師から追剝に、全く思ひがけなく居直つたので、どのやうに憐れなアントン・パアフノイチッチが驚いたことか、諸君は御承知である。

## 十二

朝の九時に、ボクロフスコエ村で夜を明かした客人達は、一人一人客間へ行つてみると、茶釜はもはや沸騰つてゐて、その前に朝衣を著たマリア・キリローフナが坐つてゐた。そしてキリラ・ペトローヴッチは羅紗の上衣にスリッパを穿いて手洗鉢のやうに大きい茶碗から茶を飲んでゐた。

最後に現はれたのはアントン・パアフノイチッチであつた。彼は眞蒼な顔色をして、心配相なので、誰も彼もその容子に心を打たれた。そしてキリラ・ペトローヴッチはどこか悪いのかと訊いた。スピチーンはそこに家庭教師が何事もなかつたやうに坐つてゐるのをおそるおそる偷視しながら、逃げ口上を答へた。二三分経つて、一人の召使が這入つてきて、スピチーンに馬車の用意が出来ましたと告げた。アントン・パアフノイチッチは急いで居合はす人々に暇乞して、それからあたふたと部屋を出てすぐに立立してしまつた。客人達も主人もスピチーンに何事が起つたか分らなかつた。そしてキリラ・ペトローヴッチは、スピチーンは消化不良に罹つて苦しかつたらうと判断を下した。茶と送別の朝飲との済んだ後で、他の客人達も歸りだした。そして程なくボクロフスコエ村は空虚になつて、萬事平素の状態に立ち戻つた。

數日過ぎた。そして何一つこれといふほどの事も起らなかつた。ボクロフスコエ村に住む人達の生活は非常に單調なものになつてきた。キリラ・ペトローヴッチは毎日毎日狩獵に出て行くので、その間マリア・キリローフナは讀書や散歩や殊に音楽の練習に、その日その日を送つてゐたのである。

彼女は自分の心情が理解りかけてゐた。そして自分が若い佛蘭西人の善良な性質に無頓著でないといふことが、我にもなく惱ましいのを知つた。一方、ドウブロフスキーにあつては決して尊敬と厳格な禮義との範圍を踏み外さなかつたので、その結果、マリア・キリロフナの傲慢と内氣な邪推とを静めたのであつた。いよいよ益々彼を信任するやうになつた彼女は、魂の底までも探求するといふ癖を罷めた、彼女はデスフォルヂエスが居ないと懶さを感じ、彼がゐれば絶えず傍にゐて、あらゆる事柄について彼の意見を聞かうとしながら、いつも彼の言ふことには賛同するのであつた。恐らく彼女はまだデスフォルヂエスを戀してはゐなかつたのであらう。けれども最初の意外な障害のためか、或は運命の思ひがけない逆轉のためか、情熱の焔はマリア・キリロフナの胸の内に燃えあがつた。或る日、客間に這入つてゆくと、其處に家庭教師が彼女を待つてゐた。マリア・キリロフナは吃驚して、氣をつけてみると、家庭教師は眞青な、心配相な顔附をしてゐた。彼女はピアノの蓋を開けて二つ三つ音符を鳴らしてみた。けれどもドウブロフスキーは頭痛がするといふ口實のもとに、言ひ譯けして、弾くのをやめさせ、樂器の蓋を閉めさせて、そつと彼女の手の中に書附を握らせた。マリア・キリロフナは反省する暇もなく、その書附を受取つたが、殆んどそれと同時にさうした事を後悔した。しかしドウブロフスキーはもはや部屋にはゐなかつた。マリア・キリロフナは自分の居間へ行つて、書附を披いた。そして次のやうに讀んだ。

「今夜の七時に、小川の畔の東亭あづまやに居て下さい、貴女にどうしてもお話ししておかなければならないことがあるのです。」

マリア・キリロフナの好奇心は強く刺戟された。彼女はこの宣言を渴望すると同時に恐れながら、長い間期待してゐたのであつた。彼女は自分が先見してゐた言葉をいよいよ聞いてみると嬉しかつた。けれども家庭教師といふ地位の手前として斷じて彼女を戀しようなどいふ大望を抱いてはならぬ筈の男から、かやうな宣言を聞くのは不穩當だといふ氣かした。彼女は會合の場所へ行かうと決心はしたが、彼女はある一事について逡巡たぐひつた。どんな風に自分は家庭教師の宣言を受けたらよいであらうか、――貴族的な慷慨をもつてしたがよからうか、友達らしい諫言をもつてしたがよからうか、剽輕に嘲弄からかつてやつたがよからうか、それとも無言の同情をもつてしたがよからうか。その間も彼女は柱時計を絶えず眺めつゞけてゐた。日はもう暗くなつた。蠟燭が持ちこまれた。キリロフナ・ベトロヴッチは彼の所へ訪ねてきた近隣の人達と「ポストン」(譯註―これは現世紀 始期に於て非常に流行したカルタ遊びの名である)をやつてゐた。時計は七時十五分前を告げた。で、マリア・キリロフナは足音を忍んで外に出て、あたりを見廻し、それから花園へ急ぎ去つた。

その夜は眞の闇で、空は一面の雲に掩はれてゐた。二足と離れては何物をも見分けることが能なかつた。けれどもマリア・キリロフナは狎れきつた小路を辿つて闇の中をすんずん進んで行つた。で

二三分の中に彼女は東亭へ著いた。そこで、彼女は一息吐いて、静かな、無頓着な風をしながらデスフ

オルヂエスの前へ現はれようと鳥渡休んだ。而しデスフオルヂエスはもはや彼女の前に立つてゐた。

「有難たらう、僕の願ひをおき下すつて、」と、デスフオルヂエスは低い、哀しげな聲で謂つた。

「貴女がもし僕の願ひをきいて下さらなかつたら、僕は絶望したてせう。」

「貴方が恩をおかけて下さつた事を、後悔させまいと思ふからですわ。」

「止むを得ない事情で——僕は貴方とお別離しなければならなくなつたんです、」と、到頭彼は謂つ

た。追つて貴女もお聞きなさるてせうが——お別離する前に、僕は貴女に説明しておかねばならぬ

のです。」

「マリア・キリローフナは答へなかつた。かう聞いて彼女は豫期した宣言の前提だなどと思つた。

「僕は貴女が想像していらつしやるやうな者ぢやありません。」と、彼は頭部を下げながら言葉をつ

づけた。「僕は佛蘭西人のデスフオルヂエスぢやないのです——僕かドウブロフスキーなんです。」

「どうか、吃驚なさいませぬやうに！ 貴女は僕の本名を聞いて怖がるには當りません、さうです、

僕は彼女のお父様に、パンの堅いのこり屑まですつかり巻きあげられてしまつた揚句、先祖代々傳

つた屋敷から追ひ出されて、街道で追刺でもしろと突き離された不幸な男です。だが貴女は貴女御

自身のためにもお父様のためにも怖がることはありません、すべてもう済んだことす。……僕

は貴女のお父様を許してゐます。貴女はお父様をお救ひなすつたんです。僕が血を流した最初の罪

は、貴女のお父様の上にも實行する筈だつたんです、僕はお邸に焚き附ける場所だの、お父様の寢

所に忍び込む口だの、お父様の落ちのびる道を悉く遮断する方法などを心に定めながら、お邸のまは

りを徘徊してゐました、その時、貴女が天上の幻のやうに僕の傍を通つていらつしやいましたの

で、僕の心は和げられてしまつたのです、貴女の住んでいらつしやるお邸は、神聖だ、貴女と血族

といふ紐によつて結ばれてゐるものは一人も僕の呪ひの的におけない、といふ事が理解つたのです、

僕は狂氣染みた復讐の事を思ひやつて、自分の心からその考へを斥けました。遠くから僕は貴女

の眞白な外衣を見たいばかりに、ボクロフスキエ村の花園のまはりを終日うろつきました。貴女

が噪急にお歩きなさるあとを、僕は草叢から草叢へと身を忍ばせながら、僕が密かに隠れてゐると

ころに貴女の危険はないといふ思想に満足して後を跟けて歩いたものです。たうとう機會がきまし

た、……お邸に僕は勤めることになつたのです、この三週間といふものは僕にとつて幸福な日でし

た。その間の追想は僕の悲しい生涯の中の歡びとなります……今日僕は、もうこれ以上こゝには

みられないやうな意味の報告を受取つたのです、今日——たつた今から僕はお別れします……けれどもお別れする前に、貴女が僕を呪つたり軽蔑んだりなさらないやうに、僕の事を是非とも貴女に洩らしておかなけりやならないと思ひました。いえ、おぼえておいて下さいよ、時々ドウブロフスキーの事を思ひ出して下さい、ドウブロフスキーはこんな運命になる筈ぢやなかつたのです、ドウブロフスキーの魂は貴女を愛することもできたんです、それはもう——」

ちやうどその時、大きな口笛が鳴り響いたので、ドウブロフスキーは口を噤んだ。彼は彼女の手を握つて、彼の燃ゆる唇にそれを押しつけた。口笛がまた鳴つた。

「さやうなら。」と、ドウブロフスキーは謂つた。「僕を呼んでゐます、一分も遅れたら僕の身は破滅します。」

彼は立ち去つた。……マリア・キリローフナは身動きもせず立つてゐた。ドウブロフスキーは戻つてきて、もう一度彼女の手を握つた。

「たとひ不幸が貴女に襲ひかゝつてくるやうなこともあつたら、そして貴女が援助を得ることも出来ず、又誰の保護をも求めることが出来なかつたら、貴女の幸福に必要な物は何なりとも僕に要求して、僕に申込むといふ約束をしては下さいますまいか、この獻身的な愛を排斥なさらないやうに約束しては下さるまいか。」

マリア・キリローフナは無言のまゝ泣いてゐた。口笛が三度鳴り響いた。

「貴女は僕を破滅させるおつもりですか!」と、ドウブロフスキーは叫んだ。

「けれど返事を聞くまで僕は立ち去りません。約束をしてくれませんかそれともしてくれませんか?」  
「お約束しますわ!」と憐れた少女は呟いた。

ドウブロフスキーとの會見に因つてひどく心を亂されたマリア・キリローフナは花園を廻つて歸つた。彼女が自家に近づいた時、彼女は中庭に多勢の人がゐるのを見た。四輪馬車は石段の前に停つてゐるし、召使達は彼地此地走り廻つて、家中が混亂してゐた。遠くから彼女は、キリラ・ペトロヴッチの聲を聞いたので、自分の不在に氣附かれはしまひかとびくびくしながら、彼女は自分の居間まで辿りつかうと急いだ。キリラ・ペトロヴッチは廊下で彼女にばつたり出逢つた。訪問客達は吾々に古馴染の執行官をぎつしり取巻いて、質問を彼に浴びせかけてゐた。執行官は頂上から足の爪足まで旅装束に身をかためて、怪訝なそして心配さうな容子で彼らに應答してゐた。

「マリーシャ、どこへ行つてきたんだい」と、キリラ・ペトロヴッチは訊いた。「デスフォルヂエス先生に逢はなかつたかい。」

マリーシャはやつとの思ひで否定の返事をする事ができた。

「まあ、想像つても、みなさい。」と、キリラ・ペトロヴッチは言ひつゞけた。「執行官がデスフォルヂエス先生に逢はなかつたかい。」

ルチエス先生を捕縛に来られたんだよ、そしてあれがドウブフロフスキーだよ。」

九四

「あの男はあらゆる點で人相書に符合してゐるんです、閣下。」と、執行官は恭々しげに謂つた。

「おゝ！ 兄弟」と、キリラ・ペトロヴッチは口を挿んだ。「出て行つて下さい——お勝手に——その人相書をもつて、わしは自分でこの事件を取調べる迄は、自家の佛蘭西人を君に譲り渡しはしないよ、どうして誰があの臆病野郎のアントン・バアフノーチッチの言葉を信ずるものか、アントン・バアフノーチッチは家庭教師に盗まれかゝつた夢を見たのに違ひないんだ。なぜ翌くる朝あの男はその話をしなかつたんだらう。その事についてちや只の一言も言はなかつたぢやないか。」

「閣下、佛蘭西人に脅しつけられて、他言はしないつて、誓つたからですよ」と執行官は答へた。

「嘘ばかり！」と、キリラ・ペトロヴッチは叫んだ。「わしがこの不可思議な事件をすぐに晴らしてやる。家庭教師はどこにゐるんだ？」と、彼はその時這入つてきた召使に訊いた。

「どこにも見當りません、」と、召使は答へた。

「ぢや、捜してこい！」と、トロエウロフは疑惑を抱き始めたから叫んだ。

「君の自慢な人相書を見せたまへ」と、彼は執行官に謂つたので、執行官はすぐ彼に書類を渡した。

「フ、ムー、フ、ム！ 二十三歳、云々、その通りだ、だが、まだ何も證明されたといふ譯ぢやない、ところで、家庭教師はどうしてゐるんだらう」

「見つかりつこはありませんよ」と、再び答へられた。

キリラ・ペトロヴッチは不安になりだした。マリア・キリローフナは生きてゐる心地もしなかつた。

「マーシヤ。お前は眞蒼だよ」と、彼女の父は彼女に目を留めた。恐ろしいのかね」

「さうぢやありませんの、お父様」と、マーシヤは答へた。「頭痛がしますの。」

「居間へ行きなさい、マーシヤ、さうして怖がらなくてもいゝんだよ。」

マーシヤは父の手に接吻して、自分の部屋へ急いで去つた。部屋へ行つた彼女は、寢床の上へ身を放つて、ヒステリカルにわつと泣き出した。女中達は急いで彼女の手傳ひにやつてきて、やつこのことと彼女に衣服を脱がせた。そして冷水や能る限りのいろいろな氣附薬のお蔭でやつと彼女を平靜にかへした。女中達が彼女を寢床にねかせつけると、彼女はうとうとと眠りにおちた。

兎角する中にも佛蘭西人は見つからなかつた。キリラ・ペトロヴッチは彼の十八番の軍歌の節を口笛で大きく吹きながら、部屋の中を大股に往つたり來つたりしてゐた。訪問者達は銘々に叫き合つてゐた。執行官は間が抜けたやうな風をしてゐた。佛蘭西人は發見され相にもなかつた。恐らく彼は豫め警告されて、首尾よく風を喰はしたのであらう。しかし誰によつてか、どういふ方法によつてか？ それは不思議な事としていつまでも残つた。

十一時になつた、けれども、誰一人寢ようと言ふ者はなかつた。やがてキリラ・ペトロヴッチは



腹立たしげに執行官に謂つた。

九六

「ぢや、君は夜明けまでこゝにかうしてゐようといふんだね、わしの家は旅籠屋ぢやないよ、たとひあの男が眞のドウブロフスキーであつて、ドウブロフスキーが捕まつたつて、それで君方が何も賢いからといふ譯ではないよ、家へ歸りたまへ、そして今後はもう少し機敏にやりたまへ、それに亦、家へ行くだけの時間もあるんだからね。」彼は客人に話しかけて、言葉をついだ。「馬の用意をするやうにお吩咐なさい。わしは眠むたいんだ。」

かうした無作法な仕方てトロエウロフは客人達を追ひ出してしまつたのである。

### 十三

暫くの間は何一つこれといふ珍らしい事も起らないで過ぎた。けれども、翌年の夏の始め頃、いろいろ多くの事變がキリラ・ヘトロウヅチの家庭内に手違ひを起した。

ボクロフスコエ村から約三十露里ばかりのところに、ヴェレイスキー侯の裕福な所領地があつた。ヴェレイスキー侯は長らく外國で暮してゐたので、その所領地は或る退職陸軍少佐に管理されてゐた。ボクロフスコエ村とアルバトウヴァ村は絶えて交際をしてゐなかつた。ところが五月の下旬に、侯爵は歸朝して、彼が生れてからまだ一度も見たことのない自分の村に住ひを定めた。社交的な快

樂に慣れてゐた彼は、孤獨に耐へられなくなつたので、到着してから三日目に、兼ねて懇意であつたトロエウロフの許へ晚餐に出掛けた。侯爵は五十歳位であつたが、餘程ふけて見えた。あらゆる種類の不節制は彼の健康を破壊して、不節制そのものゝ拭ひ去るべからざる刻印を身につけてゐた。それにも拘らず彼の容貌は優雅で目立つてゐた。それに、日頃社交に慣れてゐたところから、婦人に對してはとりわけ、ある温厚な態度をするのであつた。彼には絶えず娯樂といふものがなくてはならなかつたので、絶えず倦怠の犠牲になつてゐた。

キリラ・ヘトロウヅチはこの訪問に非常な満足をした。彼は世間に通じた男から尊敬の標的まじとして訪ねて來られたのだと思つたからである。常例によつて彼は、自分の家の建物や狗小屋を見せるために侯爵を案内して、この訪問者をもてなした。しかし侯爵は澤山犬のゐる雰圍氣の中で殆んど呼吸いそもつけなかつたので、馨いそのいゝハンカチーフを鼻に押しあてゝ急ぎ去つた。刈り込んだ、なな木ななの庭だとか、四角な池だとか規則正しい散歩路だとかは、彼の氣に入らなかつた。彼は英國式の花園も、所謂自然的なもの好まなかつた。けれども彼はそれらの物を賞讃して、事々に感心したのであつた。召使は馳走の整つたことを知らせてきたので、二人は食堂へ連れ立つて行つた。侯爵は散歩に疲れ果てゝ、跛足をひきながら、もはや自分が訪問してきたのを後悔してゐた。

しかし食堂へ這入ると、マリア・キリローフナが彼らを出迎へた。——そしてこの老淫蕩家は彼女

の美しさに驚いた。トロエウロフは客人を彼女の隣に坐らせた。侯爵は彼女の面前にゐるといふだけで、もう元氣を回復してしまつた。彼はすつかり陽氣になつて、二つ三つ珍しい物語を談して聞かせたので、數度彼女の注意の眼を惹くことができた。食事を済ましてしまふと、キリラ・ペトロ・ヴッチは馬に一鞍置かうと發議した、けれども侯爵は天鵝絨の長靴を指さしながら、私は痛風ですからと戲言を言つて御免を蒙つた。彼は可愛い隣の人と離れてゐたくないの、馬車になら乗りませうと話をもちかけた。馬車は準備された。二人の老人と美しい若い娘とは、馬車に乗つて。出かけた。會話<sup>はなし</sup>はだらけなかつた。マリア・キリローフナはこの世事に長けた男の追從的なお世辭や機智に富んだ觀察を喜んで聴いてゐた、と、その時、突然ヴェレイスキーがキリラ・ペトロ・ヴッチの方を振向いて、彼にかう謂つた。「あの焼けた建物はどうしたといふんです——貴方がお持ちになつてゐるんぢやありませんか」と。

キリラ・ペトロ・ヴッチは眉を顰めた、焼け残つた屋敷のために呼び醒まされた思ひ出が、彼を不快にさせたのであつた。彼は今でこそ、この土地も自分の所有になつてゐるが、以前はドウブロッフスキーに屬してゐたのだといふ事を答へた。

「ドウブロッフスキーに？」と、ヴェレイスキーは鸚鵡返しに謂つた。「何ですつて！ あの有名な追刺の？」

「あれの父親です」と、トロエウロフは答へた。「そしてその父親といふ奴が、また本物の追刺でしたよ。」

「で、そのリナルドはどうなりましたな、捕縛されましたか、まだ生きてゐるんですか。」

「まだ生きてゐるし、捕縛もされませんよ。そのうちに、侯爵、ドウブロッフスキーがアルバト・ヴァ村の貴方のところへも訪ねてゆきますよ。」

「左様、去年も、何か焼かれたか掠奪れたかしたやうですね、マリア・キリローフナさん、その小説的な主人公と親密な間柄になつたら、随分興味があるだらうなんてお考へになりませんか。」

「興味がい」と、トロエウロフは謂つた。「彼女は疾くにドウブロッフスキーを知つてゐるんです、全三週間も、ドウブロッフスキーに音楽を教はつてゐたんですもの、だが、何一つ盗んでゆきませんでしたよ。」

そこでキリラ・ペトロ・ヴッチは僞佛蘭西人の家庭教師の話を述べだした。マリア・キリローフナは恰も針の上に坐らされてゐるやうな氣がした。ヴェレイスキーは深い注意をして耳を傾けながら、全く奇妙だと思つた。そして話題を變へた。散々馬車で乗り廻つて歸ると、彼は自分の馬車を齎らすやうに吩咐けて、今晚は泊つてゆくやうにキリラ・ペトロ・ヴッチが熱心に頼むにも拘らず、お茶を済ますとすぐに出立してしまつた。さりながら、出立する前に彼はキリラ・ペトロ・ヴッチに遊び

にきて下さい、そしてマリア・キリローフナも一しよに伴れてくるやうにと招待したので、高慢なトロエコウロフもお訪ねいたしませうと約束した。ヴェレイスキー侯の侯族らしい尊嚴や二つの勳章やそして彼が領地にもつてゐる三千の農奴のために、トルエコウロフは自分と同等の程度にヴェレイスキーを尊重したのであつた。

#### 十四

この訪問から二日たつて、キリラ・ベトロヴィッチは自分の娘を連れてヴェレイスキー侯の屋敷へ出掛けて行つた。アルバトールヴァ村に近づくにつれて、彼は綺麗なそして楽しい百姓の小屋や英國の館風やみかたふうに建つた石造の村莊を十分感嘆せずにはゐられなかつた。屋敷の前には濃い緑の芝生が擴がつて、その上には幾匹かの瑞西産の牛が、鈴を鳴らしながら草を喰つてゐた。廣々した邸園は四方八方からその家を圍繞してゐるのであつた。主人は石段の上まで客人達を出迎へて、若い美人に彼の腕を貸し與へた。それから彼女は華麗な廣間へ導かれたが、そこには三人前の膳部が列べてあつた。侯爵は窓際へ二人の客を連れて行くと、見惚れるやうな眺望が彼らの前に展開けた。ヴォルガ河は窓の下を流れ、そして流れのおもてには帆を二ばい張つた下に荷を積んだ傳馬船や、「肝ひやし」といふ、うがつた名によつて知られてゐる小さい漁船などが泛んでゐた。河の彼方には丘や野が展

開してゐて、五つ六つ、小さな村落がその風景に活氣を添へてゐた。

それから彼らは、侯爵が外國で買つてきた繪畫の陳列室を見るために奥へ這入つた。侯爵はマリア・キリローフナに、繪畫についていろいろの特質を説明したり、畫家の歴史を述べたり、又は繪畫の長所と短所とを指摘したりした。彼は繪畫について術學的な美術鑑定家のものものしい術語を用ひないで、感情と想像とで談すやうにした。マリア・キリローフナは喜んで彼の言ふことを聽いてゐた。

彼らは食卓に就いた。トロエコウロフはアムフィリトンの酒と料理人の手並とに對して充分公平な批評を報ひた。ところがマリア・キリローフナにあつては、彼女が天にも地にもこれで二度會つたきりの男と談をしながら、ちつとも狼狽も氣兼ね感じなかつた。中食を済ましてから、主人は客に、花園へ行つてみようではないかと云ひ出した。小島の散在する廣い湖の堤の東亭で彼らは珈琲を飲んだ。突然、管絃樂の音曲が鳴り響いてきて、六挺櫓の小舟が東亭の前へ漕ぎ寄せてきた。彼らは湖に掉さして小島のまはりをめぐつたり、小島へあがつたりした。ある島では大理石の像を、ある島では寂しげな、人工的裝飾の施された岩屋を、又ある島では不思議な碑文を刻んだ記念碑を彼らは見たが、その碑文はマリア・キリローフナの心に、侯爵の慇懃なしかし寡黙な説明では全く満足されない乙女らしい好奇心の眼を醒ました。時刻はいつの間にか過ぎて行つた。日はもう暗くなりだした。侯爵は冷氣と露とが下りるからといふ口實の下に急いで家に歸つた、家には茶釜が用意され

てゐた。侯爵はマリア・キリローフナに、獨身者の家庭の、細君役を勤めて貰ひたいと所望した。彼女はこの魅力に富んだ話手の盡きぬ談を聴きながら茶を注いだ。突然、發砲するやうな音が聞えて、ぼつと狼煙が空を照らした。侯爵はマリア・キリローフナに肩掛を取つてやつて、彼女とトロエコウロフとを露臺へ案内した。家の前の暗闇に、いろいろな色彩の火が燃えあがつて、くるくると渦巻きながら、東となつて舞ひあがり、雨や星のやうに泉水の中へ降りかゝつて、消えるかと思ふと、亦爆發しては、再び燃えあがるのであつた。マリア・キリローフナは子供のやうに喜んだ。ヴェレイスキー侯は彼女が喜ぶのが嬉しかつた。そしてトロエコウロフは自分を樂ませようとの望みと尊敬との表象として、侯爵のこの散財を受けたので、大恐悦であつた。

晚餐はあらゆる點で晝食の時と全く同じであつた。それから二人の客はあてがはれた部屋に退いて、翌くる朝再び、いづれ又逢はうと約束しながら、この愛想のいゝ主人の許を去つた。

## 十五

マリア・キリローフナは明けつ放しの窓の傍で、刺繡架に縫ひ箔をしながら、彼女の居間に坐つてゐた。彼女は戀しさ慕しさに心も上の空で、薔薇の花を緑色の絹糸で縫つたコンラアド夫人のやうに、糸を絡ますことはなかつた。彼女の針の下には、晝布が原圖の模様をとどこりもなく循環させてゐた。

が、それにも拘らず彼女の想念は、彼女の仕事に伴なはなかつた——想念は遠く翔けてゐたのである。

突然一本の腕がぬつと窓を越えて、刺繡架の上へ手紙をのせた。そしてマリア・キリローフナが正氣にかへつた時にはもう消えてしまつてゐた。その途端に召使が這入つてきて、キリラ・ペトロウツチ様がお呼びでございますと告げた。彼女はひどく震へながら手紙を襟巻の下にかくして、書齋にゐる父のもとへ急いだ。

キリラ・ペトロウツチは獨りゐるのではなかつた。ヴェレイスキー侯がその部屋に彼と一しよに坐つてゐた。マリア・キリローフナの姿を見ると、侯爵は起ちあがつて、彼にしては全くいつになく狼狽しながら黙つてお時儀をした。

「マリーシャ、こちらへおいでなさい、」と、キリラ・ペトロウツチは謂つた。「お前を非常に喜ばすやうな珍聞が少しあるんだよ、こゝにお前をおもつてゐる仁がみなさる、侯爵はお前に縁談を申込みなすつたのだよ。」

マリーシャは啞然とした。死人のやうな蒼白さが彼女の顔面に擴がつた。彼女は黙つてゐた。侯爵はつかつかと彼女に近づきて、彼女の手を執つた。そして柔らかな容子をして自分を幸福にさせて下さるかどうかと彼女に訊いた。マリーシャは黙つてゐた。

「承諾するだらうがな？ 勿論、彼女は承諾しますよ」と、キリラ・ベトロヴィッチは謂つた。「けれども御存じの通り、侯爵、そのやうな言は娘にや謂へないもんですよ、さあ、さあ、娘やお二人でお互に接吻して幸福におなりなさい。」

マリーシャは身動もせず立つてゐた。老侯爵は彼女の手を接吻した。俄かに涙が彼女の蒼白い頬を流れた。侯爵は微かに眉を顰めた。

「行け、行け、行け！」と、キリラ・ベトロヴィッチは謂つた。「涙を拭いて、機嫌を直して戻つておいて。娘つこといふものはみんな、許婚になる瞬間にや泣くもんです」と、彼はヴェレイスキーの方へ振向いて、つゞけた。「これは通例ですよ、まあ、侯爵、私らは用向のことを、つまり持参金のことを相談しませうよ。」

マリア・キリローフナは待ち遠しさうに暇の出る機会を待つてゐた。彼女は自分の部屋へ駆け込むと、内部から鏡を掛けて、すでに老侯爵夫人となつた自分の身を想像しながら、涙にかきくれた。俄かに彼女は老侯爵が忌々しく、そして憎々しくなつた。結婚といふことが絞首臺に登るやうに、地獄に陥ちるやうに彼女には恐ろしかつた。

「いゝえ、いゝえ」と、彼女は絶望して繰返した。「私は寧ろ尼寺へ這入つてしまはう、どうせするんなら、ドウブロフスキーさんと結婚したい……………」

それから彼女は手紙のことを想ひ出して、もしやあの仁から來たのではなからうかと胸さはぎを覚えながら熱心に手紙を読み始めた。事實、その手紙はドウブロフスキーが書いたもので、只次のやうな言葉だけが含まれてゐた。

「今晚十時に、前と同じ場所で。」

月は照つてゐた。その夜は静かであつた。風が折々吹き起つて、しとやかなさはめきが花園の上を擁て行くのであつた。

薄い影法師のやうな美しい若い乙女は、指定された會合の場所へ近づいた。まだ誰も現れなかつた。と、唐突、東亭の背後からドウブロフスキーが彼女の前に立ち現はれた。

「僕は何もかも知つてゐます。」と、彼は低い、悲しい聲で彼女に謂つた。「貴女が約束したことを思ひ出して下さい。」

「私を庇護つてやると貴女は仰しやつたわね。」と、マリーシャは答へた。「お腹立ちになつちやいけませんよ——けれどもその考へが私には怖かないのよ、どんな鹽梅に、私を助けて下さることができてる？」

「僕は憎むべき人間から貴女を救ふことができてるのです……………」

「あゝ、どうぞ、あの人には觸らないで下さい。もし私を愛してゐて下さるなら、あの手に手を出

すやうな冒険はしないで下さいまし。恐ろしいものゝ種子を一つだつて造りたくはございませんからね……………」

一〇六

「あの男にや手はかけますまいよ、貴女のお希望は、僕にとつて神聖なものですもの。僕は貴女に生命を投げ出してゐます、貴女のお名を汚辱すやうな罪は斷じていたしません。僕の不行蹟のために貴女が侮辱されるなんてことはありません。だがどうしたら貴女をあゝの残酷なお父さんから救ひ出せるでせう？」

「まだ、希望がありますわ、私は自分の涙で——私の絶望で父を動かさうと思ひますの、父は頑固です、けれどそれはそれは私を愛してゐてくれますの。」

「無駄な希望を頼んでゐたつて仕方がありません。愛情からぢやなくて、損得づくで結婚させる場合には、さうした涙といふものは若い娘達に共通な、有りきたりの臆病と嫌厭けきらひだらゝに見られるが關の山ですよ、だがね、あの侯爵が、貴女御自身は兎も角も、貴女を幸福にさせようと思つてゐるんだつたらどうします、貴女の運命を永久にあの老人の手へ委ねるために無理矢理に聖壇へ貴女を引ばつて行つたらどうします。」

「さうなつたら——さうなつたらどうにも仕方がありませんわ。ぢやかういたしませう——私、貴方の奥さんになりますわ。」

ドウブロフスキーは身を震はせた。彼の蒼白い顔は深い紅の色に掩はれた、次の瞬間には、前よりも一層蒼白くなつた。彼は頸垂れたまゝ、長い間黙まつてゐた。

「貴女の心魂こころの一ぱいの力を振るひ起して、父上に哀願し、父上の足下に貴女の身を投げ出してごらんなさい。貴女のために父上が用意していらつしやる未來のあらゆる恐怖を、つまり脆弱なそして放埒な老人の傍で貴女の青春が色褪せてゆく恐怖をお話しなさい。富貴といふことは、貴女にはほんの刹那の幸福をも與へてはくれないといふことをお言ひなさい。贅澤で慰められるものは貧乏ばかりですよ、たとひ慰められる場合があつても、それはほんの束の間に過ぎません、お父さんに胡麻化されてはいけませんよ、そして少しでも希望の影が残つてゐる間は、憤られても嚇されても怖がつちやいけませんよ、どうか、父上に五月蠅くせがみづめになさいまし。けれどももし他に思案もなくなつたら、はつきり事の顛末を説明することにお決めなさい、もしもお父様がいつまでも頑固を言ひ張つてゐるんでしたら、そのときにや——そのときにや恐ろしい後楯が出て來ますよつてお言ひなさい。」

こゝまで言ふとドウブロフスキーは両手で顔を掩つてしまつた。彼は息が塞るやうな氣がした。マーシャは泣いてゐた。

「情けない、情けない運命だ！」と、彼は苦しい溜息を吐きながら謂つた。「貴女のためなら私の

生命を捧げます、遠方から貴女に逢ひに来ることも、貴女の手に触れることも僕にとつちや言ふにもまさる幸福なんです、さうして、貴女を僕の波打つ胸に押しつけられるやうになつて、永久に僕は貴女のものです」と、貴女に謂へるやうになつても——僕はなんといふみじめな人間でせう！僕はかやうな幸福から逃げなければならぬのです、全力をつくして拒ねのけねばならぬのです、どうしても僕は貴女の足下に身を放げ出すことができないのです、あゝ不思議な、不當な報酬のお蔭なのです、おゝ！ どうして私は貴女のお父さんを憎まねばならぬのでせうか——だが今ぢや、心情の中では怨恨んぢやゐないやうな氣がしてゐます。」

彼はそつと彼女の華車な體軀に腕を廻して、自分の胸に軟かく抱きしめた。彼女は頼母しげに頭部を若い盜賊の肩にもたせかけて、二人とも無言のまゝ凝乎としてゐた。……時は翔けるやうに過ぎていつた。

「もう時刻ですわ」と、たうとうマーシャが謂つた。

ドウブロフスキーは夢から醒めたやうであつた。彼はマーシャの手を執つて、彼女の指に指輪をはめた。

「貴女がもし僕に頼まうと決心がついたら」と、彼は謂つた。「その時にや、この指輪を此處へ持つてきて、この櫛の木の空洞の中へ入れておゝきなさい。私がどうにでもいたします。」

ドウブロフスキーは彼女の手に接吻して、木の間に姿を消した。

## 十六

ヴェレイスキー侯爵の結婚しようとする意志は、もはや近隣にかくれもないことであつた。キリラ・ペトロウツチは彼の知己から祝詞を受けたり、結婚式の準備をしたりしてゐた。マーシャは一日一日と果斷的な説明をするのを延ばしてゐた。その間も彼女の年寄つた情人に對する振舞ひは冷めたく、窮屈さうであつた。侯爵はそんなことなかに頓著しなかつた。愛情の問題などは彼にとつて少しの關係がなかつた。彼女の黙諾は彼に全く十分であつた。

しかし時は過ぎていつた。マーシャは遂に實行しようとして決心して、ヴェレイスキー侯に一通の手紙を書いた。彼女は侯爵に少しの愛着をも持つてゐないといふことを率直に告白して、彼女との結婚は破談にしてくれ、彼女の父の壓制から庇護つてくれと懇願しながら、侯爵の心の裡に寛大な感情を呼び起さうと試みた。彼女はヴェレイスキー侯爵に宛てたその手紙をこつそり投函したのであつた。ヴェレイスキー侯爵は獨りてそれを讀んだが、自分の許婚の高潔なものには少しも動かされなかつた。却つて彼は結婚を急ぐ必要を悟つた。それ故に彼はその手紙を未來の舅に見せた。

キリラ・ペトロウツチは怒り狂つた。そして彼が手紙の内容を知つてゐるといふことをマーシャ

の手前表はささいやうにしてくれと、彼を説き服せるまでには中々侯爵は骨が折れた。キリラ・ベトローヅッチはこの事柄については言ふまいと約束したが、もう猶豫してはならぬと心に決めて、結婚式を翌日といふことに定めてしまった。侯爵はこれを至極尤もだと思つたので、彼は許婚の許へ行つて、彼女の手紙は彼を非常に悲しませたけれど、いづれ彼女の愛情を得たいものだと思つてゐるといふことや、彼女を断念めようと思へただけでも餘りに耐へがたく、この死刑の宣告状を承諾するだけの力がないといふことなどを彼女に談した。それから彼は恭々しく彼女の手に接吻して、キリラ・ベトローヅッチの決意については一言も謂はずに出立してしまつた。

しかし彼がその家を去るか去らぬに、彼女の父が這入つてきて、獨断的に彼女に明日の用意をするやうにと言ひ渡した。既にヴェレイスキー侯との會見によつていら立つてゐたマリア・キリローフナは、わつとばかりに泣き出して、父の足下に身を投げた。

「父さま！」と、彼女は物哀れな聲で叫んだ。「父さま！ 私を滅茶々にしないで下さいまし、私は侯爵を愛してはゐません、あの人の妻にはなりたくはありません。」

「どういふわけだい。」と、荒々しくキリラ・ベトローヅッチは謂つた。「今が今まで黙つてゐて、承諾してゐながら、今更、萬事が決まつてしまつた時分に、我儘にも拒絶するなんて、馬鹿な眞似をしなさんな、そんなことをしたつてもう駄目だよ。」

「私を滅茶々にしないで下さいまし！」と、憐れなマリーシャは繰り返した。「何故お父さまは私を追ひ出さうとなさいますの、私の愛さない男にくれて遣らうとなさいますの、私がお厭になつたのですか、私は以前々々どほり父さまと御一緒に暮してゐたいのでございます、父さま、私をりませんとお父さまはお哀しくなませう、さうして私が不都合だとお聞きになつたら尙更悲しくなませう、父さま、私に強ひないで下さいまし、私は結婚したくはないのでございます。」

キリラ・ベトローヅッチは憤然としたが、彼はその感情を押しかくして、彼女を推し退けながら残酷にかう謂つた。

「そりやみんな、馬鹿氣たことぢやないか、お前の幸福になくてならぬ事は、お前よりわしの方がよく知つてゐるんだ、涙なんかど役に立つものかい。明後日は結婚式をするんだ」

「明後日！」と、マリーシャは叫んだ。「あゝ神様！ いゝえ、いゝえ、出来ませんわ、出来る筈がありませんわ！ 父さま、聞いて下さいまし、貴方が私を滅茶々になさらうと御決心なさいましたら、その時にはお父さまの夢にも御存じない後楯が出てきますよ、出てきた曉に、お父さまは絶望して、無理強ひなすつたのを後悔なさいませう。」

「何だと、何だと？」と、トロエウロフは謂つた。「嚇すな！ わしを嚇すんだな！ 不屈な女だ！ お前の小さな想像にわしが乗ると思つてゐるのか、お前はよくも、わしを怖がらせようとし



たな、下らない女だなあ！

その後柄とはどんな奴か云つてみる」

一一二

「ウラデイミル・ドウブロフスキーさんですわ」と、絶望しながらマーシヤは答へた。キリラ・ペトロヴッチは、マーシヤが気が狂つたのではあるまいかと思つたので、吃驚して彼女を眺めた。

「それぢや、よし！」と、彼はちよつと沈黙の間をおいて彼女に謂つた。「お前の好きな男に救ひ出して貰ふのを待つてゐるんだな、だが、それまでは、この部屋に残つてゐろ——お前が結婚するその瞬間までは出てはならんぞ。」

かう謂つてキリラ・ペトロヴッチは錠をあとにかけて出ていつた。

長い間、隣れな乙女は、自分にふりかゝつてゐる凡ての事を想像しながらしく泣いてゐた。しかし暴風のやうな親子の對面は彼女の魂を軽くした。そして彼女は將來の問題や自分がなさねばならぬ事などを一しほ靜かに熟考することができた。最も重要な事は——あの忌はしい結婚から自由になることであつた。盜賊の妻としての身分は、彼女に用意された運命と比較べては樂園のやうに思はれた。彼女はドウブロフスキーに貰つた指輪を眺めた。彼と手段を講じたかつたので、彼女はもう一度どうしても彼と二人つきりて逢ひたいと熱望した。日暮時ならば彼女は、東亭の近くの花園でドウブロフスキーに逢へさうな豫感もした。で、彼女はそこへ出掛けて行つて彼を待つて居ること

とに決心した。

日が暗くなりだすや否や、マーシヤは自分の目論見を實行する用意をした。しかし部屋の扉には錠がかゝつてゐた。彼女附の召使は扉の外側で、私はキリラ・ペトロヴッチ様に貴女を出してはならぬと吩咐かつてゐますからと言つた。彼女は監禁のもとにあつたのだ。深く心を傷けられた彼女は窓際に腰を下ろして、衣服も脱がず暗い空をちつと眺めつくしたまゝ、夜の更けるまでそこを動かさなかつた。黎明がたになつて彼女はうとうとした。けれども彼女の軽い眠りは哀しい幻像に妨げられるのであつた。そして、程なく朝日の光線によつて彼女は眼を醒ましてしまつた。

## 十七

彼女は眼を醒ました。そして彼女の境遇のあらゆる恐怖が、彼女の心の裡に湧きあがつてきた。彼女は呼鈴を鳴らした。女中が這入つてきて、彼女の質問に應じて、キリラ・ペトロヴッチは昨夜アルバトローヴァ村へ出掛けて行つて夜が更けて歸宅したこと、お嬢様を部屋から釋放してはならない、そして誰とも話をさせてはならないと旦那様からの嚴命だといふこと、それから、牧師がどんな口實の下にでも村から出ないやうにといふおふれがあつたが、その他にこれぞといふ結婚式の準備のされた模様もないといふことを答へた。この報告を打明けてしまふと、女中はマリア・キリロ

フナの許を去つて再び扉に鍵をかけた。

女中の話はこの若い囚人を情けなく思はせた。彼女の頭脳は燃え、彼女の血は煮えたぎつた。彼女は萬事をドウプロフスキーに知らせようと心に決めた。そして彼女は指輪を神聖な櫛の木の穴に届け得られるやうな手段を、あれやこれやと考へ始めた。その瞬間に小石が彼女の窓にあたつて、硝子のがらがらと破れたので、マリア・キリローフナは中庭を視てみると、小さいサーシャが彼女に合圖してゐるのが見えた。彼女はサーシャが自分に愛着してゐるといふことを知つてゐたので、彼を見て喜んだ。

「お早よう、サーシャさん、なぜ呼ぶの？」

「お姉様、何か用がないかと思つてきたんです。父様はお腹立ちなの、だから家中の者に貴女の吩咐をきいちゃいけないつて禁めてあるんです、だけれど、お望の事は何でも仰しやい、さうすりや、僕、してあげますよ」

「有りがたう、私の可愛いサーシャさん、ぢや、聴いて頂戴な、あんた、東亭の近くにある古い空洞の木を知つてゐるでせう。」

「えゝ、知つてゐますとも、お姉様」

「それでは、姉さんを愛してゝ下さるなら、そこへ大急ぎで駆けて行つて、空洞の中へこの指輪を

入れてきて下さいな、けれど、誰にも見られないやうに氣をつけてね、」

かう謂ひながら、彼女は指輪を彼の方へ放りなげて、窓を閉めてしまつた。

少年は指輪を拾ひあげると、全力を盡して駆け出した。三分間許りで彼は神聖な木の所へ着いた。そこで彼は鳥渡足を駐めて、息を静め、あたりを見廻して、空洞へ指輪を入れた。彼は使命を無事に仕遂げたので、すぐに事實をマリア・キリローフナに知らせようと思つた。その時、突然、赤毛の襪をまとつた少年が東亭の裏から飛び出してきて、櫛の木の方へ進むと穴の中へ手をさし入れた。サーシャは栗鼠よりも早く、少年に飛びかゝつて兩腕をむづと攫んだ。

「こゝで何をするんだ。」と、彼は厳しく謂つた。

「君こそ何をするんだ。」と、少年はもぎ離れようと試みながら謂つた。

「指輪だけ置いてゆけ、赤頭」と、サーシャは叫んだ。「さもないと、僕獨特の遣方で懲してやるぞ」

返事をする代りに少年は握拳で、サーシャの顔に一撃を喰はした。が、サーシャはそれでも尙しつかり搦んだまゝ、一ぱいの聲を張りあげて叫んだ。

「盗賊！ 盗賊！ 救けにきてくれ！ 救けにきてくれ！」

少年は彼から遁げようと試みた。彼はサーシャより二歳ばかり年上らしく、ずつと強さうでもあ

つた。けれどもサーシヤはかなり敏捷だつた。彼らは二人で幾分かの間格闘してゐた。遂に赤い頭の少年は有利の位置を占めた。彼は地面にサーシヤを叩きつけて、咽喉元を押へつけた。ところがその途端に、頑強な腕が少年のむしゃくしゃの赤毛を、ぐつと引攪んだ。そして園丁のステパンが地面から半碼も宙にその少年を引揚げたのであつた。

「ああ！赤頭の畜生ッ！」と、園丁は謂つた。「どうして若さまをなぐつたりなんぞするんだ。」  
そのうちにサーシヤは跳び起きて、身構へした。

「下手に組んだな」と、彼は謂つた。「下手に組まなけりや、僕を放られやしないんだもの、指輪をすぐ渡してゆけ。」

「さうだとも！」と赤い頭の少年は答へた、そして唐突身をぐるりと振ちて、ステパンの手から彼の頭の刺毛をもぎ離した。

それから彼は遁げ出した。けれどもサーシヤが追ひついて、背後から一撃どんと喰はしたので、少年はばつたり倒れた。園丁は再び彼を捕へて、帯紐で縛りあげた。

「指輪を渡せ！」とサーシヤが叫んだ。

「鳥渡お待ちなさい、若様」とステパンは謂つた。「執事さんに尋問して貰ひに連れてゆきませうや」  
園丁は俘虜を村莊の中庭へ導き入れた。サーシヤは自分のスポンが破けたり、草に汚れたりした

のを、気がよりさうに眺めながら伴いていつた。突然、この三人の者は、キリラ・ペトロウヅチと顔をつき合はせたのに気がついた。キリラ・ペトロウヅチは既を検査に行くところであつた。

「どうしたといふんだい」と彼はステパンに謂つた。

ステパンは二言三言簡単に今あつた顛末を述べた。

キリラ・ペトロウヅチは注意深く彼の話に耳を傾けてゐた。

「こら、野呂間野郎、」と彼はサーシヤの方に振り向いて謂つた。「なぜあんな者と取組んだりするんだ」

「空洞木の中から指輪を盗んだんですもの、父さま、指輪を返へさせて頂戴。」

「どんな指輪だね？ どんな空洞の木からだい？」

「マリア・キリローフナさんの……指輪なの……」と、サーシヤはときまぎして、口籠つた。キリラ・ペトロウヅチは眉を顰めて、頭を振りながら謂つた。

「あゝ！ マリア・キリローフナがこの事にかゝはつてゐるんだな、みんな白状しておしまい、白状してしまはないと、生れてから受けたことのないほど樺の枝でひつばたいてやるぞ」

「誓つて眞個のところを申しますよ、父さま、僕ね、……父さま……マリア・キリローフナ姉さんがかうしてくれなんて言つたんぢやないんです、父さま、」

「ステパンや、さあ恰好な、新しい樺の枝を切ってきてくれ、」

「待つて頂戴、父さま、みんな云ひます。今日僕が中庭を走り廻つてみましたらね、マリア・キリローフナ姉さんが窓を開けたのです。僕が姉さんの方へ走つて行きますとね、姉さんはどうしたはづみか指輪をおつことしたので、駈けていつて穴洞の木の中に指輪を隠しておいたんですが、………」

「偶然にそれを落したんぢやないんだらう、——それをお前に隠して貰ひたかつたからなんだらう、ステパン、さあ、樺の木の枝をとつて来てくれ。」

「父さま、待つて頂戴よう、僕みんな云ひますから。マリア・キリローフナ姉さんは僕に、樺の木のところへ走つて行つて、空洞の中へ指輪を入れてきて呉れつて言つたんですの、だから僕、走つて行つて、その通りにしたら、この悪者が——」

キリラ・ペトロヴッチはその「悪者」の方を振り向いて、厳しく彼に謂つた。

「貴さまは誰の手下だ？」

「ドウブロフスーの旦那に使われてゐるものです」

キリラ・ペトロヴッチの顔は曇つてきた。

「だから、貴様は僕を主人のやうに思つてゐないんだな。よし、よし、僕の庭で何をしてゐたんだ？」

「覆盆子を盗つてゐました。」

「あゝ、あゝ！ この主人にしてこの下僕ありだな。牧師の通りに檀家といふものはなるものだ。ところで、わしのところの覆盆子は樺の木になつてゐるか？ さう聞いてよもゐたのかい」

少年は答へなかつた。

「父さま、指輪を取戻して下さいよ」とサーシャは謂つた。

「黙つておいで、アレキサンダー」とキリラ・ペトロヴッチは答へた。「大丈夫、今にわしが片付けてやるから、自分の部屋へ行つておいで。ところで、こら、藪。如才のない若者だなあ、もしすつかり白状してしまつたら、鞭で打たないばかりぢやない、お前の持つてゐる實を一つ五哥づつて買ひ取つてやらう、指輪を戻せば行かしてやるんだ。」

少年は握拳を開いて、掌に何も無いことを示した。

「白状しないのなら、貴様の丸つきり思ひもつかぬ事をしてやるぞ、さあ！」

少年は一言も答へなかつた。そして全くの馬鹿のやうに見せながら、頭を垂れたまゝ立つてゐた。

「よしッ！」とキリラ・ペトロヴッチは謂つた。「何處かへ押し込めて、遁げないやうに氣をつけろ、さうしなけりや家ぢゆうの者の皮を引剥ひてやるぞ。」

ステパンは少年を鳩小屋へ引張つて行つて、その内へ彼を閉ぢ込めた。そして鶏を世話する老婆

のテガーサに彼を監守するやうに吩咐けた。

「疑ふべくもない話だ、娘はあの憎むべきドウブロフスキーと音信をつゞけてゐるんだ、だがもし娘が本當にドウブロフスキーの援助を懇願してゐるとしたら——」とキララ・ペトロウヅッチは腹立たしげに十八番の口笛を吹いて、部屋の中を往つたり來たりしなから考へた。——「わしがすべてはこの機會に乗じなくてはならぬ……はてな！ 鈴の音がする。あゝ、ありがたい、あれは執行官だ、閉ぢ込めておいた少年を此處へ連れて來い。」

その中に小さい四輪馬車が中庭へ引き込まれて、吾々に古順染の執行官が、すつかり塵埃にまみれた姿で部屋へ這入つてきた。

「天晴れな珍談があるよ！」とキララ・ペトロウヅッチは謂つた。「ドウブロフスキーを捕へたよ。」  
「あゝ、有がたう、閣下！」と執行官は顔を歡びに輝かしながら謂つた。「どこにゐるんですか、」  
「つまりさ、ドウブロフスキー自身ぢやないんだが、ドウブロフスキーの一味のものなんだ、今にここへ來るよ、その子僧は、あの巨魁を逮捕する役に立つだらうぜ、それきた、きた。」  
何かかう殘逆な面をした盜賊に逢ふのだらうと豫期してゐた執行官は、年の頃十三歳位の何處となく華車な風をした若者を面のあたり見て驚いた。彼は奇怪な顔附をして、キララ・ペトロウヅッチの

方を向いて、説明を待つた。キララ・ペトロウヅッチはそこで、朝の事變を、しかしながらマリア・キリローフナの名は擧げないで語り出した。

執行官は惡戯子僧を時折じろじろ眺めながら、注意深く聴いてゐた。その惡戯子僧はといへば、白痴のやうな風を裝つて、自分の周圍に起つてゐるすべての事柄に關しては何ら注意を拂つてゐないやうに見えた。

「閣下とあちらでちよつと、お話したいのですがお恕し下さいませうか」とやがて執行官は謂つた。キララ・ペトロウヅッチは隣りの部屋へ彼を連れ込んで、扉をあとに、錠をかけた。

小半時として彼らは、かの囚人が、彼の運命にかゝる判決を待つてゐる廣間へと戻つてきた。「旦那さまはな」と執行官は彼に謂つた。「お前を市街の監獄へ放り込んで、刑罰に會はせてから、罪人の部落へ送つてしまふといふ思召なんだぞ。だが、わしはお前のために仲裁して、お詫びしてやつたんだ、解いてやつてくれ！」

若者は縄目を解かれた。

「旦那さまにお禮を申しあげろ」と執行官は謂つた。

若者はキララ・ペトロウヅッチに近づいて、彼の手に接吻した。

「家へ走つてゆくんだぞ、」とキララ・ペトロウヅッチは彼に謂つた。「さうして、これからは、櫛の木

から覆盆子なんぞ盗るんぢやないぞ。」

若者は外へ出ると、嬉しさうに石段を駆け下りて、あとをも見ずにキステネフカ村の方面へ、野を横きつて、轟然に走り去つた。村に著くと彼は、角隅すみの所から眞先に半分壊れかゝた茅屋の前に足を止めて窓をコツコツと叩いた。窓が開いて、一人のお婆さんが顔を出した。

「祖母さん、少しばかりばんをおくれ！」と少年は謂つた。「今朝から何にも喰べないんだもの、お腹が空いて、死に相だ。」

「あゝ！ お前がかい。ミーチイヤ。だがのう、いつたい今時分まで何處へ行つてたんだい、しよるのない子だねえ。」と老婆は訊いた。

「後で話ませう、祖母さん、どうか、少しばかりばんを！」

「それぢや小屋へお這入りよ。」

「時間がないんです、祖母さん、これから走つてゆかなけりやならないんだもの、ばんを、どうか、ばんを！」

「なんて性急な子だらうね！」と老婆はぶつぶつ苦情を言つた。「一片だよ」そして彼女は黒ばんの薄い一片を窓から差し出した。

少年は貪るやうにそれに噛りついた。が、それから、彼は途々それを喰べながら、彼の行路を續

けた。

日はもう暮れかけてた。ミーチヤはキステネフカ村の森を穀物藪や菜園畑などに沿つて、彼の道を通つて行つた。森の前に道案内のやうに聳えてゐる二本の松の木のもとまで来ると、彼は鳥渡足を止めあたりを見廻して、疍走つた鋭い、きれぎれの口笛を吹いたが、それから聴耳をたてた。弱々しい、長い口笛が應じて聞えてきた。そして誰だか、森から出て、彼の方へ進んできた。

## 十八

キリラ・ヘトロローヅッチは普段よりも大きく、得意な口笛を吹きながら廣間を往つたり來たりしてゐた。屋敷中は擾亂のなかにあつた。召使達は駆ずり廻はり、女中達は休む暇もなかつた。中庭には人々が雑沓してゐた。マリア・キリローフナの衣裳部屋の姿見の前には、女中達に取巻かれて一人の令嬢が、蒼白い、身動きもせぬうら若い花嫁の装ひに著飾つて貰つてゐた。彼女の頭部は金剛石の重みの下に力なくたゆんでゐた。彼女は粗忽な手がチクリとすると、かすかにびくりとするだけで、茫然やり鏡を見つめながら黙つて立つてゐた。

「まだ濟まないのか」と入口の邊でキリラ・ヘトロローヅッチの聲がした。

「もう一分ばかりでございます！」と女中が答へた。「マリア・キリローフナさま、お立ち遊ばして、御自分をよく見てごらんなさいまし、もうすつかりおよろしうございますか。」

マリア・キリローフナは起ちあがつたが、返事はしなかつた。扉が開いた。

「花嫁さまのお支度はできました。」と女はキリラ・ペトローヴツチに謂つた。「お馬車をお吩咐下さいまし。」

「承知した！」とキリラ・ペトローヴツチは答へて、卓子から聖像を執りあげながら、「マリーシャ、こちらへお寄り」と彼は感激した聲で謂つた。「お前を祝福する……」

哀れな乙女は跪ついて、啜り泣きをしだした。

「父さま……父さま……」と彼女は涙のなかに謂つたけれど、それからあとの聲は聞えなくなつてしまつた。

キリラ・ペトローヴツチは彼女に祝福の祈禱を授けようと思つた。彼女は起ちあがつたが、殆んど馬車まで運ばれていつたやうなものであつた。彼女の教母と女中の一人が彼女と一緒に乗り込んで、教會指して出掛けた。そこにはもはや、花架が彼らの来るのを待ち受けてゐた。彼は花嫁を迎へるために進み出てきたが、彼女の蒼白い顔と不思議な容子に胸を打たれた。彼らは冷い、人氣のない教會のなかへ一しよに這入つた。そして、扉はそのあとに錠をかけられた。僧正は聖壇から

出てきて、式はすぐに始まつた。

マリア・キリローフナは何物も見ず、何事も耳にしなかつた。彼女は午前中たつた一つの事を考へてゐたのであつた。彼女はドウブロフスキーを心待ちに待つてゐたのだ。一瞬間たりともその希望を離れはしなかつた。しかし僧正が彼女の方を向いてお定まりの尋問をしかけたときには、彼女はきく<sup>きく</sup>りとして、氣が遠くなるやうな思ひをした。けれどもまだ彼女はためらつて、彼女はまだ期待してゐた。僧正は彼女の答へを待たずに、取返のつかぬ言葉を宣言してしまつた。

式は終つた。彼女は自分の嫌ひな良人の冷たい接吻を感じた。彼女は居合はす人々から阿諛的な祝詞を聞いた。それでもまだ彼女は自分の生涯が永遠に制限されてしまつたものだとも、ドウブロフスキーが自分を救ひに来てくれないのだとも信ずることができなかつた。侯爵は物やさしい言葉附て彼女の方へ振り向いた。――が、彼女には解らなかつた。彼らは教會を出た。その入口にはポクロフスコエ村から來た百姓達が混雜してゐた。彼女は素速くちらと一目で彼らを残らず見渡したが、再び前のやうな神経過敏な容子になつてしまつた。新婚の二人は馬車に乗つて、アルバトローヴァ村を指して出掛けた。その行先地には、この結婚した二人をそこで迎へるためにキリラ・ペトローヴツチがもはや先廻りをしてゐたのである。

若い妻と二人つきりて侯爵は、彼女のよそよそしい態度に少しも不興がりはしなかつた。色氣た

つぶりの言葉だの、笑ふべき熱誠だのをもつて、彼女を疲らし始めなかつた。彼の言葉は簡単に、  
 一々返事をしないでもよかつた。こんな風で彼らは十露里ばかりも旅した。馬は凸凹の田舎路を飛  
 ぶやうに走り、車體は英國式の彈機の上で僅かに揺れてゐた。不意に追撃してくる叫び聲が聞えた。  
 馬車は駐まつて、武装した群衆がそのまはりを取巻いてしまつた。半分假面をつけた男が若い侯爵  
 夫人の腰掛けてゐる側の扉を、引開けて彼女にかう呼はつた。

「貴女は解放されたんです、降りて下さい。」

「どうしたといふんだ」と侯爵は叫んだ。「さういふ君は誰だ——」

「ドウブロフスキーさんのよ。」と侯爵夫人は答へた。

侯爵は、旅行用の拳銃を側衣囊サイドポケットから出して、假面をつけた盜賊に發射した。侯爵夫人は金切聲を  
 あげて、恐ろしさのあまり両手で顔を掩つた。ドウブロフスキーは肩に傷手を負つた。鮮血は滾々  
 として迸り出た。侯爵は瞬くひまもなく、いま一挺の拳銃を取り出した。しかし彼には發射する違  
 がなかつた。扉が明いて、數人の屈強な男の腕が、侯爵を馬車から引きずり出して、拳銃をひつた  
 くつてしまつたのである。彼の上に五六挺のナイフが閃めいた。

「侯爵には手をつけやならんぞ！」とドウブロフスキーが叫んだので、その恐しい仲間達は後へ  
 退さつた。

「貴女は自由です！」とドウブロフスキーは、眞蒼な侯爵夫人に向いて、言ひつゞけた。

「いゝえ！」と彼女は答へた。「もう遅すぎます！ 私は結婚してしまひました。私はヴェレイスキ  
 侯爵の妻なんですよ。」

「何と仰しやる？」とドウブロフスキーは絶望して叫んだ。「なあに！ 貴女はヴェレイスキーの奥  
 さんぢやありません、貴女は無理矢理に承諾させられたんです、貴女は承諾なさる筈がありません。」  
 「私は承諾したのでございます、誓つたのでございます。」と、彼女は斷乎と答へた。「侯爵は私の良  
 人です、ですから、私が自由になれますやうに、そして離縁してくれますやうに良人に頼んで下さ  
 いまし、貴方を贖すのではございません。私は最後の瞬間まで貴方を待つてゐました……けれど今  
 となつてはねえ、ほんとうに今となつては、遅すぎますわ、さあ、参りませう。」

しかしドウブロフスキーはもはや彼女の言ふことを聞いてはゐられなかつた。彼の傷の苦痛と、  
 心の激しい感動とが、彼のあらゆる力を奪ひ取つてしまつたのだ。彼は車輪にぼつたり倒れた。盜  
 賊どもは彼を取巻いた。彼はやつと二言三言配下の者に言ふことができた位であつた。彼らはドウ  
 ブロフスキーを馬に乗せて、その中の二人は彼を支へ、三人目の者は馬の手綱を持ち、同勢打そ  
 ろつてその場を引あげたが、馬車は道路の眞中にはつたらかしたまゝ、何一つ掠奪もせず、彼らの  
 巨魁の血の復讐には一滴の血も流さず、たゞ従者達を縛りあげ、馬からは馬具をはずして行つたの



みてあつた。

一一八

## 十九

深森の中央の、狭い芝生の路すぢに、疊壁と濠とで構成られた小さな堡壘がもり上がつてゐて、その裏にはいくつかの假小屋と天幕が張つてあつた。四方を圍んだ空地の中には、いろいろな衣裳といひ、武器といひ、すぐ盜賊と見わけのつく大勢の人が、大鍋のまはりに辛うじて腰掛けながら、食事をしてゐた。小型の大砲の側の壘壁の上には、哨兵が足を組み合せて坐つてゐた。その哨兵は經驗を積んだ仕立職だといふことを證據立てる器用さをもつて、針を運ばせながら自分の衣装の或る部分に、補布を縫ひつけてゐた。そして折々頭を擡げて、あたりを眺め廻はすのであつた。

ある柄杓などは手から手へ幾回となく渡つたが、不思議な沈黙はこの群衆の中を領してゐた。盜賊達は食事を済まして、順々に起ちあがつては、神に祈禱を捧げて、銘々の小屋へ解散してゆくものもあれば、露西亞人の習慣として森の中を逍遙しに行くものもあり、横はつて寝るものもあつた。哨兵は自分の仕事を仕あげてしまつたので、自分の衣物をふるつて、その補布方を感じさうに眺めて針を自分の袖に刺し、大砲に跨つて腰を下ろした。そして憂鬱な古い唄を肺臓の力一ぱいの聲で

歌ひだした。

その瞬間に、小屋の扉の一つが開いて、白い帽子を冠つた老婆が清潔した粹氣な位の衣物を着て、闕の上に現はれた。

「もう結構だよ、ステーブカ」と、彼女はぶりぶりして謂つた。「旦那さまは眠つてゐらつしやるんだし、まだまだお前、そんなに恐ろしく騒いぢやいけないんだよ、お前にや良心も憐憫もないのかえ。」

「勘忍しておくれ、ベトロフナさん」とステーブカは答へた。「もう、もうやらないよ、旦那さまをよく眠らして、達者にしようなあ、」

「老婆は小屋の内部へ退いた。そしてステーブカは疊壁の上を彼地此地歩きだした。」

小屋の中には、老婆はそこから出てきたのであつたが、傷手を負つたドウプロフスキーが中仕切の裏の冷たい寢床の上に横たはつてゐた。彼の前の、小さい卓子の上には、拳銃が載つてゐて、劍は枕頭の近くに懸けてあつた。泥まみれな小屋は、立派な絨毯をもつて懸け廻はし、掩ひかくしてあつた。片隅には婦人用の銀の化粧臺と鏡とがあつた。ドウプロフスキーは片手に、披いた書物を持つてはゐたが、その眼は閉ぢられてゐて、老婆が中仕切の裏から覗いても、彼が眠つてゐるのやらそれとも只ちよつと思案してゐるのやら見わけがつかかなかつた。

突然、ドウブロフスキーはぎよつとした。堡の中に非常な擾亂が起つたのである。そしてステープカがやつてきて、小屋の窓から彼の頭を突き込んだ。

「ウラディミール・アンドレイウツチの旦那さま！」と彼は叫んだ。「味方の者からの警報です——、味方は消撃されつゝあります！」

ドウブロフスキーは寢床から跳び起きて、武器をつかんで、小屋から出た。盗賊達は廓内にごつた返しに騒々しく雑沓してゐたが、首魁が現はれると、深い沈黙にひつそりとなつた。

「皆こゝにゐるのか」とドウブロフスキーが訊いた。

「斥候の外は皆居ります」と返事をした。

「銘々の位置に着け！」とドウブロフスキーが叫んだので、盗賊達は夫々彼が指定した場所に着いた。

その瞬間に、三人の斥候が堡の門へ駆けつけた。ドウブロフスキーは彼らを迎ひに行つた。「どうだ？」と彼は訊いた。

「軍勢は森の中へきてゐます」と答へられた。「われわれを包圍してゐるんです。」

ドウブロフスキーは門に銃を下ろしてしまふやうに命してから、大砲を自分で調べに行つた。森の中では、大勢の人馬の聲が一瞬毎にずんずん近寄つてくるのが聞えた。盗賊達は黙つて待つてゐ

た。不意に、三四人の兵士が森から現はれたが、味方に合圖の發砲をしながら引かへした。

「戦闘準備をしろ！」とドウブロフスキーは叫んだ。盗賊達の間では、ちよつと移動したが、すべては再び沈黙した。

すると、近づいてくる縦隊の叫喊の聲が聞えてきた。武器は木の間にびかびか光つた。そして百五十騎ばかりの軍兵が、森から飛び出して、荒々しい叫び聲をあげながら壘壁を目がけて突進してきつた。ドウブロフスキーは大砲に火繩を點けた。狙ひはたがわず——一人の兵士は頭部を射ち抜かれ、他の二人は負傷した。その一隊は混乱に陥つたが、將校は進め進めと指揮したので、軍兵はそれに従つて濠の中へ跳び込んだ。盗賊達は小銃と拳銃とをもつて彼らを撃ち下ろしてゐたが、やがて斧を手にもつて、壘壁を守り始めた。今や激昂せる兵士達は下の濠に仲間の二十ばかりの負傷兵を打捨てゝその壘壁を攀ち登りつゝあつたのだ。引組での格闘が始まつた。兵士はもはや壘壁の上に来たのであるから、盗賊達は遁げ足であつた。けれどもドウブロフスキーは指揮官を目ざして進み、拳銃を彼の胸に差しつけて、發射した。將校は地上へ仰向けに倒れた。五、六人の兵士は彼を抱きあげて、森の中に急いで運び込んだ。軍兵は主將を失つたので、戦ひを罷めた。勢を得た盗賊達はこの躊躇した機に乗じて、進みどよめきながら、攻撃者を遮二無二濠へ攻め落した。包圍者達は潰走しだした。盗賊達は烈しくおめきながら彼らを追撃していつた。勝利は決まつた。ドウブロフ

キーは敵が全く敗北したのを見定めると、配下の者達を押しとどめて、自分は自ら砦の中へ閉ぢ籠り、哨兵を倍加して、一人もその位置を明けてはならぬと言ひふくめ、そして負傷者を收容するやうにと命じた。

この最後の出来事はドウブロフスキーの勇敢な功績に對する政府の容易ならぬ注意を惹いた。彼の籠城地點についての報道が届いた。そこで、ドウブロフスキーの生死にかゝらず、彼を捕へるために分遣隊が送られた。數人の彼の一味の者が捕虜になつて、その者達から、ドウブロフスキーはもはや彼らの仲間の中にはゐないといふことが確められた。恰度今吾人が述べた戦ひがあつてから數日して、彼は、部下を悉く呼び集め、永久に彼らと告別しようといふ彼の意向を洩し、そして彼らの生活方法を變へるやうに忠告した。

「お前達はわしの指圖で金持ちになつたのだ。お前達は銘々旅行券ももつてゐるのだから、それを持つて、どこか遠い國へ安全に行くことができるだらう、その國へ行つたらお前達は氣樂に、實直な勞働をして、餘生が送れるんだ。けれどもお前達は一人残らず、無頼漢なんだから、恐らく自分達の渡世を擲たうとは思はないだらうがねえ。」

こんな話をしてから、彼は只一人の、從者を連れて彼らを去つた。誰一人として彼がどうなつたか知る者はなかつた。最初のうちこの陳述の眞相は疑はれた。それといふのも、首魁に對する盜賊

達の信仰が有名なものであつたからで、彼の安全を保證しようとして彼らが、この物語を考案したのだらうと察せられたからである。しかし出来事のあつた後、彼らの申告は確證された。あの恐ろしい訪づれや、附け火や、掠奪はばつたり罷んで、街道は再び安泰になつた。別に傳へ聞くところによれば、ドウブロフスキーはどこかしら外國へおちのびたとの事である。

ペートル大帝の黒奴

過渡期にある國にとつて、必要缺くべからざる知識を獲得せんがためにペートル大帝が海外に派遣した夥多の若い人達の中に、彼の教子で、黒奴のイブラヒムといふ者があつた。イブラヒムは巴里の士官學校で教育を受けたのち、そこを砲兵大尉の位階で卒業して、西班牙繼承戦争に勲功を樹てたが、重傷を負つたので、彼は巴里に歸つたのであつた。皇帝は手廣い職務の最中にあつても決してこの寵臣を見舞ふのを怠らなかつた。そしてイブラヒムは彼の進歩と品行に對する賞め言葉を受けてゐた。ペートルはイブラヒムが非常に氣に入つてゐたところから、再三再四イブラヒムに露西亞へ歸つてくるやうにと謂つたけれども、彼は一向急がうとはしなかつた。彼はやれ負傷をしたとか、やれ修業を完成したいからだとか、やれ金が足らないとかと、さまざまの口實を設けて言譯をしてゐた。それでペートルは寛大にもこの願望に應じて、自愛を專一にせよと仰せられ、彼が勉學に熱誠なるを讃められるのであつた。そして御自身の經費には極めてつましかつたのに、この寵臣に關したこともなると、御自分の財貨をすらも惜しまれることなく、しかもその金には大抵の都合やさしい忠告と訓誡の言葉とを添へられるのであつた。

あらゆる歴史的記事の證明するところに依れば、この時代のたはいない、馬鹿げた、そして贅澤な

佛蘭西は他に比類がなかつた。物堅く、敬虔で、嚴肅な、禮節のあつた宮廷として際立つてゐたルイ十四世の末期の御代の面影は何一つ残つてゐなかつた。オルレアン公はいかなる種類の悪風をも輝やかしい多くの徳性と結び合はしたので、不幸にも偽善の淡い影すら残つてゐなかつた。宮廷の豪遊は巴里では秘密でなく、その模範は傳染してゐた。その時にあつてローは(譯註—ジョンローは財政組の有名なる設計者である)活劇を演じたのであつたが、金錢に對する貧慾な心は、快樂と放蕩とに對する渴望に結びつき、財産は蕩盡され、徳義は滅び、佛蘭西人は笑ひ興ずるともに打算的になつて王國は諷刺的流行歌の音楽に崩れてゆくやうになつた。

その間にあつて社會は頗る珍しい繪畫を呈するやうになつた。娛樂に對しての教養と欲望とかあらゆる階級を通して齎らされた。富とか温順とか名聲とか才能とか、よしんば並外れたもの——好奇心を満足させたり娛樂になりさうなあらゆるものは、同じ耽溺に墜ち入つた。文學者よ博學者や哲學者はそれぞれの目立たない研究を先見して、時勢に従ひ流行を追つて崇拜されようと、俗世間の交際場裡に現れた。婦人達は全盛を極めてゐたが、もはや尊敬を要求してはゐなかつた。表面上の慇懃が、婦人達に示された以前の深い尊敬と交代してしまつたのである。今様アテネのアルシビアデスたるド・リシユユー公の悪戯は歴史に屬するものであつて、その時代の風儀の一表象をなしてゐる。

放埒を特徴とする幸福な時代には、

馬鹿げた事がベルを鳴しながら、

軽い足取りで佛蘭西中を駆け廻り、

徳義は神を敬つて謙遜へりくだらず、

あらゆる事は後悔を省くなり。

イブラヒムの容貌、イブラヒムの態度、教化そして性質は巴里に於て一般の注意を刺戟した。すべての貴婦人達は銘々自分達の家へ「皇帝シザールの黒奴」を招くことに骨を折つたり、お互に競ふて彼に氣をつけたりした。攝政官は屢自分の楽しい夜會にイブラヒムを招いたので、アロウエ・ヴォルテールの青年時代だの、チャウリエーの老年時代だの、モンテスキューとフォンテナールとの會話だのによつて活氣つけられる晩餐の席に彼は列したのであつた。彼は個人舞踏會だとか、饗宴だとか、序幕狂言だとかには缺すことがなく、彼の年齢と性質とからあらゆる熱情をもつて一般社會の渦中に溺れてゐた。しかし、これらの歡樂、これらの輝しい快樂をあの地味なペテルブルグの朝廷と交換するといふ思想のみが、イブラヒムを落膽させる一事ではなかつた。他にもつと強い縁が彼を巴里に括り付けてゐた。この若い阿弗利加人は戀に陥つてゐたのである。

L——伯爵夫人は、もはや青春の最初の花盛を過ぎてはゐたけれども、その美しさはまだ評判になつてゐた。十七の歳に修道院を出た彼女は、戀もしなかつた男と結婚した。が、その男は後になつて彼女の愛を雜作なく贏ち得たのであつた。噂によると彼女には數人の戀人があるといふ話であつたが、寛大な意見が世間に受け入れられてゐたお蔭で、彼女を少し可笑しいとか、けしからぬ向ふ見ずの女だとか言つて非難することの出来るものは一人もなく、彼女はいゝ評判を享けてゐた。彼女の屋敷は最も當世風なもの一つで、巴里の上流社會の集會所になつてゐた。イブラヒムは年若いメルヴィルによつて彼女に紹介されたのであつたが、そのメルヴィルといふ男は世間から、彼女の最近の戀人として目指されてゐたので——その噂に對して信用を恢復しようとする限りの力を揮つてゐたのである。

伯爵夫人は何も特殊な注意からといふてはなかつたが、イブラヒムを慇懃にあしらつたので、これがまた彼には媚びてゐるやうに感ぜられた。一般にこの若い黒奴は輕薄な好奇ものまよから眺められてゐた。人々は彼を取巻いてお世辭を云つたり質問したりして彼を壓倒するのが常であつた。——が、この好奇心は慇懃な外見をもつて掩ひかくしてゐても彼の自負心を害ふものであつた。婦人達の嬉しい心遣ひは、殆んど人々の努力の唯一の目的ではあるが、彼には何らの悦びも與へなかつたのみならず、悲哀と憤怒とをもつて彼を充たしさへした。彼は自分といふものが彼らにとつて珍らしい野獸

か、特殊な動物の一種で、まるで共通點のない世の中へ偶然に連れて來られたものゝやうな氣かした。彼は人目に留まらないでゐる人達を羨みさへした。そしてそれらの人達の些細な事をも幸福だと思つたりした。

自然は感情を鼓吹するために彼を創造したのではなかつたといふ思想は、獨りぎめな、無駄な目任から彼を解放したので、婦人達に對する彼の態度に珍しい魅力を附け加へた。彼の話し振りは單純で、威嚴がそなはつてゐたので、癖のある駄洒落や佛蘭西流の頓智の、鋭い諷刺に倦き倦きしてゐたL——伯爵夫人の眼の中に、彼は並々ならぬ好意を見出した。イブラヒムはしばしば彼女を訪れた。次第々々に彼女は若い黒奴の容貌にも慣れてきて、彼女の接待室で、髮油をつけた鬘の眞中に、殊更に黒く浮き立つ縮毛を何かしら氣持のいゝものとさへ思ふやうになりだした。イブラヒムは頭に負傷してゐたので鬘の代りに繻帶をしてゐた。彼は年齢まさに二十七歳、脊は高く、すらりとしてゐたので、L——伯爵夫人ばかりでなく、多くの美人達は單なる好奇心といふよりも阿ねるやうな感情で彼を眺めるのであつた。しかしひがんだイブラヒムはこれらのことについては更に氣をつけるでもなく、只單に媚として眺めるだけであつた。けれども彼の視線と伯爵夫人の視線とがばつたり出逢ふ時には、彼の疑念は消え失せてしまつた。彼女の眼はそれほど強く牽きつける愛情を表し、彼に對する彼女の舉動は實に素朴で、自由で、媚びやひやかしの影の些かもないこと

とは疑ふことができない位であつた。

戀するなどといふ思考は彼の腦裡に泛んだことがなかつたのである。けれども、伯爵夫人に逢ふのが日々にとつて彼には必要な事になつてきた。彼は至る所で彼女に逢はうとした。そして彼女に逢ふ度毎に天からの思ひ懸けぬ恩恵を受けたやうに思つた。彼がさう思ふ前に伯爵夫人の方ではその感情を察してしまつてゐた。希望もなく何ら要求もしない戀が、道樂者のあらゆる手管よりも、しかと女性の心に觸れるといふ事は否めない事である。イブラヒムがゐさへすれば伯爵夫人は彼の一擧一動に眼を放さないで、彼の言ふ事は何でもかでも傾聴してゐた。彼がゐなければ彼女は考へ深くなつていつも茫然と沈み込んでしまつた。メルヴィルは眞先にこの心的傾向に氣が附いたので、イブラヒムを祝つてやつた。傍聴者の賛成する言葉ほど戀をたきつけるものはないのである。戀は盲目である。それ故盲目そのものに信賴されないと、ところから、あらゆる扶助にしつかり捉まるものである。

メルヴィルの言葉はイブラヒムを振り起させた。彼が戀する婦人を獲得することかできるといふ事はこれまでに一度だつて彼の心に泛んだためしがなかつた。希望が俄かに彼の魂にほのぼのと明け初めた。彼は氣の狂はんばかりに戀に墜ちた。熱烈な彼の情熱に驚いた伯爵夫人は、友人としての調誠と常識に富んだ意見とをもつて、彼の熱烈と闘はうとしたが無駄であつた。彼女は自ら搖ぎ始めた……

慧眼なる世間の眼からは何物をも隠し掩せるものではない。伯爵夫人のこの新しい傾向は誰にも彼にも程なく知れ亘つた。ある婦人連は彼女の選擇に驚いた。多くの人々にはそれが全く當然のやうに見えた。なかには嘲笑する者もあり、一方には彼女の行爲を分別のない、恕し難いものゝやうに噂する者もあつた。熱情に最初熱狂してゐたイブラヒムと伯爵夫人とは何事にも氣がつかなくなつたけれど、やがて男達の意味ありげな戯談や婦人達の厭味たつぷりな評判が兩人の耳につき始めた。イブラヒムの冷やかな、慎重な素振がこれまでにはかやうな攻撃を防いでゐたのである。彼はちつと怵へてゐたが、どうして竹箆返したらいゝか解らなかつた。伯爵夫人は世間からの尊敬に慣れてゐたので、自分が誹謗や嘲笑の的となつてゐるのを知つて、ぢつと耐へてはゐられなかつた。眼に涙を溢へながら彼女はイブラヒムに不平を訴へたり、彼を嚴く非難したり、或ひは何か下らないいさかいから彼女が全く破滅するやうになつてはならないと思つて、自分を見捨てないやうにかき口説いた。

新しい事件が彼女の地位を尙更困難にするやうに向けた。といふのは、不謹慎な戀の結果が目に立ちだしたのである。伯爵夫人は失望して、イブラヒムにその事を打明けた。慰藉も忠告も結婚の申込みも——悉く言ひ盡されたが、悉く斥けられてしまつた。伯爵夫人はその身の破滅が避け得られない事を見てとつて、絶望の中にそれを待つた。

伯爵夫人の容體が知れ亘るや否や、風評が更に新しい勢を再びもちだした。感傷的な婦人達は恐怖の叫び聲を洩した。警語が巴里中で唯一人何事も知らず何事も疑はぬ彼女の良人に引用されて擴まつた。

宿命的な瞬間は近づいた。伯爵夫人の容體は悲惨なものであつた。イブラヒムは毎日彼女を訪づれた。彼は彼女の氣力や體力が段々衰へてゆくのを見た。彼女の涙と恐怖は刻々に新しくなつていつた。處置は急いで取決められた。手段は伯爵の迷惑にならぬやうに考へ出された。醫者は到着した。その二日前に哀れな夫人は新しく生れる赤子を見知らぬ人の手に渡すやうにと説き伏せられてしまつてゐたので、そのために腹心の人を呼びにやつてあつた。イブラヒムは不幸な伯爵夫人の臥つてゐる寢室に接近した部屋に居つた。……俄かに彼は子供のかよはい泣聲が聞いた——彼は歡びを抑へもやらず、伯爵夫人の部屋に飛び込んで行つた。……眞黒な嬰兒が、彼女の足もとの寢床の上に横たはつてゐた。イブラヒムはその方に進み寄つた。彼の心臓は烈しく波うつた。彼は震へる手で自分の見を祝福した。伯爵夫人はかすかに微笑んで、その方へ彼女の弱々しい手を差伸べたが、醫者は患者があまり昂奮しすぎるといけないことを心配して、イブラヒムを彼女の寢床から遠ざけてしまつた。新しく生れた子供は蓋附の籠に入れられて、裏梯子から戸外へ運び出された。それから別の子供が持ち込まれて、その搖籃は寢室に置かれた。イブラヒムは頗る落著かない氣も



ちて出立してしまつた。伯爵は豫期してゐた。彼は夜遅く歸宅して、妻の恙ない分娩を聞くと、非常に喜んだ。こんな具合で大醜聞を豫期してゐた世人は、その望みを欺かれたので、こんどは悪口をもつて自分ら自身を無理にも慰めずにはゐられなくなつた。萬事はもとの状態に復つた。

しかしイブラヒムは彼の運命を變へねばなるまい、晩かれ早かれ伯爵夫人と彼との關係が、彼女の良人の知る所となるに違ひないといふことを感じた。その場合にはどんな事をしたところで伯爵夫人の滅亡は免れ難いのである。イブラヒムは熱誠に愛してもゐたし、熱誠に愛し返へされてもゐたが、伯爵夫人は氣儘な、不眞面目な人であつた。彼女が戀したといふのはこれが最初ではなかつた。嫌厭や、憎惡までが、彼女の胸の中に、最も優しい感情と置き換はるかも知れないのである。イブラヒムは疾くに彼女の冷淡になる時を豫見してゐた。今迄彼は嫉妬といふ事を知らなかつたが、今となつて彼は杞憂からその豫知を感じたのであつた。彼は別離の悲痛にあまり苦しみたくなかつたのだと思ふ心から、彼はこの不幸な關係を斷ち切つて、巴里を去り、ペートル大帝とおぼろげながらの義務心が長い年月の間彼を招いてゐる露西亞に歸らうと決心した。

## 二

月日は過ぎた。しかし戀に迷つたイブラヒムは、口説き落した婦人の許を立去る決心がつかなかつ

た。伯爵夫人も益々彼に心牽かれるやうになつた。彼らの子は遠い田舎に里子にやられてゐた。世間での評判も下火になりかけたので、戀人達は過ぎ去つた経緯をちつと思ひ返しては、行末の事を考へまいと努めながら、極めて穏やかな享樂をさせた。

或日イブラヒムはオルレアン公の屋敷の廊下に居つた。公爵は彼の傍を通りすがりに立留まつて、一通の手紙を渡しながら暇な時にお讀みなさいと謂つた。それはペートル一世からきた手紙であつた。皇帝はイブラヒムが不參の眞の理由を推測したので、公爵に宛て、イブラヒムが露西亞に歸らうが歸るまいがそれは彼の自由意志に委せてあるから、朕は無理強ひするつもりは更にないが、いづれにしても前の里子を見捨てないやうにせよと書いてあつた。この手紙はイブラヒムの心の底に觸れた。その瞬間から彼の決心はついた。次の日、彼はすぐに露西亞に出立しようといふ彼の意嚮を攝政官に告げた。

「もう一度、君がしようとする事を考へ直して見給へ」と公爵は彼に謂つた。「露西亞は君の生れ故郷ぢやないのだよ、君が再び自分の焼け荒んだ家に歸つて行かうとは、わしは思はないが、佛蘭西に長く住み慣れてゐちや、半文化の露西亞の暮し向きや氣候にだつて、君は同じやうに外國人だよ。君はペートルの臣民に生れたんぢやなかつたんだ、わしの忠告を聴きたまへ、皇帝の寛大なお許しを利用して、佛蘭西に留つてゐたまへ、佛蘭西のためにやあ、君はもはや自分の血を流し

てゐるんだ、それにこゝにさへ残つてゐりやあ、屹度君の奉仕も才能も報ひられずにはおかないよ。」

一四六

イブラヒムは公爵に心から感謝した。けれども彼の決心は堅く、動かなかつた。

「わしは甚だ残念に思ふが、」と攝政官は謂つた。「恐らく君が正統かも知れない。」  
彼は佛蘭西の勤務からイブラヒムを退かせる事に約束して、皇帝に事の顛末をすつかり書き送つた。

イブラヒムは間もなく旅びの用意を整へた。出發のその前夜、彼はいつものやうにL——伯爵夫人の家で夜を過した。彼女は何事も知らなかつた。イブラヒムには自分の意嚮を彼女に打明けるだけの勇氣がなかつた。伯爵夫人は平氣で、しかも快活であつた。彼女は屢々彼を自分の傍に呼び寄せて、彼のふさぎ込んでゐるのをからかつたりした。晚餐が済むと客人達は歸つてしまつた。伯爵夫人と彼女の良人と、さうしてイブラヒムとだけが客間に残つた。この不幸な男は彼女一人つきりにさせてくれたら、世の中のものはすべて呉れて遣つたであらう。けれどもL——伯爵は心地よささうに燠爐の傍に坐つてゐたので、彼が部屋から出て行つてくれればいゝがといふ望みは明らかに駄目らしかつた。三人とも黙り込んでゐた。

「お眠みなさい！」と遂に伯爵夫人は謂つた。

悲痛がイブラヒムの胸を通り過ぎた。そして彼は俄かに別離のあらゆる恐怖を感じた。彼は身動きもせずにつゝ立つてゐた。

「お眠みなさいまし！」と伯爵夫人は繰り返した。

まだ彼は身動きもせずに居た……やがて彼の眼は霞み、頭がぐらぐらしてきた。そして彼が部屋の外へ出たのもやつとの事であつた。家に歸ると、彼は殆んど夢中に次のやうな手紙を書いた。

「私はお別れしようとしてゐるんですよ、親愛なるレオノーラさん。私は永久に貴女とお別れしようとしてゐるのです。私は書くより他に貴女に打明ける力がありませんから、かうして貴女に書きます。」

「私の幸福は續ける事が出来ません、といふのは私が運命と自然とに逆つて幸福を得たからです。貴女が私を愛するのはお止めにならなくてはなりません。魔力を打消さねばいけません。この考へは私が何もかも忘れてゐるやうに見えた時でも、貴女の足元で貴女の限りない愛に、貴女の熱情的な自制に私が夢中になつてゐるその瞬間にでも始終私に執拗くつきまとつてゐたのです、……無分別な世間はそれを理論で打消してしまふてせう。この冷い皮肉は晩かれ早かれ貴女を征服するに違ひありません。貴女の燃ゆる魂を含羞させるに違ひありません。さうして遂には貴女御自身の熱

情が恥かしくなるに違ひありません。……さうなつたら私はどうなるのでせう、いゝえ、私が死ねばいゝのです、そんな恐ろしい時の来ない中に貴女から離れる方が尙更いゝのです。

「貴女の平和は私が何よりも一番望むところです。その平和は世間の目が貴女に付き纏つてゐる間は享ける事はできません。貴女が惱んだ所のすべてを、すべて貴女の傷けられた自尊心を、あらゆる恐怖の苦痛を考へて御覽なさい。そして私達の子供の、あの身の毛もよだつ誕生を思ひ出して御覽なさい、ね、考へてもみて下さい、私がこれ以上貴女をあのやうな騒ぎや危険な目に逢はせられるか、人と名づけるには価値の乏しい、憐れな人間の、黒奴のこの賤しい運命と、かくもやさしく美しい貴女の運命とをどうして私が結び付けようと努められませう。」

「御機嫌よう。レオノーラさん。さやうなら、親愛なる唯一人の友よ。私はお別れします、私は一生の中最初にして且つ最後の喜びから去らうとしてゐます。私には祖國も親戚もありません。私は露西亞に行かうとしてゐます。露西亞へ行けば全くの孤獨が私を慰めてくれるでせう。眞面目な役にその時から身を捧げ、もし抑制しきれないならば、せめて愉快で幸福だつた日の痛ましい回想に少くとも氣をまぎらせませう。……さやうなら、レオノーラさん！、私は貴女の抱擁からもぎ離れるやうにこの手紙から身を引離します。さらば、幸福にいませ、さうして時折は憐れな黒奴の事を思ひ遣つて下さい。貴女の忠實なイブラヒムの事を。」

その夜彼は露西亞に向けて出立してしまつた。

旅路は彼が豫期してゐたほどひどいやうには思はれなかつた。彼の想像は本性を打負かした。彼が巴里を段々遠ざかるにつれて一層生々と一層間近かく彼の前へ、永久に去りゆく物が湧きあがるのであつた。

彼がそれと知らぬ間に、露西亞の國境を横ぎつてしまつた。もはや秋の季節に入つてゐた。しかし馭者達は、路の悪いにも拘らず疾風の如く馬車を驅つたので、彼が旅に出てから十七日目には、その頃街道になつてゐたクラスノエ・セロに著いた。

ペテルブルクまではまだまだ二十八露里も道程があつた。馬をつけ變へてゐる間にイブラヒムは驛舎へ這入つて行つた。隅の方に緑色の上衣を着て口に粘土のパイプを啣へた脊の高い男が、「ハムブルグ新聞」を読みながら、卓子の上に兩肘をついて凭れかゝつてゐた。誰か這入つてくるのが聞えたので、その男は頭を擧げた。

「あツ、イブラヒム！」と彼は、べんちから立ち上つて叫んだ。「變りはなかつたか、教子？」

イブラヒムはペートルだと分ると、嬉しさに殆んど飛び附かんばかりであつたが、恭しく押しとどまつた。皇帝は近寄つて彼を抱いて、彼の額に接吻した。

「お前が來るといふ報せがあつたので」とペートルは謂つた。「迎ひに出てきたのだよ、わしは昨日

から此處に待つてゐたんだ」

一五〇

イブラヒムは感謝を表はす言葉が見當らなかつた。

「お前の馬車はわれわれのあとから随ひて來させよう」と皇帝はつゞけた。「それからお前はわしの隣に腰掛けるんだ、一緒に乗つて行かう」

皇帝の馬車は引出された。彼はイブラヒムと同乗した。そして彼らは馳け出して行つてしまつた。一時間半ばかりして彼らはペテルブルグに着いた。イブラヒムは自分の主人が指圖して造へた市街を珍らしさうに眺めた。裸の堤防、波止場のない運河、木造の橋、あらゆるものがいたるところに、人間に敵對する自然力の最近の勝利を證據立てゝゐた。家屋は俄か造らへものらしかつた。全市中には壯大な所があるにしても高がネヴァ河位もので、それも、まだ御影石造の建物で飾られては居なかつた。けれどもはや軍艦や商船で覆はれてゐた。御料馬車は宮殿のある所謂ツアリチン園の所で駐つた。石段の上でペートルは、綺麗な、最新流行の巴里風に着飾つた三十五歳位の婦人に出逢つた。ペートルはその婦人に接吻したが、イブラヒムの手を執つて謂つた、

「カーチンカ、(カザリンの指小唄)わしの教子が分るかい。どうか以前のやうに可愛かつて、鼻負にしてやつておくれ。」

カザリンはその黒い、刺し通すやうな瞳をちつと彼に据ゑてゐたが、親しげな仕振で彼の方へ手

を差伸べた。脊が高く、すらりとして薔薇のやうに生々した二人の美人が、彼女の背後に立つてゐたが、恭々しげにペートルに近づいた。

「リーザ」と彼は彼女らの中の一人に謂つた。「オラニアンバム園でお前のためにわしの林檎を盗んだあの小さい黒奴をおぼえてゐるかね、こゝにゐるのがその男だよ。さあ、お前に紹介しよう。」

大公爵夫人は笑つて、顔を赤くした。彼らは食堂へ這入つた。皇帝の思ひの通りに食卓は並べてあつた。ペートルは家内中の者と一しよに食卓について、イブラヒムにも彼らと一緒に坐はるやうに勧めた。食事の進む間、皇帝は西班牙戦争だの、佛蘭西の内情だの、彼が多くの點に非難はしてもお気に入りの攝政官だのについて訊ねたり、いろいろの問題に亘つて彼と談をした。イブラヒムは精確な、觀察眼を持つてゐた。ペートルは彼の答辨がひどくお氣に入つた。彼はイブラヒムの幼年時代の面影を心に思ひ泛べて、機嫌よく快活に物語つてゐたので、誰一人この親切な、愛想のいゝ主人公が露西亞のあの有力な悪ろしい革新者たるポルタヴァ(譯註一千七百〇九年、チャールス七世の指揮せし率の露西亞人に、悉く撃破されたことがあつた。)の英雄であらうとは疑はずにはゐられなかつたほどであつた。

皇帝は中餐を済ましてから、露西亞の習慣で休憩するために席を退いた。イブラヒムを皇后と大公爵夫人とだけが残つた。彼は婦人達の好奇心を満足させようとして、巴里人の暮し振りだの、引き

つゞく遊山の事だの、移り變りの烈しい流行の事だのを話した。兎角する中に、皇帝のお氣入りの者が宮中に集つてきた。イブラヒムは立派なメンシコフ侯が、黒奴とカザリンと談をしてゐるのを見ながら、横柄な眼差で彼をちら／＼眺めてゐるのに氣が附いた。ペートルの厳格な顧問のヤコブ・ドルゴロウキー公や、世人から「露西亞ファウスト」の稱號を受けてゐた學者のブルウスや、(譯註)ペートル大帝は才能ある諸外國人を露西亞に移住せよと骨を折つた人であつた。以前友達だつたラゴウチンスキーや、そしてその他の人達は、皇帝に報告を齎らして命令を承るために參内して來たのである。

二時間ほどして皇帝は現はれた。  
「君が以前の勤務を忘れてゐるかどうかやつてみるさ」と彼はイブラヒムに謂つた。「石盤を持つて隨いておいて。」

ペートルは事務室に閉ぢ籠つて、政務に没頭した。彼はブルウスに、ドルゴロウキー公に、警察署長デヴィルに、順々に仕事をさせて、イブラヒムには數回勅令と裁可を書き取らした。イブラヒムは皇帝の敏捷で、正確な理解力といひ、強くてなやかな觀察力といひ、多方面に亘る事務といひ、一驚を喫しざるを得なかつた。仕事が終わると、ペートルはその日の中にしようと計畫してゐる事が出ながらイブラヒムにかう謂つた。

「遅くなつた、嚙ぞ草臥れたらう。——今夜はこゝで眠むがいゝ、昔はさうしたものだつたからね、明日はわしが起してやるよ。」

イブラヒムは獨りになつてから、やつと自分の思想をまとめることができた。彼はペテルブルグにゐる自分自身を見出した。彼は再び偉人を見た。その偉人の傍にゐながら彼はまだその價値も知らずに幼年時代を過したのであつた。殆んど悔恨の情を持つて彼は「——伯爵夫人のことを、彼女と別れてからこのかた一日としてしみじみ思つたことのないのを自分に懺悔した。彼はおのれを待つてゐる新しい生活様式——活動的な一定の事務——が、懶怠や秘めたる悲愁の感情に疲れた彼の魂を甦らせるであらうといふことを悟つた。偉人の仕事相手であり、そして、偉人に結びついた大國民の運命に影響を及ぼすのだといふ考へが、最初大望の崇高い感情の中に起つてきた。かういふ心持になつて彼は用意された疊寢床に横はつたが、それからいつもながらの夢に、遙か巴里に、可愛い伯爵夫人の腕に彼は連れ戻された。」

### 三

翌くる朝、ペートルは約束どほりイブラヒムを起して、彼がブレオブラゼンスキー聯隊(譯註)露西亞の陸軍で最も立派な聯隊の一つである。の近衛歩兵一大隊の首席中尉の位に昇進したことを祝して遣つた。その聯隊ではこ

れまで彼が隊長をしてゐたのであつた。朝臣達は銘々勝手にこの新來の寵臣の御機嫌を執らうとしながらイブラヒムを取巻いた。尊大なメンシコフ侯は親しい様子で彼の手を握りしめた。セレメチーフは巴里に住む知人の安否を訊るかと思へば、ゴロヴィンは彼を馳走に招待するといつたやうな風であつた。他の者達もこのゴロヴィンの例に倣つたので、イブラヒムは尠くとも全一ヶ月の間といふものは招待されずめであつた位である。

イブラヒムは今では單調とは言へ、忙しい生活を送りだしたので、従つて彼は些つとも物憂さを感じなかつた。日一日と彼は皇帝に益々牽きつけられるやうになり、彼の高尚な魂を益々よく貴ぶことができるやうになつた。偉人の思想に従ふといふことは甚だ興味深い研究である。イブラヒムはペートルが上院でポトリアンやドルゴウキと議論し、海軍大學では露西亞の海上權を論じてゐるのを見た。暇な時にはペートルがフェオファンやガヴリール・ポウジンスキやコビイヅチと一緒に外國出版物の翻譯を調べたり、商家の製造場だの機械工場だの、ある學者の書齋だのを訪問したりするのを彼は見た。イブラヒムには露西亞が巨大な工場のやうな觀を示した。その工場では機械ばかりがひとりて廻轉し、定められた規則の下にそれぞれの職工が銘々の業務に従事してゐるやうであつた。彼は心の裡に、自分も亦自分のベンチで仕事をせなければならぬ、さうして自分の巴里生活の歡樂を出来るだけ思ひ出さないやうにせなければならぬと感じた。しかしながら

こゝに一つ懐しい憂ひ出をかなぐり捨てることだけは彼にとつて何よりも困難であつた。彼は屢々L——伯爵夫人の事を思つた。そして彼女は屹度腹を立てゝゐるだらう、涙を流して悲嘆にくれてゐるだらうと想像した。……けれども時には恐ろしい考へが彼を重苦しくした。上流社會の誘惑、新しい關係、他の情人——彼はぞつとしたのである。嫉妬がイブラヒムの阿弗加人的血潮を沸騰らし始めた。そして熱い涙が彼の黒い顔に流れ相になるのであつた。

ある朝、彼は事務書類に埋もれて書齋に坐つて居た。その時不意に佛蘭西語で挨拶する甲高い聲が聞えた。イブラヒムはいきなりくりと振向いた。すると、彼が大世界の渦巻きなる巴里に残してきた若いコルサコフが、嬉し相に叫んで彼に抱きついた。

「たつた今僕は著いたんだ」とコルサコフは謂つた。で、すぐ君のところへやつてきたんだ、巴里の友達は何君に宜敷くつて、言つてゐたし、君のゐないのを悲しんでゐたよ、L——伯爵夫人からは間違ひなく君を連れて歸つてきてくれつて、仰せつかつてきたんだ、こゝに夫人から君へ宛てた手紙がある。」

イブラヒムはわなわな慄へる手にそれを受取つて、自分の眼を信じ兼ねながらも、上書きのよく見慣れた手蹟を眺めた。

「こんな開らけないペテルブルグにゐて、まだ退屈のあまり死なゝいてゐてくれるなんて、なんとい

「ふ嬉しいことだらう！」とコルサコーフは後をつよけた。「人はこんなところでいつたい何をしてゐるんだい、どんな仕事をしてゐるんだい、君の仕立屋は誰だい、オペラは開かれてゐるのかね。」  
イブラヒムは、多分陛下は丁度造船廠で事務をとつてゐられるだらうと浮つかり答へてしまつた。  
コルサコーフは笑つた。

「ねえ、君」と彼は謂つた。「今は君に用はないのだよ、いづれその中二人でゆつくり談をすることにしよ、僕は今陛下に御挨拶申し上げに行つてくる。」  
かう謂つて彼は踵を返すと、そくさと部屋を出て行つてしまつた。

イブラヒムは獨りになつたので、急いで手紙を披いた。

伯爵夫人は彼の虚偽と不信とをなぢりながら物優しく不服を列べ立てゝゐた。

「貴方は」と彼女は書いてゐた。「妾の平和が貴方にとつては世界のいかなる物よりも望ましいと仰つておいでよ。イブラヒム様、もしもこれが本當なら、貴方の思ひがけない御出立の報告によつて齎されたやうな状態に、妾を陥れなされるものでせうか、貴方は妾が引留めるだらうと思召したものでせう、妾が愛してゐる限りは、貴方の幸福のため、一つには貴方の義務とお考へなされる事のためにはどのやうにしてその愛を犠牲にするかぐらゐは、存じてをるといふことはわかりきつた事ではないですわ。」

伯爵夫人は愛情を表す情熱的な言葉を持つて手紙の筆を結び、たとひ將末お互に再び逢ふ望がなくともせめて時々は消息を呉れるやうにと懇願してあつた。

イブラヒムは有頂天になつてこの貴い文面に接吻しながら、手紙を二十遍も讀み返した。彼は伯爵夫人について何か聞きたいといふ翹望に燃え立つて、まだ海軍省に行けばコルサコーフに逢へるだらうと思ひながら、今しも海軍省へ出掛けて行かうとした。その時、扉が開いて、コルサコーフ自身が再び現はれた。彼はもはや陛下に拜謁をしてきたので、いつもイブラヒムとゐるときはさうであるやうに彼は頗る満足さうに見えた。

「Ente raus (僕達にとつて) 」と彼はイブラヒムに謂つた。「陛下は随分風變りの人だね、まあ、想像してみたまへ、陛下はリンネルの肌著を着て新しい船の檣の上にいらつしやるんぢやないか、そこまで僕は公文書をもつて攀ぢ登つて行かなけりやならなかつたんだよ。僕は繩梯子の上に立つてゐるんだもの、丁寧にお辭儀する餘地もたつぷりなかつたので、すつかり間誤附いてしまつたよ。あんな事つたら僕、生れてから一度だつてあつたためしが無い。だが、陛下は僕の書面を讀んでしまはれると、僕の頭のでつぺんから足の爪先きまで御覽になつたが、屹度僕の衣服の趣味と華やかなのに驚かれたのだ、それは兎も角も、陛下はにつこりなすつて、今日の集會に来てくれと仰つたんだ、けれど僕はペテルブルグぢや、全くの<sup>ストレンヂヤ</sup>外客だからね、六年もゐない中に僕は土地の風習をすつかり忘れてしまつ

たんだ。どうか、案内を頼むせ、一緒に行つて、僕を紹介してくれたまへ。」

一五八

イブラヒムはさうする事を承諾しておいて、急いで自分にもつと興味のある問題へ話頭を轉じた。

「ところでL——伯爵夫人はどうだい。」

「伯爵夫人か？　無論、最初は君が出立してしまつたので非常に悲しんださ、それから勿論、少しづつ落着いて来て、新しい戀人をこしらへたんだ。その戀人は誰だか知つてゐるかい、足長のR——侯爵だよ、どうして君はそんな風に黒奴の白眼をキョロつかせるんだい。變挺に思はれるのか、人間の性質として殊に女性の性質として、悲しみつゞけちやゐられないつてことを知らないのか、よつくそれを考へておきたまへ、その間僕は向ふへ行つて旅びの疲勞を休めるとしよう、では、僕を呼びにくることを忘れないやうにね。」

いかなる感情がイブラヒムの魂を充したとか、嫉妬か、憤怒か、失望か、否、否、深い、壓し附けるやうな悲哀であつた。「俺はそれを豫想してゐた。それは當然起きねばならなかつたのだ。」かう彼はひとり繰り言した。それから彼は伯爵夫人の手紙を披いて再び讀んで、頭を垂れて烈しく泣いた。彼は暫くの間泣いてゐた。涙は彼の心を慰めてくれた。柱時計を眺めてみると、もう出掛ける時刻であるのに氣がついた。イブラヒムはいつそ缺席したいと思つたが、集會は義務の問題であり、陛下は家臣達の出席を嚴びしく要求しておられるのだ。彼はひとりて著物を著更へてコルサコーフ

を誘ひに出て行つた。

コルサコーフは化粧服のまゝ坐つて、佛蘭西語の書籍ほんを讀んでゐた。

「随分早いねえ」と彼はイブラヒムを見ると、彼に謂つた。

「失敬した」とイブラヒムは答へた。「もう五時半だ、遅くなるから、急いで、着物を著て、出掛けることにしよう。」

コルサコーフは跳び立つて、力一ぱい呼鈴を鳴らした。下婢は駈け込んできたが、彼は忙て、著物を著かけてゐた。彼の佛蘭西人の従者は、赤い踵の靴と青天鷲絨の半ズボンと小金物で縁縫した赤い下衣とを彼に渡した。彼の鬘は急いで控の間で髮粉をつけられて彼のところへ持つて來られた。コルサコーフは短く刈り込んだ頭にそれを冠つて、劔と手袋とを吩咐けて、鏡の前で十遍もとみかろみしながら、支度ができたといふことをイブラヒムに告げた。下男は彼らに熊皮の外套を渡した。さうして彼らは冬宮指して出掛けた。

コルサコーフはペテルブルグで誰が一番美人だとか、君が一番上手な踊手は誰だと思ふとか、近頃どんな舞踏が流行してゐるのだとか、と質問してイブラヒムを困らせた。イブラヒムは頗る不承不承に彼の好奇心を満した。その中に彼らは宮廷へ到着した。夥多の長い櫓や、舊式の馬車や、びかびかした乗物はもはや芝地に駐つてゐた。石段の附近には仕著しやくを著て、口髭を生した馭者達が



雑沓してゐた。箔散らしの織物や羽毛飾や紋章付きの輻（かぶ）てけばけはしく装つた従者達は駆け廻り、

一六〇

驃騎兵や側仕や無恰好な召使などは彼らの主人の外套や暖（てぬく）手套を積み重ねてたりしてゐた——が、彼らこそは當時の上流社會の意見に依れば缺くべからざるお供の一團であつたのである。イブラヒムが表はれると、「黒奴だ、黒奴だ、陛下の黒奴だ！」とかういふ大勢の眩（くら）き聲が起つた。彼は急いで入り亂れた群衆の中を通り抜けて、コルサコーフを案内して行つた。廷臣がこの二人のために扉をさつと開けてくれた。そして彼等は廣間へ這入つた。コルサコーフは啞然とした。……大きな部屋の内は煙草の煙の霞んだ中にぼんやりと燃えてゐる脂蠟燭に照らされて、その肩から斜かに青いリボンを掛けた上院議員連、大使連、外國人達、青い軍服の近衛士官達、ジャケットと縞ズボンの船長達は管弦樂の絶え間のない音につれて、込み合つた中を往つたり來たりして動いてゐた。貴婦人達は壁に凭れて坐つてゐたし、若い人達は素晴しく當世流行にめかし込んでゐた。金銀は彼女らの衣服にきらきら光り、奇怪な女袴からは彼女らの華車な體軀が花の莖のやうに生えのびてゐた。ダイヤモンドは彼女らの耳に、長い捲毛に、そして頸のまはりにびかびかしてゐた。彼女らは銘々色男の來るのを待つたり、舞踏の始まるのを待つたりして、樂し相に左を見たり右を見たりしてゐた。稍年増の婦人達は舊式の著物と新式のそれとを抜目なく配合させようと努めてゐた。彼女らの帽子は皇后のナタリア・キリローフナ（譯註）（ペートル大帝の母君）の小さい黒貂（カブリ）の被物に似せて作つたもので、サラ

ファンとドーセグリーカ（譯註）（短い袖無し）のジャケット（カウチ）を思ひ起させるやうな寛衣や外套をきてゐた。彼らは快樂といふよりも却つて驚異をもつてこれらの新しく紹介された娛樂に加はつてゐるらしく見えた。そして木綿のスカートに赤のジャケットを着て、長い靴下を一樣に揃へて自分達の家庭でもあるやうに仲間同志で笑つたりべちやくちやお喋りしたりしてゐる和蘭の踊り手達の細君や娘には憤恚の眼差を投げてゐた。

新しく到着した彼ら二人を見ると、一人の召使がビールと洋盃とを盆にのせて近づいた。コルサコーフはすつかり當惑してしまつた。

「Que diable, est ce que tout cela ?」（こりや、一）と彼はイブラヒムに叫くやうに謂つた。

イブラヒムは微笑を禁じ得なかつた。皇后や大公爵人達はその身の美と態度とを人に驚かせながら、客人達に愛想よく言葉を交しつゝ、彼らの列の間を歩いてゐた。陛下は別の部屋にゐた。コルサコーフは陛下に拜謁しようと思つて、絶えずどやどやしてゐる群衆の中を無理に押し分けて行つた。その部屋には重に外國人がゐて、勿體らしく粘土のパイプをくゆらせたり、土器の酒壺から酒をあほつたりしてゐた。食卓の上にはビールや葡萄酒の瓶だの、革の煙草入れだの、パンチ酒の洋盃だの、又は幾つかの象棋盤だのが載つてゐた。その中の一つで、肩巾の廣い英國の踊手を相手にベートルは象棋をさしてゐた。彼らは煙草の煙を燻らしながら熱心にさしつゝ、れつしてゐた。そし

て陛下は相手のさした思ひ掛けに手に心を奪られてゐたので、コルサコーフが象棋の手についてお世辭笑ひをしたり興じ狂つてゐるのに気がつかなくつた。恰度その時、胸に大きな花毯をつけた頭丈な一人の紳士が慌て、部屋へ跳び込んできて、舞踏が始まりましたと大きな聲で告げたが、忽ち引き退つてしまつた。夥多の客人達はその後からつゞいたので、コルサコーフもその連中に交つた。

豫想外の光景が驚愕をもつて彼を充した。大廣間の長さ一ばいに、いとも哀しげな樂器の音につれて婦人達と紳士達とが二列に向ひ合つて列んでゐた。紳士達は低く頭を下げ、婦人達はそれよりも一層低く挨拶し、最初は前の人に、それから左の人に、それから右の人に、それから再び前の方に、再び左に、再び右に、とそんな順序に頭を下げた。コルサコーフはこの特異な遊びを眺めながら、眼を大きく開いて唇を嚙んだ。その挨拶とお辭儀とは約一時間半も續いた。やがて彼らが罷めると花毯を附けた頭丈な紳士が舞踏式は終りましたと告げて、音樂隊にミニユエット(譯註「一種の莊重」なる舞踏をいふ)を彈奏するやうに命じた。コルサコーフは嬉しくなつて、異彩を放たうと身構へた。若い婦人達の中で、とりわけ、彼がひどく惹きつけられた婦人が一人あつた。彼女は芳齡まさに十六歳くらゐ、高價な、しかもこつた趣味の衣類を著てゐた。そして嚴格な、威嚴のある容貌をしたかなりな年輩の紳士の隣に坐つてゐた。コルサコーフは彼女に近づいて、一緒に踊らせていたゞきたいと頼ん

だ。若い美人はどきまぎして彼を眺めてゐたが、何と云つて好いか分らないらしかつた。彼女の傍にゐた紳士は殊のほか眉をしたゞかしかめた。コルサコーフは彼女の決意を待つてゐた。ところが、花毯を附けた例の紳士が彼に近づいてきて、部屋の中央に彼を伴れ出して、物々しい體てかう謂つた。

「もし貴方、貴方は飛でもないことをなさいましたね。第一、貴方は婦人に對する三つの必要な禮儀もなしにお若い方にお近づきなさいました。第二に貴方は御自分から彼女あのかたをお選あびなさいました、ですけれどミニユエットぢやあ、權利は婦人にあるんで、男子の方にはないんですよ、そのために貴方は酷く罰せられなくちやなりません、つまり貴方は大鷲(御紋章)のついた大盃を飲み乾さなければなりません。」

コルサコーフは益々驚いた。瞬く中に客人達は彼を取巻いて、聲高に、即刻規則の履行を迫つた。ペートルは笑ひ聲と叫び聲とを聞きつけて、隣の部屋から出て來た。ペートルはかうした刑罰を受ける人を見るのが大好きだつたからである。群衆は彼の前へ道をあけたので、彼はその團圓の中に入つた。そこには、犯則者が立つてゐて、その前には宮廷の式部官が葡萄酒をなみ／＼ついだ大盃を手に支へてゐた。彼は犯則者を潔よく規則に従ふやうに、無暗に説きふせようとした。

「あはゝ！」ペートルはコルサコーフを見ながら謂つた。「捕まつたね、君、さあ、さあ、こんなこ

とに顔をしかめなさい、お呑みなさいよ。」

どうにも仕方がなかつた。哀れな伊達者は息をもつかず、その大盃の滓までもぐつと飲み干して、盃を式部官に返した。

「聴きたまへ、コルサコーフ」とヘートルは彼に謂つた。「君のそのズボン、わしさへ穿いたことがないやうな天鵞絨だね、ところが、わしは君よりか遙かに金持ちだ、それは贅澤といふものだよ、わしは君にや負けないから注意したまへ。」

この懲戒を聞いてコルサコーフはその團圓の中から抜け出さうとしたが、名状し難いほど喜んでゐる陛下や、面白がつてゐる居合はす人達の方へ、よろめいていつて、殆んど倒れさうになつた。この挿話は主なる出来榮の和合と興味とを害ねなかつたばかりでなく、却つて景氣をさへつけた。紳士達は頭を下げて足すりしたり、婦人達は挨拶を述べて熱誠に踵を打ち鳴らしたりして、その時が音楽の時間だなど、はちつとも注意を拂はなかつた。コルサコーフは一般の喜びに加る事ができなかつた。彼が選んだ婦人は、彼女の父なるガヴリール・アフアナシーヴツチ・レゼフスキーの吩咐によつて、イブラヒムに近づいた。そして彼女の青い眼を伏せながら、おずおず彼女の手を彼に與へた。イブラヒムは彼女とミニエットを踊つて、以前の場所へ彼女を連れ戻した。それからコルサコーフを捜して、彼を舞踏室から連れ出し、馬車に乗せて家へ還した。途々コルサコーフは辻褃の合は

ぬ事をぶつぶつ呟きだした。「呪はれた集會め！……呪はれた大鷲の大盃め！……しかし彼は程なく熟睡に陥ちて、どうして家まできたのか、どうして著物を脱いで床に入つたのか知らなかつた。彼は翌くる日、頭が痛んで、靴をずらしたり膝を屈けたりしてゐた事や、煙草の煙や花毯をつけた紳士の事や又は大鷲のついた大盃のことを茫んやり思ひ泛べながら眼を醒ました。

#### 四

今や私はガヴリール・アフアナシーヴツチ・レゼフスキーに就て寛大なる讀者諸君に御披露申さなければならぬのである。彼は廣大な土地をもつた貴族の舊い家柄の後裔で愛想がよく、鷹狩が好きで、大勢の召使を抱へてゐた。一口に云へば、彼は純粹の露西亞貴族であつた。彼自身の言葉を藉りて言へば、彼は獨逸魂を我慢することができなかつたので、彼にとつてはそれほど貴い昔からの習慣を家庭に保存しようとして努めてゐた。彼の娘は十七歳であつた。彼女はまた幼少い頃に母親を失つて、古風に育てあげられた。つまり彼女は家庭教師や乳母や遊び友達や女中達に取巻かれてゐたのである。金の刺繍はできたが、読み書きはできなかった。彼の父は何に依らず外國のものが嫌ひだつたにも拘らず、彼の家に暮してゐる俘虜の瑞典の士官から獨逸流の舞踏をおぼえたいといふ娘の希望には反對しなかつた。この功勞のある舞踏長は年の頃四十位の男で、右足をナルヴァ

(譯註)イリフインランドの南岸にある市街で、チャールス七世の擧げ

一六六

ツトやクーラントには甚だ不向だったが、左足は極めて難かしい歩調ステップをも驚くほど容易く敏活にやつてのけた。彼の弟子はその教へに好意を拂つてゐた。ナタリア・ガヴリローフナは集會といふ集會で最も上手な踊手としての評判が高かつた、これといふのも一つにはゴルサコーフがあつた。その過失をしでかした動機、つまり彼女の美貌のためでもあつた。そのゴルサコーフ君は翌日、ガヴリール・アアナシードツチの所へ詫びにきたが、清爽した、そして、優美な風をしたこの若い伊達者は、佛蘭西猿といふ頓智のいゝ綽名をつけてゐた尊大な貴族の眼の中に、好意が見出されなかつたのである。

それは祭日の事であつた。ガヴリール・アアナシードツチは親戚の者や友人の訪ねて来るのを心待ちに待つてゐた。古風な廣間には長い卓子が据ゑてあつた。客人達は彼らの妻や娘をつれてやつてきた、この細君達や娘達といふのは到頭陛下の法令によつて、又陛下御自身の模範によつて家庭的な拘禁から自由にされた人達である。(譯註)ベートル大帝の前の御代までは露西亞の婦人は殆んど、東洋式な集會といふもの)ナタリア・カヴリローフナは銀の盆に金の洋盃を載せて客に一人一人運んで廻つた。そしてどの客もどの客も銘々洋盃を飲み干しながら、昔はかやうな場合に受ける慣しだつた接吻が、流行らなくなつたといふことを残念がつてゐた。

彼らは食卓に坐つた。まづ最初、主人公の次には彼の舅で七十歳のポイヤール(譯註)第二の級の貴族なるボリス・アレキセイウツチ・リコーフ公が坐つた。他の客人達は家柄の舊い順に列んだが、これらの人達は年齢が尊重されてゐた幸福な時代を思ひ起すのであつた。男子は片側に、婦女子は他の片側に坐つた。食卓の端には流行おくれの衣物を著た女中頭——氣障な皺くちやの三十歳ばかりの小さな婦人——と、色の褪せた青い軍服を著た俘虜の舞踏長とがいつもの場所を占めた。夥多の皿に掩れた食卓は、氣遣しげな多くの家族の人達に取巻れてゐたが、なかにも厳格な頭をして大きな胃と高慢な不動性をもつた執事が目に立つた。食事が始まつた數分の間は、われわれの舊式な料理法の製造品に全く夢中になつてゐた。皿の物音と匙のかち合ふ音とのみが全體の沈黙を妨げてゐた。やがて主人公は客人達が心地よい會談で樂む時がきたのを見ると、振返つてかう訊ねた。

「ところで、エケモーフナはどこにゐるんだい、こゝへ呼んでおいて」

數人の召使達は向うの方へ駆け出さうとしたが、その瞬間に、花や金箔を飾りつけた襟の、絹地の寛衣ガウンを著て、白く赤く顔を彩どつた婆さんが歌を唄ひながら、そして踊りながら這入つてきた。彼女の容子は一坐に満足を與へた。

「今日は、エケモーフナ」とリコーフ侯は謂つた。「どうだい」

「有りがたう存じます、お蔭様で、べちやくちやと、かうしてまだ歌つたり跳ねたりして、情人を捜してゐるんです。」

一六八

「どこへお前は行つてゐたんだ、お馬鹿さん」と、主人公は訊いた。

「貴方、おいとお客様のためやら、今日の祭日のためやらで、めかしてゐたんですわ、獨逸流の眞似をして皆様のお笑草になるやうにといふ陛下の御命令ですもの、うちの旦那様のお吩咐ですもの。」

かう謂つたので、どつと大きな笑ひ聲が起つた。そしてお馬鹿さんは主人公の椅子の背後に陣をとつた。

「このお馬鹿さんは出鱈目を言つてゐるんですがね、時には本當のことを謂ふこともありますのよ」と、主人公の一番の上の姉で、主人公が大變尊敬をしてゐるタチヤナ・アフアナシーヴナが謂つた。「實際のところ御覽の通りな風をしてゐちや、誰の眼にだつて滑稽に見えるにちがひありませんわ、けれどこれからね、紳士方が鬚（譯註）西歐羅巴の風習を露西亞に輸入したといふ熱心あまり、ペイトリになつて短い下衣（カクアイン）を着てゐるんです、サラファン（譯註）露西亞の農民衣服）だの小娘のリボンだの、ボ（譯註）露西亞婦人特有の頭飾りである）ことなんぞいふのは、勿論、無用なことですわ！ 今日美人を見るのは情けないと同時に可笑し

いものですわ、髪の毛といつたら麻屑のやうにちぢれた髪の毛に油をつけたり佛蘭西の髮粉をこつてりつけたり、腰を今にも二つに折れ相なくらゐ締めあげたり、袴を籠骨であんまり膨らませすぎで、躰軀を横にして這入らなけりやならない位にしたり、入口を通るのにこゝまなけりやあらん位胸を張つたりしてゐるんですもの、あゝいふ人達は立つことも坐ることも、息するをもてきませんわ、——ほんとうに殉難者ですわ、哀れな鳩さん達！」

「おゝ、ダチアナ・アフアナシーヴナの伯母さん！」と謂つたのはキリラ・ペトロウッチ・テイ——といふ、前知事をしてゐたリアザン縣で多少卑劣な手段を用ひて三百人の農奴と若い妻とを得た男であつた。私一人の考へて云つてみれば、私の妻は思ふがまゝに著飾れるもするし、好きな著物を著られもするんです、妻は毎日新しい著物を注文しないで、殆ど新しい前からある著物を著つくせないほど貯めてゐるんですからね、むかしは、祖母さんのサラファンが孫娘の持參金の足しになつたもんですが、此頃ぢやあ、全然萬事變つてゐます、つまり今日奥さんが著ていらつしやる著物は、明日になりや女中が著てゐるといふ始末なんですからね、どうなることとせう？ 悲しい哉、露西亞貴族の衰亡ですなあ。」

かう謂つて彼は溜息を吐いて、かのマリア・イリイェニシユナをぢろりと眺めた。彼女は彼が論じた往時の賞讃をも、現代風潮の非難をも全然好まないらしかつた。他の若い婦人達もそれぞれ同じ

不快を懐いてゐたが、黙つてゐた、といふのは、當時控え目であるといふことが、若い婦人に缺く可からざる品性だと考へられてゐたからである。

「すると誰の罪になるかね！」とガヴリール・アフアナシーヴッチは泡立つ飲料水を大盃に充たしながら謂つた。「それはわれわれ自身の落度ではありませんか。若い婦人達が馬鹿げた眞似をしてゐる、するとわれわれがそれをおだてゝゐるんだ。」

「しかし私達の希望と相談もしないで、いつたい私達に何ができませんう！」とキリラ・ペトロヴッチは答へた。「人は自分の細君を屋根部屋に閉ぢこめてゐたいでせうが、太鼓が鳴らされて、細君達は集會に来るやうに呼び出されるんです。良人は鞭を求めますが、妻は著物を求めます、おゝ、これらの集會！ 神様はわれわれの罪過に對する罰として、われわれに集會といふものを與へておられるのです。」

マリヤ・イリイ・エニシユナは恰も針の上にあるかのやうな思ひをして坐つてゐた。彼女の舌は言ひ出したくつてむづむづしてゐた。やがて彼女はもう怵へきれなくなつたので、良人の方を向いて、「貴女は集會でどんな悪い事をこらんになりました」と、酸い微笑を泛べながら訊いた。

「わしが集會で見た缺點といふのはかうなのだ。」と昂奮した良人は答へた。「集會が始まつてからといふものは、亭主が細君を支配することができなくなつたのだ。細君は聖徒の『妻は良人を畏敬

せよ」といふ言葉を忘れてしまつてゐるんだ。細君達はもはや家事なんぞに離離しないで、新しい著物の事に汲々としてゐるんだからね、どうして良人を嬉しがらせるかといふ事は考へないで、どうしたら下らない士官の注意を牽きつけられるかといふことばかり考へてゐるんだ。それで、露西亞の貴婦人が獨逸の喫煙家達や女工連と交つて、お前、相應しいものだらうか、さうして夜更まで若い男と踊つたり話し合つたりするなんて事を前に一度たつて聞いたことがあるかね、それも親戚の者だつたら、まあいゝとしてさ、見ず知らずの他人とだ、まるで知己でもなんでもない人達とだよ！」

「ちよつと一言言ひますがね、狼は間近かにゐますぜ。」とガヴリール・アフアナシーヴッチは眉を顰めながら謂つた。「打明けて言ひますが、さういふ集會は、私の趣味にや合ひません、君はどこにゐるのか自分でも辨まへないで誰か泥酔者を誰かなくつてしまふとか、或は泥酔つて人々の物笑ひになるとかするんだからね。それにやくざ者が娘さんに飛んでもない眞似をもするといけないから眼を大きくして氣をつけてゐなくちやならんしさ。昨今の若い者はこれ以上とても悪くはなれまいといふほど墮落してゐるんだもの、例へば、あの死んだエヴガラフ・セルゲイウッチ・コルサゴフの息子を御覽なさい、先達の集會に私が赤面してしまつたくらゐナターシャのことで、大騒ぎをさせたつて、翌くる日私は誰か中庭へずんずん馬を驅つてくるのを見て、一體全體誰だらう、アレキ

です。イヴァン・エフガラフオウツチでした！門のところて馬車を駐めてもゐられず、石段まで徒歩で歩いてくることもできなかつたんです、いきなり跳び込んできて、お辭儀をして、まあ、ほんとうにお喋りしたよ！エケモーフナのお馬鹿さんはそれをまた非常に面白く眞似するんだ、ついでに、お馬鹿さん、外國猿の模倣をしてみなさい。」

馬鹿のエケモーフナは皿の蓋を攫んで、帽子のやうに腋の下に抱へた。そして屈んだり、足ずりをしたり、四方八方へお辭儀をしたりして、「旦那様……お嬢様……集會で……失禮を」と繰返し始めた。いつまでも長びく笑ひ聲は、再び客人達の悦びを明らかにした。

「まるでコルサコフ、そつくりだ」とリーコフ老候は笑ひ泣きの涙を拭ひながら謂つた。そして、沈靜が再び戻つた。「しかし何故事實をかくすのだらうね。外國から神聖な露西亞へ幫間となつて歸つたのは、あの男が最初でもなく、最後でもないだらう。何を若い者は外國で習つてくるんだらう？足ずりすることだの、てんで譯も分らない事をべちやくちや喋舌ることだの、他人の細君のあとを追ひ廻す事だのそんなことを習つてくるのかなあ、外國で教育を受けてきた若い者は皆、(情けないことだ！) 皇帝の黒奴のやうだと申分がないんだかね。」

「お、候爵」と、タチヤナ・アフアナシーヴナは謂つた。「妾、あの人を見ましたわ、ほんとうに

よつく見ましたのよ、なんて、まあ、おつかない口附なんてせうね！妾、ほんとうにおつかないわ！」

「さうとも」とカヅリール・アフアナシーヴチが謂つた。「あの男は眞面目な、禮義正しい男だよ、全く浮氣者ぢやない……だが、ほら、門から中庭へ馬車を牽き込んできたのは誰だらう、まさか又外國猿ぢやあるまいねえ、何故お前達はほんやり立つてゐるんだい、畜生ッ」と彼は下僕達の方を振り向きながら言ひつゞけた。「出て行つて、這入つて來ないやうに止めなさい、さうして今後も……」

「お嬢さん、夢を見てゐらつしやいますの」と馬鹿のエケモーフナは遮つた。「それとも眼が見えませんの、朝廷の掃てすよ——陛下が行幸なすつたんですよ。」

カヅリール・アフアナシーヴチは急いで食卓から起ちあがつた。誰も彼も窓際へ駈け寄つた。さうして陛下が召使の肩に倚りかゝりながら石段を登つて來られるのを彼らは確かに見た。大混雜が起つた。主人は、ペートルを迎ひに駈け出し、召使達は恰で氣が狂つたかのやうに彼方此方と駈け廻り、客人達は仰天してしまつてゐた。なかにはどうしたら能るだけ速く家へ還へれるかと考へる者もあつた。突然、ペートルの雷鳴のやうな聲が控室の中で鳴り響いた。皆黙つてしまつた。すると陛下は御自分の傍に喜んで附添つてくる主人公を伴れて、這入つてきた。

「皆さん、今日は！」と、ペートルは愉快さうな面持で謂つた。

「皆丁寧な時儀をした。陛下の鋭い眼は主人の若い娘を群衆の中に捜し求めた。彼は彼女を自分の傍へ呼び寄せた。ナタリア・ガヴリロフナはかなり大膽に進んだが、彼女の耳はおろか肩のあたりまで眞裸になつてゐた。」

「日に日にあなたは綺麗になるね」と陛下は彼女に謂つて、いつもの習慣に従つて、彼女の頭に接吻した。それから客人達の方へ振り向いて、彼はかう附け加へた。お邪魔しますね、食事最中だつたんですね、さあ、もう一度お坐りなさい、それからガヴリール・アフアナシーヴチ、わしに少し大茴香酒ウニキョウをくれ」

主人公は頑丈な執事の所へ飛んで行つて、彼の手から大盃を引たくり、自ら金の大盃に注いで、それを陛下に頭を下げながら捧げた。ペートルはブランデーを飲んでビスケットを喰べた。そして再び客人達に食事をつゞけてくれと頼んだ。陛下の御臨席によつて名譽を博した食卓に、とてもちつとしてゐられなかつた一寸法師と女中頭とをのぞく他は、皆夫々もとの席に戻つた。ペートルは主人の側に坐つて、少しスープを呉れと言はれた。陛下の従僕は象牙を鑲めた木製の匙と、緑色の象牙の柄の附いたナイフとフォークとを陛下に渡した。といふのは、ペートルは自用のナイフやフォークや匙の外は断じて用ひなかつたからである。一分前にはあのやうに騒々しく陽氣であつた中食も、今は無言に、氣兼ね勝ちであつた。主人は敬意と歡喜との爲めに、何一つ喰べなかつた。客

人達も亦遠慮深く、さうして陛下が俘虜の瑞典人と千七百〇一年の戦役について獨逸語で話しておられるのを恭々しく、注意を拂つて聽いてゐた。數度陛下に質問された馬鹿のエケモーフナはおずおずとぶつきら棒に答へてゐたが、注意してみると、彼女生來の愚味をちつとも表してはゐなかつた。到頭中食は終りに近づいた。陛下が起ち上つたので、皆客人達もその後につゞいた。

「ガヴリール・アフアナシーヴチ」と陛下は主人に謂はれた。「わしは君一人に、一言談したい事があるんだがねえ」そして彼の腕を取つて、陛下は彼を客間へ伴れ込んで、扉に錠を下ろした。客人達は意外な御臨幸について、ひそひそ呷き合ひながら、食堂に残つてゐたが、無分別な事をしてかしてはならぬと氣遣つて、彼らは間もなく、主人にこの饗應に對するお禮も言はないで一人去り二人去つて、解散してしまつた。彼の舅や娘や姉は客人達を入口の所まで、物靜かにそつと導き出しておいて、陛下の出て来るのを待ちわびながら食堂にしよんぼり残つてゐた。

## 五

約一時間も経つた頃、扉が開いて、ペートルが出てきた。彼は勿體らしく頭を傾しげで、リコーフ侯とタチャナ・アフアナシーヴナとナターシャとの三人の時儀に應じながら、さつさつと玄關へ出て行つた。主人は陛下にその赤い外套を渡し、櫃へ案内した。そして石段の上で今一度自分の受



けた光榮を陛下に謝した。

ペートルは出て行つてしまつた。

食堂に還つてきたガヴリール・アフアナシーヴチはひどくひどく困つてゐるらしく見えた。彼はぶりぶりしながら女中に早速食卓を清めるやうに吩咐けて、ナターシャを彼女の居間へやつた。そして彼の姉と舅とに話さねばならぬことがあるからと言つて、彼がいつも食後に休息む寢間へ彼ら連れ込んだ。老候爵は極の寢臺の上に寢ころび、タチヤナ・アフアナシーヴナは古い絹張りの肘掛椅子に腰を下ろして、足置臺おしおきだいに足をのせた。ガヴリール・アフアナシーヴチは扉に鍵をかけて、リコーフ候の足先の寢床の上に腰をかけた。そして低い聲で話し始めた。

「今日陛下がおいでなすつたのは、別に何んでもなかつたんです、まあ、私と話がしたかつたからなんだからと思はれますね」

「貴方、どうして分つて？」とタチヤナ・アフアナシーヴナが謂つた。

「陛下はお前を何かの職に任命なすつたのかね」と彼の舅が謂つた——「もう任命されてもいゝ時分だからね、それともお前を大使にでもしてやらうと仰しやるのかね、どうしてさうぢやないのぢや？ 僅か書記官くらゐでおかれる筈がないぢやないか——外國へ派遣されたほどのすぐれた人達を」

「なあーに」と婚は眉を擡めながら答へた。「私なんぞは舊弊の人間ですよ、正教派の露西亞貴族といふものは恐らく、成金や麵麩屋や異教徒よりやあずつと價值があるにはあるんでせうが、私達の勤務なんていふものは今日ぢや何のお役にも立ちません、だが、これはどちらにしたつて、問題ぢやありませんがね。」

「ぢや、貴方、何でしたの」とタチヤナ・アフアナシーヴナは謂つた。「あんなに長い間何を談していらしたの、貴方は何か不幸におびやかされていらつしやるやうぢやありませんか、あーあ、どうぞ其慶事のありませんやうに！」

「不幸なことぢやないのです、本當ですよ、だが、打明けますが、よつく考へなけりやならん事件です。」

「ぢや、貴方、どんな事なの？ どんな事に關してゐるんですの？」

「ナターシャに關してゐるんです、つまり陛下は結婚を申し込んでおいでなすつたんです、」

「あーあ、有りがたいことねえ！」とタチヤナ・アフアナシーヴナは十字を切りながら謂つた。「處女が齡ごろで、そのうへ媒酌人があつて、花婿がゐないつて筈はありませんわ、神様は愛と智慧とをその人達にお授けなさる、大變な光榮ですわね。どなたのために陛下は結婚を申し込んでいらしたんですの？」

「フ、ン！」とガヴリール・アフアナシーヴッチは叫んだ。「誰のためにだつて？、さうだねえ——誰だかねえ！」

「ぢや、誰だね」とそろ／＼居眠りを始めてゐたリコーフ侯は繰り返した。

「當て、御覽なさい」とガヴリール・アフアナシーヴッチは謂つた。

「まあ、貴方」と老婦人が答へた。「どうして當てられませう、宮中には年頃の人は澤山ゐて、その人達は誰も彼もナターシヤを貰ひたがつてゐるんですもの、ドルゴルウキーぢやなくつて？」

「いゝえ、ドルゴルウキーぢやありません。」

「まあ、ありがたいこと、あの人はあんまり傲慢ですものね、シチエンなの、トロエコーロフなの」

「いゝえ、そんな人達ぢやありません。」

「私だつてどちらも好いぢやゐないのよ、あの人達は輕薄で、それに獨逸魂があんまり滲みこみすぎてゐるんですもの、ぢやあ、ミロ斯拉ウスキーぢやなくつて？」

「いゝえ、違ひます。」

「まあ、ありがたい、あの人はお金持ちで、薄野呂ですわ、ぢや誰なの？ エレチキーなの、ルゾオーフなの、まさかラゴウズンスキーぢやありませんまいね、他にもう私考へ出せませんわ、ぢや、あの陛下はどなたにナターシヤをお望みなんですの」

「黒奴のイブラヒムにさ」

老婦人はあつと叫んで、両手を握り合せて。リコーフ侯は枕から頭をあげて、驚いてかう繰り返した。

「黒奴のイブラヒムにだつて？」

「まあ、貴方！」と老婦人はおろおろ聲で謂つた。「可愛い兒を臺無しにしぢやいけませんよ、憐れな小さいナターシヤを、あの黒坊の手に渡しぢやいけません」

「どうして陛下にお拒絶ことわりすることができませう？」とガヴリール・アフアナシーヴッチは謂つた。「陛下が私達並に私達一家一門を、その返禮に引立てゝやるとお約束なされたんです。」

「なんだつて？」と今はもう全く眼の醒めきつた老侯爵は叫んだ。「孫娘のナターシヤを、買ひ入れた黒奴と結婚させようつていふのか」

「イブラヒムは普通の家柄の者ぢやないんです」とガヴリール・アフアナシーヴッチが謂つた。「黒奴の سلطان の息子なんです、回々教徒が囚人として、コンスタンチノーブルで競賣に附したので、で、わが國の大使がそれを買つてきて、陛下に差しあげたんです、あの黒奴の一番上の兄が莫大な身代金を持つて露西亞にきて——」

「ポーヴァ・コロレウイチやエロウストラナ・ラザレヅチの（譯註）露西亞の傳説の一つにあつて二人の主要人物のことである物語は聞いて

知つてゐるよ、」

「ね、ガヴリール・アファナシーヴチさん！」と老婦人は口を挟んだ。「それよりか、貴方、陛下の御申込みに何んと御返事を申し上げたか、お話しなさいよ、」

「私は陛下の權勢の下にあるんだから、何事も陛下の命に従ふのは私の義務ですつて言つたさ」

その刹那に、穩やかならぬ物音が扉の裏で聞えた。ガヴリール・アファナシーヴチは扉を開けに行つたが、何かつかへてゐる物があるやうな氣がした。彼は力をこめて扉を押すと、扉は開いた。そして彼らはナターシャが紅に染つた床の上に氣を失つて倒れてゐるのを見た。

彼女の心は、陛下が自分の父を連れて一間に閉ぢこもつた時から沈んでゐた。ある豫感が自分の身に關した事であるといふことを彼女に叫いたのであつた。そしてガヴリール・アファナシーヴチが、彼女の伯母と祖父とに談したい事があるからと言つて、お前は退つておいでと吩咐けられた時には、彼女は女性の好奇心な本能を抑へきれないで、奥まつた部屋を通り、寢室の入口へ、そつと急ぎ足に忍び寄つて、悉くこの恐ろしい會談を一言も聞き漏すことなく聞いてしまつた。彼女が父親の最後の言葉を耳にした時、憐れな乙女は氣が遠くなつて、打倒れた。そして頭部を彼女の持參金の入つてゐる鐵張りの箱に叩きつけたのであつた。

召使達は急いでその場に駆けつけた。ナターシャは擔がれて彼女の居間に運び込まれた。そして寢床に寝せつけられた。少時して彼女は息を吹き返して、眼を開いたが、父の顔も伯母の顔も見分がつかなくかつた。猛烈な熱がてた。彼女は皇帝陛下の黒奴について、結婚について讒語を喋舌つてゐたが、不意に、悲しげな鋭い聲で叫んだ。

「ヴァレリアンさん、いとしいヴァレリアンさん、あたしの生命を救つて下さいまし！ あれ、あそこにあの人達が、あれ、あそこにあの人達が……」

タチャナ・アファナシーヴナは自分の弟を不安さうに見遣つた。弟は眞蒼になつて、唇を噛んでゐたが、黙つて部屋を出て行つた。彼は老侯爵の所へ戻つて行つた。老侯爵は、階段を登ることかできなかつたので、階下に残つてゐたのである。

「ナターシャはどんな具合だね」と彼は訊いた。

「大變いけません」と悲嘆に沈んで父は答へた。「思つたよりかよつほど悪いんです、人事不省です、そしてヴァレリアンのことを夢中になつて喋舌つてゐます」

「そのヴァレリアンつて、いふのは誰のことだい」と氣遣しさうに老人は訊いた。「弓術師の件で、お前が家で養つてやつてゐたあの孤兒のことかい」

「私の災難と、同じです！」とガヴリール・アファナシーヴチは答へた。「暴動があつた際にあれ

の父親が、私の生命を援つてくれたのです、さうして悪魔が私の家へあの呪はれた若い狼を引取らせるやうにしたのです。二年前のことでしたが、あのヴァレリアンが自分から志願して軍隊へ入籍した時に、ナターシャは暇乞ひをしながらひどく涙を流すので、ヴァレリアンは化石したやうに突立つてみましたつけ。こりや怪しいなと私も思つたので、そのことを姉に話したことがあります。けれどもそれ以来、ナターシャはヴァレリアンの名も口にしませんし、何事もあの男のことについて聞きもしませんでした。私はあの娘が忘れてしまったものだと思つてゐたんですが、さういふ譯ぢやなかつたといふことが分りました、しかしもう決めます、娘を黒奴に結婚させます。」

リーコフ侯はそれを反駁しなかつた。といふのは、無駄な事に違ひなかつたからである。彼は家へ歸つた。タチャナ・アファナシーヴナはナターシャの寢床の側に附添つてゐた。カヴリール・アファナシーヴチは醫者を呼びに使を遣つておいて、自分の居間に鏡を下した。そして、家の中はすべてが、静かで、物悲しかつた。

意外な縁談は、全くガヴリール・アファナシーヴチと同じやうに、イブラヒムをも驚かした。それはこんな風にして起つたのである。ペートルはイブラヒムに事務をさせながら、彼にかう謂つた。

「おい、わしの眼には、お前は何か落膽してゐるやうに見受けるが、お前の望みをあげすけに謂つ

てみないか、」

イブラヒムは今の境遇にすつかり満足しきつてゐるので、これ以上何一つ善くなりたいなぞとは思つてゐませんと、陛下に申し上げた。

「何も理由なしにお前がぼんやりしてゐるんなら、それでよろしい。」と陛下が謂つた。「お前がどうしたら嬉しいがるか、わしはぢやあんと知つてゐるよ」

事務の片が附くと、ペートルはイブラヒムに訊いた。

「先達の會にお前がミニユエツトを踊つたあの若い令嬢は氣に入つたかい」

「あの令嬢は素的に美しうございましたね、陛下、それに善良な、内氣な娘さんのやうですね、」

「ぢやあ、わしが、お前とあれとが昵懇になるやうに、とりもつてやらうかな、あれとなら結婚するだらうね。」

「陛下、私が？」

「まあ、お聴き、イブラヒム。お前は世の中に獨りぼつちの男だよ、氏素性もなく身寄りの者もなく、わしをのぞいぢやあ、誰にも彼にも門外漢だ、もしわしが今日にでも死んだら、可哀相なネグロよ、明日からお前はどうなるだらう。わしの存命中にお前は取決めて置いて貰はなくぢやならん